座談会「中村哲先生のスピリットを継承する」記録

2022 年 3 月 13 日（日）　九州大学附属中央図書館　4F　きゅうとコモンズにて
主催 ：「中村哲先生の志を次世代に継承する九大プロジェクト」

座談会コーディネーター ： 當眞千賀子 九州大学人間環境学研究院教授（発達心理学）
進行 ： 堀　優子 九州大学附属図書館ｅリソース課長
記録 ： 九州大学附属図書館
※ この記録に登場する参加者の所属等は、座談会が開催された 2022 年 3 月当時のものです。

（2022-12-27）

≪開会 ： 趣旨説明・参加者紹介≫

堀　　：おはようございます。

本日は、お忙しい中、座談会「中村哲先生のスピリットを継承する」に、ご参加いただきましてありがとうございます。本日、皆さまを九州大学にお迎えすることができて、大変感激しております。私、本日の全体の進行を務めさせていただきます、九州大学附属図書館の堀と申します。至らぬ点もあると思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

「中村哲先生の志を次世代に継承する九大プロジェクト」は、ペシャワール会様のご協力の下始動して 1 年、中村哲医師メモリアルアーカイブ、中村哲著述アーカイブ、中村哲記念講座を中心に取り組みをしてまいりました。その中で、同じく中村先生のことを伝えていきたい、つないでいきたいという、母校の福岡高校・九州大学の生徒さん・学生さんたちのグループともつながりができました。中村先生と直接関わったことのない私たちが、中村先生のことを伝え、つないでいくために、共に活動をしてこられた方々、そして、関わってこられた方々、その方々と出会い、語り合い、中村先生のことを深く知り、さまざまな視点から分かち合いたい、そういう思いで、この場を設けさせていただきました。

短い時間ではありますが、たくさん語らって、多くのものを持ち帰っていただければと思います。よろしくお願いいたします。それでは、開会にあたりまして、本学の教育担当、副学長で、中村哲記念講座を担当しております、鏑木政彦先生より、ごあいさつ申し上げます。

鏑木　：ただ今ご紹介いただきました、鏑木でございます。

本日は、座談会「中村哲先生のスピリットを継承する」にご参加いただきまして、本当にありがとうございます。伊都キャンパス、福岡の西のほうでありますけれども、すぐに来られるという場所ではございませんが、こうして多くの方に来ていただきまして、本当にありがたく思っております。今、座談会の趣旨を堀さんにご紹介いただきましたけれども、いろんな立場、いろんな距離、いろんな関わり方を持って、中村哲先生のこのプロジェクトに、今後も関わっていきたい、何らかの形でこれを継承していきたい、そういう思いを持った方々が、この場に集まってくださいました。

高校生も、こうして来てくださったこと、とてもうれしく思っております。今日は、いろんな立場にある、そうした方々の話に耳を傾けて、そこからちょっと元気をもらって、これからどうしていけばいいのかを考えるヒントを持ち帰っていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。私のあいさつは、以上とさせていただきます。

堀　　：それでは駆け足になりますが、私のほうから、本日お集まりいただいた方々を、簡単にご紹介をさせていただきます。お呼びしましたら、お立ちになって、皆さまにお顔を見せていただければと思います。拍手は、最後にまとめてで、お願いします。
まず、ペシャワール会と PMS 支援室から。村上優会長、PMS 支援室長藤田千代子さん。PMS 支援室から、山下隼人さん、籾井孝文さん。ペシャワール会理事で、多くの中村先生の著書を発行された、石風社の福元満治さん。ペシャワール会からオブザーバー参加として、事務局長の古川正敏さん、支援室の西岡和子さん。現地ワーカーの OB の小林晃さん。
中村先生の同級生で、ご親友の宮﨑信義先生。宮﨑先生には、会の中ほどに、学生時代の中村先生などについて、少しお話し頂くことにしております。
続きまして、メディアの立場から中村先生のことを伝えてこられた方々、日本電波ニュース社の谷津賢二さん。ＫＢＣ九州朝日放送の臼井賢一郎さん。朝日新聞社の佐々木亮さん。西日本新聞社の中原興平さん。日本電波ニュース社からは、オブザーバー参加として、上田未生さんにもお越しいただきました。
ペシャワール会事務局のすぐ横、春吉小学校のほうで、小学生に向けた授業をされている、武内厳太先生。母校福岡高校で伝える取り組みを始めた、福高生、「ペシャワール班」の皆さん。九州大学のほうで、哲縁会というのを立ち上げられました、九州大学の学生の皆さん。九州大学でこのプロジェクトに関わっております、九州大学の内藤敏也理事。鏑木政彦先生、當眞千賀子先生、久保智之先生、飯嶋秀治先生。本日は、このようなメンバーに集まっていただきました。
お一人、ご紹介を忘れておりました。九州大学で、国際発信というところでプロジェクトに関わってくださっている初見かおりさん。皆さまにお配りしました、英文のリーフレットですね、初見さんがご尽力くださって、ようやく完成をいたしました。
それから、紫色の名札を付けて周辺に立っております図書館のスタッフが、お世話をさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

≪最近の現地活動についての報告 ： ペシャワール会村上優会長より≫

堀　　：座談会に先立ちまして、ペシャワール会の村上会長から、最近の現地活動の状況について、ご紹介を頂きたいと思います。よろしくお願いいたします。

村上　：最近のといいますと、皆さんが一番関心があるのは、8 月 15 日にタリバンが復活をしたという以降のことだろうと思います。8 月 15 日までは、普通のとおりに、PMS の活動は、中村先生亡き後も継続されていました。ただ、15 日、政変が起こったということで、いったんは活動を休止しましたけ

れども、医療は 1 週間後、農業は 2 週間後、用水路のほうは、全体としては準備は整っていたんですが、お金の問題がございまして、2 カ月ほど後に活動は再開をしております。それで 3 事業とも、ある意味では普通どおり、活動が、できているんです。

一番の問題点というのは、干ばつが、2010 年当初から、非常にシビアな状態があって、なおシビアになって続いていたと。それから、2 点目は、政変があった後に経済制裁が起こって、そして、お金を送ることができなくなったことです。もっぱら、われわれのほうは、事態を重視して、いろいろな所に働き掛けをしておりましたけれども、お金のほうは、10 月と 12 月に、相当のお金を送ることができました。これは、どうやってって聞かれたら、ちょっと、そんなに簡単にはいかないんですけれども、とにかくお金は入れることができました。

そのために、活動そのものは、食糧支援が、一番危機的な状態として表れた。この干ばつのことと経済封鎖で、非常に、生活が立ちゆかなくなっていって。それでなくても食糧がないところに、食糧が欲しい人すらも買うことができないという状態で、飢餓、それから餓死という問題があって、国民の半分以上に影響が出ていて。初めの報告では、800 万人を超えて、ものすごいシビアな飢餓があるという報道が出ておりましたが。それに対する食糧支援も、この 1 月にはできるように準備をいたしまして、2 月の初めからは展開に行ったと。そういう意味で、やれることはやっていこうということで、ナンガルハル州を中心にしてですけれども、活動は、向こうで活発に行われています。

一番よい点では、治安が、圧倒的によくなったということです。8 月が起こった後、10 月、11 月ぐらいまでは、何かしら不穏な動きがあったんですけれども、12 月ぐらいからは、特に治安がよくなりましたので、われわれ自身の活動は、しやすくなっていったというふうに思っております。ただ、国際世論のほうは、まだまだ厳しいものがあって。なかなか、タリバン政権を介して何々をするっていうことは、ほぼできていない状態で。アフガニスタン中央銀行の資金も凍結されたままですし、それから、世界銀行も、一応は、人道支援に関してはお金を拠出するってのがあったんですけれども、行政を握ってるタリバンからは、迂回してしかできないっていうことで、ある意味での混乱は、まだ続いてるだろうと思います。

その中、中村先生がおっしゃるように、「水が善人・悪人を区別しないように」ということをモットーに、とにかく事業は、われわれは、いろいろな状況の変化にもかかわらず、現地の人々の目線で継続できているということを報告させていただきたいと思います。以上です。よろしいですか。

堀　　：ありがとうございます。

それでは、3 点だけ、連絡事項をお伝えいたします。本日、コロナ禍ではありますが、このように対面で開催できたこと、大変うれしく思っております。感染対策として、マスクの着用にご協力ください。また、途中、休憩を入れて、換気をいたしますので、ご了解ください。それから、2 点目、本日の座談会、記録のために録音をさせていただきます。文字起こしをしまして、記録として保存をしますとともに、参加者の皆さまには共有したいと思います。そして、その中のエッセンスを、報告として、著述アーカイブから公開の予定でございます。その際には、皆さまに内容をご確認いたします。3 点目、スタッフが、写真を撮らせていただきます。広報等に使用することがありますので、写真を外部に出してほしくないという方がいらっしゃったら、スタッフまでお申し出ください。以上です。

それでは、いよいよ座談のほうに入っていきたいと思います。ここからは、當眞千賀子先生にバトンタッチいたします。

當眞　：皆さん、おはようございます。

九州大学の當眞と申します。私の専門は発達心理学で、鏑木先生と一緒に副学長を務めながら、この会に関わらせていただいて、このご縁が頂けること、とてもありがたく思っています。

今日は、これだけの方々が集まってくださっていて、報道の方々にも入っていただいていて。本来であれば、大々的に、撮影、取材、報道につなげていくに値する集まりだと思うんですけれども、あえて今回は初回ということで、報道の方々にも報道という役割を、その荷を下ろしていただいて、一緒に同じ立場で語り合う場が一度は設けられると、急がば回れではないですが、今後の展開の仕方がかえって豊かになるのではないかなということで。本当に素晴らしい報道のかたがたに来ていただきながら、報道が入らないという会になります。その代わり、記録を、九大のほうで、写真も撮らせていただきたいと思いますので、先ほどありましたように、気になる方、写り込みが、公開が困る方は、ぜひ遠慮なくおっしゃってください。

本日の趣旨は、何か一つの目標に向かって結論を出そうということではなく、中村先生ご自身と、または中村先生の仕事やペシャワール会の活動と、何らかの形で出会って、それが大事だと思っている方が、ここにこうして集ったことを大事にするというということにしたいと思います。

大学の役割のひとつは、著述も含めたアーカイブ、リポジトリを蓄積し、その一つの集積の場になっていくということ。それから、先ほど紹介がありました、記念講座という形で、教育の一環として位置付けていくこと。そしてもう一つは、何らかの形で、こういうふうに、つながりのある人たちが出会って、お互いの活動に対してのいろんな気づき、学びを得る場を提供することではないかなと思っています。

ですので、今日は、特に何か目標を持ってというよりは、集ったこと、出会ったこと、気になっていること、語り合ってみたいことを、遠慮なく語り合う時間が生まれればいいなと思っています。

このリーフレットの中に、グループが書いてあるんですね。図書館スタッフが、工夫して、中村先生の活動にゆかりのある場所の名前をグループ名にしてあると思います。自分がどのグループかは、虫の絵が付いていると思いますけれども、それと対応しているようです。グループごとにお席を準備しておりますので、そこに分かれていただいて。まず最初の、どれぐらいでしたっけ、時間。1 時間弱ですかね。

堀　　：まずは、11 時 30 分までを座談とします。

當眞　：（座談グループで）語り合っていただければと思います。お席は、後ろのほうに。

感染予防ということもあって、広がっていますけれども。どうぞ、お名前とグループ名を確認していただいて、早速ですけれども、お席を移動していただいて、語り合いの時間を楽しんでいただければと思います。

（了）

座談会「中村哲先生のスピリットを継承する」記録

座談グループ ： ティリチ・ミール

進行役 ： 飯嶋秀治 九州大学人間環境学研究院准教授（比較宗教学、文化人類学）
少人数セミナー「中村哲の仕事を読む」を担当

参加者 ： 村上　優 ペシャワール会会長・PMS 総院長・医師（精神科医療）
中原興平 西日本新聞社 記者
邊見紗来 福岡高校 2 年 ペシャワール班
木原秀将 九州大学医学部 1 年・哲縁会
鉾立春響 九州大学医学部 6 年・中村哲先生の想いを繋ぐ会/哲縁会
樋口　響 福岡高校 1 年 ペシャワール班 （当日は欠席のため、インタビューシートのみ）

座談会コーディネーター ： 當眞千賀子 九州大学人間環境学研究院教授（発達心理学）

記録 ： 九州大学附属図書館

※ この記録に登場する参加者の所属等は、座談会が開催された 2022 年 3 月当時のものです。

飯嶋　：九州大学で教員をしております飯嶋といいます。特にさっきの紹介のところで「哲縁会（てつえんかい）」の人とか高校生の人とか、まあ一山で紹介だったので、どういう方なんだかよく分かってないっていう状況があるので、最初は自己紹介と、あとは、どういう経緯でここに来たのかっていうことと、あとはどれほど期待して、これからお話するのかっていうこの三つぐらいを、最初だから1人最大4分ぐらい持っていって、2週目ぐらいにお互いが言ったことをちょっと話ができたらいいだろうみたいな。もちろん会長さんを目の前にして、4分でとはとっても言えないですけど、そういう形でさせていただいてよろしいですか。じゃあ、村上さんどうぞ。

《自己紹介、中村哲先生との関わり、この座談に期待すること》

村上　：村上と申します。中村先生とは、学年が（卒業が）一年下の医学部の卒業でして、彼は最初は、精神科の医師でスタートしたんですが、佐賀にある国立肥前療養所という所で出会ったのがほぼ初めてです。その後、意気投合してお付き合いするようになったのが1974年ですから、もう40年…です。一緒に山にしょっちゅう行くぐらい…もありませんね、その翌年に月イチのトレーニングをしたり、（ペシャワール）会を発足するときにも参加もしましたし、初代の事務局長をやっていたのが中村先生の同級生で、今日来ていた宮﨑先生のもう一人のご友人です。

彼（佐藤雄二先生）は43歳の時に、がんで亡くなったんですね。そのあと、1992年から事務局長をして、その関係もあっていろいろとこれまで関係を続けてまいりました。そうですね、あと何を言えばいいですかね？

飯嶋　：あとは、村上さん、今日聞きたいことって、何かあったのかなと思って。

村上　：すごく熱心にインタビューシート書いたりとか、熱い思いがいっぱいあるんで、まずはそれをお伺いさせていただいたり、それについてお答えできればと思ってます。彼は、非常に多面な人ですね。いろいろな側面のある方ですね。

僕らみたいに絶えず一緒にいるとですね、皆さんが彼のことを知る映像であるとか、本の中にある高貴な話は、あんまり聞いたことがなくって、ははは（笑）。非常に行動の人ですから。行動が彼の全てでして、彼の行動を追いかけていってサポートするのが僕らの役割だったので、どんなところに彼の、興味を持たれてるのかなとか、関心を持っていただいて共感をしていただいてるのかなというのをお聞きできれば、と思っています。

飯嶋　：なるほど、逆に身近にいただけにですね。分かりました。よろしくお願いいたします。
じゃあ、時計回りでいきましょうか。

中原　：西日本新聞の中原といいます。よろしくお願いします。

私は新聞記者なので、中村先生とペシャワール会、会長も含めて、取材をずっとしてきていて、2014年の末に現地でも取材をさせてもらいましたし、国内でも何度も、何度も話を聞いてきています。自己

紹介をするんでしたね。

飯嶋　：自己紹介と、あと出会った経緯みたいなのと、今日の（座談会）で何かを期待してるかっていう。

中原　：もともと確か、事件とか災害とかの取材が長いんですけども、人権とかを担当することがつながって、そうした中で、もともとうちの新聞社は地元紙でもあるので、国際を担当する記者の中で、ペシャワール会を担当する記者が歴代いてですね。私の前ずっと先輩が担当していて、私の担当になったときに、ちょうど安全保障法制が成立するかしないかという議論の中で、そのときは戦後 70 年の年だったんです。これはたまたまですけど。

その中で『戦後 70 年へ　安全保障を考える』(*注 1) という大きな、年間を通してやる企画の中で、中村先生の活動を通して私たちの国際貢献とか平和の在り方っていうのを考えたいと。もちろんそれまでにも私の先輩記者とかも何度も当然というより、うち（西日本新聞社）はもう、先生が行くときからずっともう取材を誰か先輩がしているので、1983 年に会が発足して、84 年に行かれるときも、行く前のインタビュー記事もありますし。なんですが、アフガニスタンの現地には行ったことがなかったので、これは自分たちの目で現地で聞きたいということで私が行ったと。その後もずっと取材をさせてもらってきているところです。

書いてきたことというのは、いろんな角度で書いてきたつもりなんですけども、もちろん全く書き切れてないし、恐らく生涯かかっても多分書き切ることは無理、無理というと変ですけど、現地に行ったときも先生に、とても全てを書くことは到底不可能っていう、「私が先生の活動の全てを理解することはできないです」と。「すぐには到底無理なので、好きに書いていいでしょうか」っていったら、「それが一番いいですね」と言っていただくなど、訳の分からん仁義を切ったりするような、普通そんなことしないんですけど。

皆さんに一番聞きたいなというか、議論ができたらいいんじゃないかなと思うのは、どうやって伝えていくかということが私の仕事でもありますし、今日来てる、谷津さん（日本電波ニュース社）とか、朝日（新聞社）の佐々木さんとかと話すのはそういうところで。特に、今からは先生のことを直接知らない方が、当然、当たり前ですけど増えていくに決まってるんですよね。

知るチャンスがあれば、必ずその活動と実践に感銘を受ける人ってのはずっといるでしょうし、研究をしたいという人も絶対出てくると思うんですよね。ただ、大学生の皆さんとか高校生の皆さんとかがこう、何というんでしょうか、普通の若者というと変な言い方なんですけどね、「勉強しよう！」と思

＊注 1：西日本新聞は年間企画「戦後 70 年　安全保障を考える」を 2014 年 10 月～2015 年 9 月の長期間にわたり連載。
一連の連載は、2015 年 12 月、第 21 回平和・協同ジャーナリスト基金賞の奨励賞を受賞。
『安保法制の正体 ： 「この道」で日本は平和になるのか』西日本新聞安保取材班編(2016.2、明石書店)
https://www.akashi.co.jp/book/b217775.html
この連載の中にアフガニスタン現地で中村哲医師を取材した「中村哲がつくる平和」も含まれる。
「中村哲がつくる平和」は、西日本新聞社の中村哲医師特別サイト「一隅を照らす」から公開されている
https://www.nishinippon.co.jp/theme/peacemaker_tetsunakamura/

って何かする以外にも何か、知るチャンスが、恐らく皆さんそういう活動されてると思うんですけど、カジュアルな感じで触れたりできる、あるいはどういう部分を知りたいと若い人たちは思うのだろうかと。先生がおっしゃったように、会長がおっしゃってたように、ものすごいいろんな、活動自体もいろんな切り方ができますし、中村先生の、おちゃめな方でもあったしというような、どういう部分を特に伝えることができると継承ができるのかなっていうのを一番、ずっと考えてるところなので、何かそういう話ができたらいいなと思っています。長くなりましたすみません。

飯嶋　：よろしくお願いします。

中原　：よろしくお願いします。

飯嶋　：じゃあ、代表みたいになっちゃってますけど。先ほど一山的に紹介された、邊見さん、でいいのかな？

邊見　：よろしくお願いします。福岡高校の「ペシャワール班」っていうのを立ち上げました邊見紗来といいます。高校 2 年生です。私が中村先生のことを知ったのは先生が亡くなられたときで、その後、ちょうどその年の 4 月に福岡高校に入学しました。

それで先生の、医者という立場でありながら他のさまざまな活動をされていたということとか、現地の人に寄り添った作業をするという、その考え方に、私は将来何らかの形でそういった活動に関わりたいと思っていたので、すごく参考になって、尊敬するようになりました。

他にもたくさん支援されている団体はあると思うんですけど、詳しく説明できるか分からないですけど、中村先生の信念や考え方にすごく心を引かれて尊敬するようになって。

最初は「尊敬するなー」ぐらいの感じだったんですけど、（福岡）高校で、文化祭とかで展示のイベントとかがあったときに、なかなか興味を持ってくれる人が少ないのと、ただ展示してるだけ、募金してるだけ、という状況があって。それでは先生の本当の信念とか活動というのが、伝わっていかないなと感じて、もうちょっと幅広く活動したり、根本的なところを伝えていくことができないかなと、昨年の 10 月ぐらいに（ペシャワール班を）立ち上げました。

今いるメンバーが 5 人なんですけど、私が理想というか、やりたいなと思っていたことは、みんなで一緒に学んでいったり、そこから伝えていくことで、その前にやっぱり学ばなきゃいけないというのがあって。学んでいきたいな、と思っているんですけど、なかなか思ったような活動ができなくて、それがすごく今、悩んでるところです。伝えていくという面では何か作るじゃないけど、講演会するとかなったら、自分たちで作る、それを伝えるって、そのほうが逆に簡単なのかなと思って。学ぶとなったら、本を読んだり、映像を見たりというのはすごく労力がいることで。そこから学ぶというのは結構大変なことだなと思っているので、そこを今後もうちょっと、頑張りたい、というか、そこをやって、それから伝えていきたいなと思っています。

私は、伝え方ということにすごく、これからどうしていったらいいのかなと思っていて、学校でそういうイベントみたいなことをやっても表面的なことだけしか伝えることはできないし、映像を流すと

いっても、やっぱり強制的に全員に見せるというようなことは不可能だし、希望者だけといったら、あんまりみんな興味持ってくれない、というのがあって、伝えていくときに、どうやったら、楽しいじゃないけど、根本的なところから伝えていくことができて、しかも興味を持ってくれるようなことができるのかというのをすごく考えていて、今度 5 月に福高で文化祭があるんで、そこでまた何かやるんですけど、その企画を今、すごく悩んでいるっていう状況です。きょうは何か学ぶことができたらなと思っています。よろしくお願いします。

飯嶋　：この自己紹介、その他の部分が結構いっぱいあるんだね。今夜はなんかやるんでしたっけ。

邊見　：今夜は、私たち（ペシャワール班）の活動として、用水路の灌漑事業のことについて、今まで少し調べたり、（中村先生の）信念を考えたりっていうのはしてきたので、少しでも伝えることができたらなと思って、オンラインの講演会をします。もしお時間があれば、何かアドバイスだったり、今後の活動の支えになったらいいなと思うので、よかったらご参加いただけるとありがたいです。

飯嶋　：大丈夫、そしたら。

木原　：九州大学医学部 1 年の木原秀将といいます。
インタビューシートは時間の都合であまり書けていないのですが、自己紹介からします。
　出会い、中村先生とのつながった経緯というのは、亡くなったときが、やっぱり全部、こういう方がいるんだって初めて知ったきっかけで。そのニュースだけやったら自分ももしかしたら、それで「そういう人がいたんだな」で終わってたと思うんですけど、高校の先生が中村先生の知り合いのような方だったらしくて、それで、その先生が授業をしてくださって、自分が医師になろうかなっていうぐらいの、医師っていう仕事もいいなっていうぐらいのときに中村先生の存在を教えてくださって。そこでそういう医師の在り方もいいなっていうふうに思って、中村先生に興味を持って、医師にもなろうっていった感じで、それで医学部を目指しました。
　初めの頃は地元の医学部を目指してたんですけど、そこ落ちまして、浪人中に中村哲先生を、『想いを繋ぐ会』(*注 2) っていうのを九大のオンラインでやられていて、村上会長とかが話されていたのを聞いて。九州大学に来ればこういった活動にもっと参加できて、自分のそういった医師の価値観というか、そういうのも深められるし、貴重な体験ができるんじゃないかと思って九州大学に行こうっていうふうに決めて。何とか浪人 1 年目で九州に来れたので、それで今は、記念講座を受講したり、あと

＊注 2：2020 年 9 月 12 日、九州大学アジアウィーク 2020 にてオンラインイベント「共に歩み ここに生き 未来を照らす～中村哲先生の想いを繋ぐ会」が開催された。村上優ペシャワール会会長、藤田千代子 PMS 支援室長、谷津賢二カメラマン（日本電波ニュース社）が講演し、九州大学の学生たちとのジョイントフォーラムも行われた。準備広報運営に関わった学生たちは「中村哲先生の想いを繋ぐ会」として、つながりを持ちながら活動を続け、2021 年度の中村哲記念講座にも準備から関わった。その後、中村哲先生の志を継承することを目的とした学生団体「哲縁会（てつえんかい）」の活動が始まり、広報用 Twitter アカウント（@tetsu_memorial）を引き継いだ。

は、中山先生の講演会に運営として参加したり、いろいろ関わらさせてもらって今は哲縁会のほうに、メンバーの１人として活動しています。　今後どうかっていうのは、自分は医師になるんですけど、その中村先生のような医師にもなりたいっていう気持ちはあるんですけど、同じ道を行く方法もあると思いますけど、それ以外の道で中村先生の思いをつなぐ方法もあると思うので、自分の中でどういった道がいいかっていうのをまだ決めかねている状態なんです。こういった機会を得られているので、今後の自分の在り方について考える場所にしたいなっていうふうに思っています。今日はよろしくお願いします。

飯嶋　：僕は飯嶋秀治と申しまして、すみません、唯一この中でインタビューシート書いてなかったんですけど、九州大学の中で人間環境学研究院というところで文化人類学の教員をしてます。文化人類学っていうのは、現地人の視線を把握するために現地で 2 年間一緒に暮らすっていう方法の学問なので、中村哲さんのファンってものすごく多いんです。

僕自身はオーストラリア先住民の専門家なんですけど、アボリジニっていわれてる人たちですね。だけど僕の先輩に当たる先生っていうのは清水展さんていう人で、前回こちらのほうで記念講演なんかやったと思うんですけど、その清水展さんと一緒に『自前の思想』って本を編んだんですよ。(＊注 3) そのとき僕の担当が石牟礼道子で、もう一人の清水さんが書いたのが中村哲さんだったんです。

自分の専門の石牟礼さんは、10 年ぐらい水俣に通ってたので書けたんですけど、もう一人ぐらい共編者の清水さんがやってること、清水さんってずっと中村哲を推して、授業でもずっと話してたので、それでちゃんと読んでみようと思って、それで 2 年前に、少人数セミナーで『中村哲の仕事を読む』っていうのを 2 年前から始めて、1 年間に 5 冊ずつ読んできてますね。

そのときのやり方っていうのは、もうとってもシンプルなやり方で、5 冊選んだらそれを必ず「時系列で読む」っていうことで、理由はやっぱり最後の中村哲さんのほうからイメージを持ってる人があまりにも多いので、そうじゃなくて中村哲さんも最初のときから成長するんだっていうのを分かるために、一番最初から時系列で読まなくちゃいけないっていうことですね。

それからもう一つ、注意したのは「当時の文脈で読んでくれ」っていうことで、やっぱり今の状況と中村さんの本っていうのを直で読んじゃう人がとっても学生だと多いので、そうじゃなくて、このときの発言っていうのは、どういう状況の中でどういう政権が何を言ってた中で言ってたのかっていうことを読めるようにしようっていうことですね。あとは分かんないことがあったらちゃんと調べて、「実感として分かる想像力を持って読みましょう」っていうことで。例えば何ヘクタール開きましたっていっても、多分その状態だと情報だけで頭が素通りしちゃうので、人体の実感でいったらどのくらいの大きさかっていったら、例えば福岡市でいったらどのくらいの大きさだか実感できる？っていうのをやって、それをやらないと本は見たことになっても読めたってことにはならないので、それずっと 2 年

＊注 3：『自前の思想 ： 時代と社会に応答するフィールドワーク』清水展,飯嶋秀治編（2020.10,京都大学学術出版会）
1 章「字義通りのフィールド＝ワーカー ： 中村 哲」清水展
https://www.kyoto-up.or.jp/9784814003006.html（出版者）
https://hdl.handle.net/2324/1001707385（九大所蔵）

間やってきてます。これからあと1年間かけて、あと5冊読んだらもう一応、中村先生が書いた本と編集したのは全部終わりっていう形になるので、これで一段落を付けた後、どういうふうにしようかなっていう風に考えてるとこです。

きょうとっても良かったのは、実はその本を読んでる中でとっても不思議だったのが中村さんって、やっぱり研究者の間で、詳細には書かないんだけど、言葉の端々で滝沢克己さんの、これ影響受けてんなっていうのが分かったんですよ。そしたらそれが今日の（宮﨑先生の）話で出てきたんで、今回とっても期待してます。よろしくお願いいたします。

じゃあ最後。

鉾立　：はい。九州大学医学部6年の鉾立春響と申します。

私は将来、中村哲先生のように、恵まれない環境の子どもたちの地域で医療だけではなく、経済だとか教育の支援のできるような医師になりたいなと思って、実際にこの九州大学に入学をして。出会いとしては、中村先生の活動自体は何となくテレビ等では知っていたんですけれども、九州大学に入学して初めて九州大学の医学部出身だっていうことを改めて知りまして、すごくそこに何かの縁を感じていたところではあります。

実際に生前の中村哲先生に直接お会いする機会だとか、あとは自分のこれまでの活動等を先生の前で発表させていただくような機会に恵まれまして、そのときにもすごく叱咤激励をいただいて、応援のメッセージもいただいたっていうのが、結果として、もう2年、3年前に亡くなられたときには、それが最後直接受け取った言葉に自分としてはなりましたので、すごくそこは大切に感じていました。

一昨年ですね、村上先生にもご登壇いただきましたけれども、九州大学として『中村哲先生の想いを繋ぐ会』っていうことで、運営の中でも先頭に立って会を運営して、その関連で昨年（2021年）、今年度ですけれども、中村哲先生の記念講座のTAと実際にそれを大学の中だけではなくて外にも発信していこうってことで哲縁会の立ち上げにも関わらせていただきました。

私自身は春から、国家試験合格していればなんですけれども、医師として現場に立っていくので、またそこで感じ方もさまざま変わってくるとは思うんですけれども。やはり中村哲先生から一番受けた印象としましては、医師っていうもの自体がただ病気だけを診ればいい職業ではなくて、やはり患者さんだったり、患者さん以外の社会背景だとかそういう生活の背景まで見た結果、中村哲先生はそういう行動に移されたのではないかなというふうにすごく感銘を受けております。

特に、私自身も将来そういう、なるべく発展していく方針、方向ではなくて、その中で顧みられないような環境に住んでいる子どもたちのところに関わりたいなと思った経緯もあるんですけれども、中村先生も実際に講演会の中で、この昨今の目まぐるしい科学技術の発展等に対して少し苦言を呈されていたところが当時の自分としてはすごく印象に残っております。

今日の座談会なんですけれども、宮﨑先生の（インタビューシートの）コメントの中で、「彼自身も嫌っていたヒロイズムとして取り扱われず」っていうお話が、すごく自分の中でもこれまで伝えてくる立場として活動してきた中で少し気になっていた部分がありまして、やはり亡くなられた方の言葉を自分たちが切り取って伝えていくっていう中で、どこか神格化されてくといいますか、良い部分といいますか、中村哲先生の全体ではなくて部分が色濃く残っていくっていうことが、本当に伝え方として正

しいのかっていうことに関しては非常に悩ましいなというふうに感じていますので、実際に活動を現地でサポートされてきた皆さんのご意見として伝え方の点で、どういうところが望ましいのかっていうのはお話伺えればなと思っております。

飯嶋　：ありがとうございました。これでやっと一人一人が何となく、どういう背景でなんに関心があったのかっていうのが一巡できた感じになったと思うんですけど、そうしたら 2 巡目こうしましょうかね。他の人たちが言ったことで関心があったこととか、なるほどと思ったこととかっていうのをちょっと共有して、また 1 周してみましょうか。あと、その後はもうフリーディスカッションにしようと思いますので、じゃあ、こんな感じにしますか。

《若い世代の共感、関心は？中村哲医師のどんなところに引かれるのか》

村上　：僕から先に言うとあれだから、まず…（若い方たちに）。

飯嶋　：そうですか、じゃあ、二巡目はこっちから行こうかな。

村上　：まず、自由でなんかお話しされたらどうですか。

飯嶋　：なるほど。

村上　：僕はすごく興味あるのは、本当に若い方がお見えになってるのがすごくうれしくて、話を聞きたいな、と。

飯嶋　：どこにっていう話でしたからね、さっきの。

村上　：伝えようっていうことを一生懸命考えていただいていて。
　それは、うっすらうれしいんだけれども、そのためには分からないといけない、と。だけど多分、なんかに共感したんですよね、中村哲にね。共感したその、そこが一番、広がるときに大事なポイントなんだな、ですよね。だから、どこが一番共感したのか。

飯嶋　：そうですね。引かれたのか。

邊見　：やっぱり、他の本とか読んでたときに、他の支援団体のこと挙げられていて、それはただ、お金的な面だったり、ただ、自分たちが現地に何かしてあげてるっていって、ちょっと利益を得るためにそこに行ってる。前に中山さんの講演会のときに、「志の高い人は採用しない」っていうふうに言われていて、あまりにも見返りがないから、そんなに志を持った人に行かれたらすぐに諦めてしまうから、そんなに志の高い人は採用しないっていうふうに言ってたっていうのを聞いて、ああってなって、本当に

現地の人だけのために、自分の利益のこととか全く考えずに目の前の人のために何ができるかっていうのだけを考えて活動されてたっていうのがすごく引かれました。

村上　：すごい逆説的、だよな。ねえ。

飯嶋　：どうですか。

木原　：そうですね。自分が共感した点っていうと、いっぱい報道されてるような灌漑事業とか、そういったところで他の支援団体とは違ったやり方でやってるとこも、素直にすごいなっていう感じだったんですけど、その後で学校を建てて、自分がいなくなっても、地元だけで灌漑事業が続けられるようにしたじゃないですか。

　そういうところで、ちゃんとそこを考えてるってところで、びびっと来て、あとはマドラサの話だったりとか、よくある支援だけをぼんって投資だけしてさよならじゃなくて、考え方っていうか、知恵を残してそこでちゃんと育まれるあれをしているのがすごく自分は引かれたところになります。はい、こんな感じです。

鉾立　：そうですね。2 人が言ってくれたところは自分もすごく共感するところだなと思いまして。ただ、自分はそういう現地とかの原体験みたいなものがどうしてもないので、頭の中だけで、そういうふうに考えて目指しているっていうのが現状としてあるんですけど、それこそ中村先生は虫取りが好きだったり、自然のところで実際にアフガンとかに行かれた際にも、自分の好きな所もそういう土地に対してイメージがあって、そういうのも相まって支援について、こう、継続というか、その場限りのではなくて、その土地に根ざしたっていうところをすごく考えられてたんだろうなっていうのを感じて。そこはまだ自分として、理解はできても共感はなかなかできない感覚だなっていうのがあるんですけど。そういうのが原動力になってるのかなていうところは将来自分が活動するときにもすごく参考にしたいな、といいますか。そういう、自分はどちらかというと大義名分めいたところで活動のモチベーション持ってしまっているところが、これまでもあったんですけど中村先生はそういうところではなくて、やはり現地の方々と生活をした中で、本当に友人に手を差し伸べるような、そういう感覚が根底にあったんじゃないのかなっていうふうに思ってまして、そこをどうやったら自分もその感覚を共感できるんだろうっていうのはいつも考えます。

村上　：例えば、あの当時、っていうのは 1984 年のことですれども、赴任するとアフガン難民が 300 万人いたんですよね。当然その中に医療関係者もいた。そこへ医療支援をするっていうときに、普通は自分が働きかけるわけです。要するに医療者がいるわけだから、それを束ねて、それをチームにして、そこが起点だったんですね。JAMS っていう団体作ったんですね。だからおっしゃるように、自分は何々をしてあげるというよりはああいう、すぐ溶け込んでチームを作って、それを軸に動かそうとか、非常に最初の段階から彼は（そういうところが）ありましたね。なぜそういうふうにしたかは、ちょっと分かんないけど。

飯嶋　：この辺って、読書会やっててもとっても整理が必要なとこで、今も話聞いてると彼（鉾立さん）なんかは、違和感みたいなところもありますよね。理解はできるんだけど、共感ができないところがむしろ引かれるって人もいれば、（この方なんかだと、）自分にない発想っていうのにちょっとびっくりしたっていう、そこに学びたいっていうので、いろんな側面を引かれてくるっていう人がとっても多いんですよね。

中原　：なんかその、現地で先生の実際を見ると、ですね、もちろん先生は哲学者的な部分もあって。まああの筆力、要するに書く力とか、そういうのもあって、いろんな捉え方ができるんですけれど、ものすごく楽しそうなわけですよね。楽しいというと語弊があるんですが、その、用水路を造るという本質的な意味と、困ってる人の命のためっていうのはそれは当たり前の話で、ところが現場ってのは一個一個の作業の積み重ね、なんですが、そこでの、本当に生き生きされてるわけですよ。

これは上手に伝えないと語弊を招くところなんで、なので、頭で考えて、これ大事だからっていう場面が当然あるんですが、一つ一つの現場感というのは、大義名分がどうとかじゃなくて、単純に本当にその作業を真剣にまた現実感をもってされてるのはもう一目瞭然で、先生ってのは元来こういう方なんだって、日本で取材してるときと全然違うんですよね。頭で考えられてるところもあるに決まってるんですけど、何か手を差し伸べるということと面白さというところがある。

當眞　：（進行アナウンス）今、お話中ですけど、ちょっとご相談です。

当初の計画は 11 時半ぐらいまでお話をして、それから 10 分休憩で換気をして、その後は宮﨑先生のお話を伺ってってことだったんですが、各グループを回ってみると、今ぐっとお話が深まってきた感じで、途中で切るのがもったいない気がするので、休憩なしで換気は窓を開けます。12 時頃まで続けていただいて、あと 30 分ぐらいたっぷり、グループを変えてもまたワーミングアップに時間かかると思いますので、12 時頃までこのまま適宜おトイレ休憩は取っていただいて、続けて、その後宮﨑先生のお話伺って、ということでよろしいでしょうか。皆さんうなずいておられる。じゃあ、どうぞ、Enjoy yourself! どうぞ楽しんで。

《近くで見てきた方たちには、中村哲先生はどう見えていたか？》

飯嶋　：先ほど、村上先生が言われたのはとっても、整理が必要だって言ったのは、他方で目の前の人に集中してるっていうふうにして見える側面もとってもある。

だけどそれだけ考えてたら今のようなことってできないですよね。つまりみんな、自分が前にいってやるんじゃなくて、現地の医者をオーガナイズしてっていうのは、目の前のここだけやってるんじゃできないことで全体のことを考えて、後の人のことだって考えてとかってやってないとできないことじゃないですか。

そういうのっていうのは、学生なんかのお話聞いてると、ここに共感する、ここに共感するっていうそこが、パって見えちゃうってだけで共感する事が多いんですけど、一緒にいると、その感覚ってどう見えてたんだろうなって、同時代の人として、僕らも含めてなんですけど同時代の並走者じゃもうない

んですよね。

だからさっき言ったように、現地の当時の文脈で読まなくちゃいけないってことを教えなくちゃいけなかったんですけど、一緒にやってた人たちにとってどういうふうに見えてたんだろうなって（思うんですけど）。

村上　：ふふふ。これ、質問が難しかったんですが。どうですか。

中原　：うーん。理屈を付けることはいろいろ多分できるし、それぞれ、ね、共感していいと思うんですけど、僕は先生の真髄っていうのは、本当シンプルな、思索に必ずアクションが伴ってるってことだろうなと思って。何かこんなことしなきゃなと、こうしたいなというのが常に≪現場感≫と自分の≪アクション≫で、そのアクションを重ねた体験の末に、思索があって、例えば私たちが読む本がある、と。

頭で考えて「この本を書きたい」と、「こういう人生を生きたい」と思ってされたんじゃなくて、とにかくもう、現場でずっとやってきた真髄としてのエッセンスが発信なので、この発信自体を、いろんな光の当て方は当然、今からされていくし、されるべきなんですけど。私が考える本質の先生としてはもっと、今までいつも取材をしても、禅問答になったりするんですよね。

結構、「なんでされてるんですか」っていうのは、やっぱり私もそこはぎりぎりまで書きたいと思うので、けどやっぱりそこは理屈でのＱとＡでは絶対にこう、分からないんですよね。先生はもうその、なんていうかなぁ、はぐらかされるような部分もあるというか、本当に素直にお答えになっても、それは頭で大義名分とか、考える世界では多分ないんだろうなっていう形で。「昔の日本人だからじゃないですか」っておっしゃるんですけど、それは本当にそう思われていて。なんかちょっと分からないかもしれないですけど、どうですか。

村上　：たぶんね、邊見さんのお話をちょっと聞いててそう思ったんだけど、彼ね相当な早熟ですよ。だから、あなたぐらいの年の頃にはもう既に人生のプランは相当考えていて、というか、彼中学校のときに、西南中学行ってね、宣教師、藤井先生に出会って、で、神の話に入っていって、てね。むちゃくちゃ早熟なんですよ。

同世代でも、中学生のときにそんなこと、考えたことなかったよ。だからベースにある、インテリジェンスというのはめちゃくちゃ彼の中にはあって、そのベースは多分彼の生育史の中には、片方で戦争があり、おじさん（火野葦平）が当時の方で、その後自殺もされてるわけだし、さまざまなそういう体験がベースにあって、出てきたものの全てが、彼は行動なんですよね。そして現場主義ですよね。だから当然、医療したり、（難民の中に）医者がいる、これを使おう、とかね。その辺の発想、ぽんぽんぽんぽん自由に出てくる。あの人の後の人生を見てるとぽんぽんアイデアが出てくるんですよ。

なかなか付いていけない。出てくる。この出てくる源泉の元ってのはやっぱ、あなた、邊見さんたちの年頃にね、どうも熟成されてるようにしか僕には見えない。だから、不思議ですよ。

木原　：その、ペシャワール行かれる前は、中村先生の将来のビジョンだったりっていうのはどういうところ目指されてたんです？

村上　：彼は精神科にいった。僕も精神科だった。彼はやっぱり自分の興味関心、「自分のこと」を考えて精神科選んだんですね。僕らの時、僕なんかは全く逆で、精神科医療っていうものは非常にそのとき陰惨でしたから、「これを変えたい」みたいなそういうモチベーションがそこに。全然違うんですよ、彼はもっと内面的な…、一緒になったけれどもそこの内面的なことはすぐ卒業しちゃって、彼は次のステップ、ですよね。

　ですから、精神科に対してもそうなったし、次に行ったところもあんまりいろいろ考えることなく、山に行ったときに、これも本当だと思うんですよね。山に行って、登山隊付きの（医者として）山に行くと、どうしても、患者さんに出会うけれども、ごまかしごまかし行かないといけない。この、ごまかしたっていうところが彼のすごい心の、何ていうかな・・・。

飯嶋　：「負債感」ですよね。

村上　：うん、（心の「負債感」）になって。次の年、僕一緒に山行ってるんですよ、同じ所の。そのときやっぱり、夜暇なもんだから、ソ連が攻める直前の時でね、行こうと思ったらなかなか入れなくて、山の中にずっと閉じこもって話をするんだけど、その人生観とかが、あるときやっぱりぶつかるんですけどね。だけどそういう中で彼は、「よし！こんなとこでやってみよう」と思ったんですよね。

　山に行ってなかったらまた、違った人生だった。あの人非常に、一面学者ですから、細かく調べていってね、こうして、ああしてっていうのが好きな人だから。もうちょっと違った医者になってたかもしれない。だけど、出会いでしょうね、やっぱり。

　素地にあるのはやっぱり人間に対する関心とか、自分に対する関心とか、僕は大きかったと思うし。早熟でした。それは全然見せないでしょ。

飯嶋　：そうですね。

村上　：後の本読むと分かるんですよ。こんなふうに深く考えてんだと。だけど、普段やってるときはそんな、どちらかというと口数の少ない、ただ聞いてるほうですね。時々、言うときにすごい、多分宮﨑さんがいうところでは過激だったみたいですけれど。そういう意味では確かに神格化しちゃいかんとか、ヒーローにしてはいかんと言うけど、あれはちょっと人間のただもんならぬ、だろうかな。それから行動面もあれはちょっと・・・。

鉾立　：一朝一夕でまねできるものではないって感じます。

村上　：だよなあ。そういう畏敬の念みたいな、畏敬の念といったらおかしいけれども、尊敬っていうかリスペクトする気持ち、非常に僕も強いんです。だから、今、一生懸命彼のあとをやってるので、それなしにあとをやったかっていうとそれは違ったし、彼のああいう生き方を傍目に見て同じこと今、福祉をやってますけど、ちょっと前まで僕も医者の世界で自分のいろいろな開拓せないかんってこと山ほどありましたけど、アイデアは彼のやり方を見てたから僕の後の人生の仕事も、人生の展開もあると思

うぐらい影響受けてるんだけど、直じゃないんですよ。おっしゃるように・・・。
　やっぱり彼のやってることから受けるインスピレーションっていうのは、彼の後を継いでこの事業をやってるというだけじゃなくて、多分全く別のところに生きてるんですよ。それぐらいなんか影響を受ける。発信力の強い。だけど、普通見てるとね、どこでもおるような。

鉾立　：見た目もすごい小柄でいらっしゃるから。自分もお会いしてお話もさせていただきましたけど、すごく、親近感がどうしても湧いてしまっているので、そこもまた、ギャップというか。そこを先生が意識されて感じさせなかったのか分からないですけど。

村上　：意識してませんね。

鉾立　：そこも多分、周りの人が引き込まれる一つの要因なのかなっていうのは、実際に会った身としてはすごく感じましたね。

村上　：それを実際会わないでもそう感じ取れるっていう感性は、僕すごいすばらしいなと思うんだよ。

邊見　：いきなり現地に行って、なんでそんなにすぐなじめるのかが、私にはよく分からなくて。私は、学校でさえ、人間関係とか苦戦してるのに、そんないきなり外国に行って、言葉もよく通じない状況で、しかも日本人とかより向こうの人のほうが、プライドとかも高くて、あんまり、けっこう内部的な交わりが強いっていうところに、なんでそんなになじめて、しかも動かしてっていうのができたのか、私は本当に不思議に思っていて、私には絶対できないだろうなっていうのをすごく思いました。

村上　：だけど引き込まれるんだよね、できないのはできないとしても。

邊見　：引き込まれますね。

村上　：だけど引き込まれるんだよね、あれ。

邊見　：その才能があるんですよ、きっと。

村上　：ぜひ生きてる間に出会っていただきたかった。

中原　：引き込まれます。

《宗教と中村先生の素養》

木原　：結構宗教的な側面は先生は強かったですか？

村上　：宗教ですか。

木原　：本とか読んでる感じだと、自分も家が神社の家系で、学校はキリスト教の学校だったんですよ。どっちも話を聞いてると中村先生も仏教の考え方だったり、キリスト教の考え方が結構入ってて、普段からそっちの、宗教的な方向の強い人だったのかなっていうのは、どうでしたか。それこそ向こう行ったら、また違う宗教があると思いますけど、その辺とうまくやっていくあれは、どう接する感じでいってたのかなっていうのが。

村上　：きょう宮﨑先生が講演するみたいだけど、彼はもっと中村先生よりもその、宗教的な人みたいですよ。彼も、中村哲も相当な宗教に関しての造形は、今おっしゃったようにキリスト教もあれば、彼は大学に入った時は、仏教青年会っていうのに所属していたりしたしね。活動していたところはイスラム教でしょ。だから宗教っていうのは彼の一つの柱には確かにあると思います。対立的ではない。

飯嶋　：ですよね。

村上　：あの、各宗教がね。

飯嶋　：そこにこだわってたらあれはできないですもんね。

村上　：そうですね。
だけど宗教には相当素養があると思っていただいてもいい。

飯嶋　：論語もそうですしね。

村上　：そうそう、おばあちゃんにずっと論語読まされて。彼の教養は論語なんですよね。
ぱっと出てくる言葉はね。ちょっと、だから得体が知れんの。

鉾立　：俗にいう英才教育的なところになってるんですかね。たまたまだとは思うんですけど。

中原　：その、「問題にするから問題になるんですよ」とおっしゃってましたね、宗教が。
こちらから余計なこと言わなければ、ムスリムの人たちも文句言ってこないし、そこは普通に尊重し合えばいいだけの話ですよ、と。

飯嶋　：キリスト教の中でも内村鑑三だしね。一番、尊敬してんのがね。
日本のキリスト教の中では独立教会派って、ちょっと日本の独自のやつなんですよね。
教会に、無教会主義って後にいわれるんですけど。だから、素養としてはすごいんだけど、そこに全然こだわるってことはないですよね。

鉾立　：飯嶋先生は文化人類学されてると思うんですけど、それこそ今、邊見さんが言ってたみたいに、そういう、全然宗教も価値観も違うような現場に溶け込んで、かつそこを一緒に頑張っていくのって、実際どれぐらい大変なことなのかみたいなの伺いたいなって思うんですけど、外から見たらそれは、言葉も通じないし大変だろうとは思うんですけど、やっぱり研究とかされてる中で、どれぐらい向こうのアフガンの人たちもどれぐらい受け入れてくれる気持ちがあるのかとか、そこをうまく中村先生が溶け込めたのをこう、先生から見てはどういうふうに思われているのかなって。

飯嶋　：文化人類学からいうと、外の人がそこに入るのは意外とそんなに大変じゃないんですよ。向こうの人のほうが排外主義的じゃなかったりすることもよくあるんですよね。

　ただ、僕は、中村先生が僕ら文化人類学と全然違うのは、医者だったから。お医者さんだったから、向こうが一番弱ってるところに入れたんですよね。具体的な援助の方法を持って。なら、キリスト教の医者だったら全員があれができたらかっていうと、一番最初の頃の本に書いてありますけど同じキリスト教のお医者さんでもそこで、ちょっと状況やばくなったらすぐにそこから逃げちゃったとかっていうことあるんで、やっぱりそこは独自なところで、さっきから言われてますけど、意図して真似しようとしてできることじゃなくて、いろんな縁の中であの人の人生と行動っていうのは生まれてきたとしかいいようがないんだと思う。

　生まれてきたものを後から意識的にフォローして真似ようと思ってもできないんで、そこから刺激を受けて学ぶことができても一方的にできるだけ、っていう感じがします。

村上　：もう一つね、同じことかもしれないけど、彼は 0（ゼロ）から 1（イチ）を作れる人なんですよね。何もないところから 1 を作れる。で 100 ぐらいまで作ってる。100 を 101 にするのは僕はできる。102 にも 110 にもできるけど、0 から 1 にして、そこを 100 まで育てるっていうのは彼の今までやったようなこと、0 から 1 ってのは、彼のやっぱし、ちょっとなかなかまねができんなという世界だと思うんですよね。だから、ああいう人に出会えたっていうのは僕なんかすごく幸運だったと思うんですね。なかなか出会えませんよ。

飯嶋　：ありますよね。同時代に生まれた本当に縁としか言いようがない、幸運としか。

村上　：ただ、一つ言えることは、そういう人が隣にいたときに、その人に影響を受けてその人を選ぶかどうかは僕らの問題。

飯嶋　：ありますよね、それもね。

村上　：自分の選択だからね。

飯嶋　：だから、強烈な人がいたときにそこから距離を取る人もいっぱいいますもんね。

村上　：彼のはね、強烈っちゃ強烈だったのかもしらんけど、強烈と思わんかったんだよね。全然強烈に

思わんかった。

飯嶋　：じゃあ村上先生の中で出会ったときの外見と話を聞いたときのギャップとで理解したりとか、中村先生との関係ってのも、理解がぐーっと深まってたっていう時期があったわけですか。最初からそういうのが分かってたわけじゃなくてってことですよね。

村上　：まあ、普通にやってましたよね。酒も一緒に飲んで。事業始めてから、彼は飲んでませんけどね。昔はまあ、一緒に酒を飲むこともあったし。

飯嶋　：医学部の頃とかですか。

村上　：いや、医者の頃ですね。医者になった初めの頃。僕は今いった肥前精神医療センターというところから大牟田労災病院というところに、（中村先生は）そこで CO の炭塵爆発の患者さんの治療と、それから新しい神経医療内科これをしてあったんですよ。僕はそれを研修に行って、10 時ぐらいまでいろいろ教えてもらって帰りバスで一緒に帰るんですよ、新栄町ぐらいまで行くと、ちょっと降りて飲んでいきましょう、っていうのはありました。そんなに飲むタイプじゃなかったですけどね。

飯嶋　：そのときってどういうお話をされるんです？

村上　：そんなに難しい話してない。

飯嶋　：難しい話はそういうとき、するんですか？しない？

村上　：します。何の話したかな。そんな心に残るっていうよりは、僕のほうがとんがってたからね、昔のこと言うと。聞いてたんじゃないですか。

飯嶋　：そういう感じか。

邊見　：先生はどうやって現地の言葉を学んだんですか。

村上　：言葉？英語はものすごい得意だったみたい。

邊見　：英語はよく聞きますけど、英語なんですか、通じるんですか。

村上　：英語はね。英語は必ずちゃんと向こうでは公用語に近いところもあったんで、英語なんだけど。あとはもう本当に入っていって、暇だから、ちょっと遊びに行って、ずっと 1 人で行動して、そこで。人懐っこいというか、抵抗がないというか。あの人懐っこさがひとつかな。あの、意外とシャイな感じ

もあるけれども人懐っこい感じですね。

邊見　：ユーモアがあるところもあるって結構聞くんですけど、関わってないから全然分からないんですけど、聞きたいなって思いますね、ユーモアとか。そういうのを取り入れたらっていうかそういう人柄的なところから興味を持ってくれる人っているのかなと思います。

《中村先生を取材する。厳しさ、ユーモア、親しみやすさ、皮肉》

鉾立　：中原さん、実際に取材してく中でどういう感じで関係性を築かれたのかなとか。
違ったら申し訳ないですけど、中村先生ってあんまり日本の報道の方のインタビューとかはあんまり答えたくないみたいな雰囲気があったっていうイメージがあるんですけど、でもやっぱり報道側のかたがたがそこに食らい付いてといいますか、引き出そうっていうふうにされてたと思うんですけど、今のお人柄の話で人間関係みたいなのを構築する中で気付きとかはあったんですか。

中原　：僕は取材するのが仕事なので、中村先生は決してインタビューを嫌ってるっということではなくて、むしろ機会があればきちんと応じてお話をきちんと、どんなメディアにもされていて。ただ、僕は非常に厳しい人だと思っていたし、今も思ってるんですよね。厳しいっていうのは、理不尽な意味じゃもちろんなくて、なので、すごい緊張してましたね、いつも、ずっと。何度取材してもやっぱり。
現地に行ったときに「石出水制」といって、川が、ここが川だったら、水の流れを通すときに、ここ、張り出し構造物みたいのがあるんですけど、「あれが水制ですよね？」って、多分そういう質問したんですよね、初日に。雑談じゃないですけど。そしたらですね、「勉強してこなかったんですか？」って言われたんですよ。いや、（勉強）してきたわ！と。

一同：（笑い声）

中原　：もちろんそれは先生がたに比べれば勉強なんてものは・・・。
　アフガニスタンに行くので、1カ月半くらいその勉強だけしてきてる。悔しくて。あと、まずいじゃないですか。なので、ノートに現場の状況はこうで、会報とか報告書とかもずっと見てこうだって、中村先生に翌日現場で見せて、「先生ここなんですけど」ったら「ようやく新聞記者らしくなってきましたね」って言われて。
　冷たいというか、僕はずっと思ってたのは、報道の役割というのを信じてくださっておられる方なので、こうあるべきだ、こうあってほしいというか、わざわざ取材を現地で受けてくださったのは、証人がほしい、目撃者がほしいんだっていう、それは報道に意味があると思ってくださってる。こっちもなんか「信頼をされたい！」と思うんです。これ何の質問でしたか、忘れちゃいちゃいましたけど。

鉾立　：でもそういうので、人間関係の、村上先生の話からすると、結構、中村先生って打ち解けやすい人なのかなって思うけど。

中原　：もちろんそうですよ。ふつうに取材とかで一緒に 2 週間いたときとかも、冗談もおっしゃるし、なんですけど、ああ、今の仕事の話ですね。人としては、僕は顔がはっきりしてる、要するに、顔濃いんで、「あなたは今まで来た日本人の中で一番アフガン人に似てます。」

一同：(笑い声)

中原　：それだけですね、ほめられたのは。で、みなハザラという、ハザラ人っていう人たちがいて、日本人っぽい顔してるんですよ、どっちかというと。なのでいつも現地に行くと「中原はハザラ人だ」と、もう毎朝同じ冗談を言って、わーっと笑うという。なので

鉾立　：ひょうきんな方なんですね。

飯嶋　：でもそれ海外で関わるときってあるんですよね。こっち側がどういう意図か、じゃなくて、向こうがこっちをどうやって認識したかって話で、ただ似てるから単純に向こう側が親近感を持つとか、そういうのってありますし。あと、さっきの、もともとのこの話が始まったユーモアのセンスよね。僕、だから、本読んでて、なるほどこういうのはこういう読み方があるんだと思ったのが、羊土社かな、どっかマイナーな出版社から出た本（＊注 4）が、講演とその質疑録なんですよね。

鉾立　：みました。医学生むけのやつですよね。

飯嶋　：そう、そっちだと、本で中村先生が書いてるときってのは、一般読者に向けて、まずはペシャワール会の人に向かって、で、一般の読者に向かって書いてるけど、そっちのほうではやっぱり別の側面が出てくるんですよ。変な質問をされたときにどういうふうにして、傷付けないようにしてかわしてるかとかね。そういうのが見えるようなときがあって、そっちの方を見たらそっちのユーモアみたいのが見えるかもしんないですね。

邊見　：私も最近高校で講演をされたときの講演録（＊注 5）を読んだんですけど、やっぱり感じられないような側面もあると思いました。高校生に対してどんなふうに講演されてるのかなっていうので。インタビューとかもあって、活動だけじゃなくて、ああ、持ってくればよかった。すごく引かれるところがあったんですけど。すごく勉強になりました。

＊注 4：『医者よ、信念はいらないまず命を救え！：アフガニスタンで「井戸を掘る」医者中村哲』(2003.10,羊土社)
2003 年 4 月 26 日東京医ゼミに行く会（全国医学生ゼミナール）春医ゼミでの講演録・質疑応答等を収録

＊注 5：県立福岡高等学校生徒会発行の校誌『福高』(年 1 回刊）に掲載された過去の中村哲医師の講演録を集め、『福高 ： 別冊』ペシャワール班編（2022.8,福岡高校生徒会）が発行された。
http://hdl.handle.net/2324/4845522（中村哲著述アーカイブ）

飯嶋　：その当時のを見てたわけね。自分が高校生だからそういう目でそれを見てたわけね、なるほどね。

中原　：ちょっと答えだけ言うと、信頼関係を築こうというふうにおこがましくは、中村先生には僕は思わなかったですね。とにかく一生懸命して、君は話すに足る、多少、話すに足るねと思ってもらいたいぐらいで、ここにも先生、教授の先生がおられるんだけど、弁護士も医者も、「先生」っていうじゃないですか、政治家も。でもそれ「先生」っていってるだけじゃないですか。先生方いるのに失礼なんですけど、中村先生って「先生」って言わないと礼を失するような人なんで、この人、信頼関係築こうとか、そういう大それたことをちょっと思えなかったっていうことを、言うのを忘れてました。

鉾立　：ありがとうございます。でもなるほどなって思いました。

村上　：本当、不思議なことなんだけど、僕は下ですよね。年齢的に三つ下で、学年は本当は二つ下だけど一つ下で。上の人もそうで、下の僕らもみんな「哲っちゃん」と呼ぶ。普通に仕事の時も、あんまり中村先生とか言わない。みんな哲っちゃんって言う。僕もずっと哲っちゃんって呼んでて。最近は、なんかもう、こんなとこで哲っちゃんと呼んでるわけにいかないんで、いわないんだけど。それが僕らだけじゃなくてみんなそうなんだよ。この人間に対する親近感みたいな本質的な感覚があるんだよね。

當眞　：なんか、かわいいですよね。

村上　：おちゃめなとこあるからね。

中原　：そういうふうに呼ばれる人間の愛嬌みたいなのお持ちですけど。

電波ニュースの谷津さんとかも、現地で一緒で。とにかく中村さんが大好きで大好きでしょうがないみたいな、ですよね。それよく分かるんですよね。

先生は車の中とかでいろんなこと教えてくれるんですよ。「ここケシ畑だったんですけど、なくなったんですよ」とか。こっちはもう一言も聞き漏らしたくないんですよね。でも、それは、私に向かって教えて下さってるわけです。僕はルポルタージュを書こうと思うので、すごい大事なことなんですけど、がたがたする車、道路の道が悪い所で、先生は前を向いていつもと同じ声でしゃべられるんで、もう全っ然聞こえないんですよ。そこがもう、「らしい！」というと失礼なんですけど、こうやって（体を話す相手に向けて）話したらいいんですけど、そうじゃなくてもう、全っ然聞こえないんですよ。なんか、だいたいそういうことが多いかなって感じ。

一同　：（笑い声）

邊見　：全然関係ないんですけど、ケシの話が、この前講演録に出てて、ケシの栽培が自由にとは、みたいなことが書いてあって、タリバンが崩壊してから、アメリカが来てから、いろんなことが自由になっ

てケシの栽培も自由になったって書いてあって、何のことかなって思って分かんなかったんですけど、ケシの栽培が自由になるってどういうことなんですか。

飯嶋　：ドラッグのことやね。

村上　：皮肉ってんですよ、それはね。ケシを栽培する自由。貧しい人がこじきをする自由。それから、女の人が食えないから売春をする自由。

邊見　：ああ、同じこと書いてました。

村上　：これを、こういう自由がある。昔は自由がなかったっていうけど、今は自由だっていうと、こういう自由があるっていう、彼の皮肉。実際事実でもあるし、皮肉でもある。

邊見　：ただ、ケシは麻薬だから、それをすることによって現地の人は悪い方にいくと。

村上　：タリバンのときは、宗教上彼らの理由があって禁止してたんです。タリバンが支配した 1990 年代の終わりはアフガニスタン、ケシがほぼなくなった。タリバンいなくなった直後に僕が行ったら、すぐケシ畑に変わってた。だって、あれ小麦を作るのに比べて 50 倍ぐらい価格が高いから。

中原　：乾燥にも強いんで、それを売って、小麦を買うわけですよ。食べれないのに。

飯嶋　：だから、文脈としてはみんな自由だ自由だって言って、自由がほしいって、それがいいもんだって言ってるけど、こんな自由だってあるんだぜって、それ考えてちゃんと自由って言ってる？っていう。だから「三無主義」って僕すごく大事なメッセージだと思ってて、無節操、無駄、そして無思想でしたっけ。つまり思想なんていったら、アメリカとソビエトで全く対極する思想言ってて、でもやってることアフガンから見たら一緒だよっていうことですよね。だから、言葉を信じない。行動やるやつ信じるって話でしょ。さっきのは、そういう切り返しの皮肉みたいなとこですよね。

中原　：自由と民主主義がもたらしたもの、こんな自由もあるんだけどっていうことですね。

當眞　：（進行アナウンス）とても声を掛けるのを躊躇したくなるような座談の深まりが起きてるのですが、時は流れ、今ちょうど 12 時になりました。ここ、実は 1 時間、あと 1 時ぐらいまでの予定なんですね。この後、宮﨑先生からぜひお話を伺って、その後もう一度車座になって、全体で語り合いをと思っているのですが、何かすごくここで切るのが暴力的な気がして、どうしましょう。あと 10 分ほしいとか言うんであれば、10 分ぐらいどうにか伸ばせるかなと思いますけど、もう、動いていいですか。キリがないといえばキリがないかもしれない。よろしいですか。

会場　：あと 5 分ぐらい。

當眞　：（進行アナウンス）あと 5 分。はい、あと 5 分という声がありましたので、突然途中で切ると良くないと思いますから、あと 5 分で切り上げて、5 分たちましたら、ここの車座の所に移動していただいて、宮﨑先生にはご発表の準備いただいて、おトイレに行きたい人はどうぞ。ということでちょっと時間奪っちゃったから、あと今から 5 分、だから大体 7 分ぐらいまでですね。どうぞ、そのようにしたいと思います。

飯嶋　：じゃあ、聞きたいことをお聞きください。せっかくの機会なんで。
特に僕らは本当に本だけでしか知らないっていう、あるいは講演でしか知らないっていうので、同じ時代で走ってた人と全然違うと思うから。

《中村哲先生のことを、現地の活動を、これからどのように伝えていくのか》

邊見　：樋口くん。

飯嶋　：（今日来られなかった）樋口くんの質問、報道のみなさんにね。

邊見　：報道のかたに、先生がやって来られたときは、もちろん活動について発信していたけど、やっぱり亡くなって活動とかへの（取材も）していくと思いますけど、その中で中村さんのことはどういうふうに発信していこうというふうにお考えですか。

中原　：一番根本的な部分なので、それは書きながらずっと考えてるところですよね。
　だから、最初に聞いたように皆さんにも教えてほしい部分もあって、会長がおっしゃったように、みなさんどういうところで共感したのかっていうところも、一応勉強してやっていきたい。ずっと多分模索だと思うんです。何でもそうなので、継承というのは。
　ただ、決定的にあるのは、今ペシャワール会と PMS は現地で事業をしてるんですよね。なので、これを伝えるという、これを知ってもらうということが一番大事なので、一番というか、中村先生自身も哲さん、哲さんといったら、「それはいいので現地のことを応援してください」と、例えばね。現地のことを、私には「現地のことを書いてください」って絶対おっしゃるので。そこに皆さんの共感したとか、すごい人だなって力を実際の力として、現地の事業の継続にどうつなげるかっていうのは、書くときは絶対忘れないようにして。中村先生の顕彰する記事でも、どっかにそれが、現地の直接のパワーにつながらないと、もったいない。ちょっと主客が転倒するんではないか。今は現地の活動がずっと続いているわけなので。まあ 50 年後とかどうなってるか分からないわけですけど、少なくとも今動いてるからですよね。そこがすごく大事、なんかあんまり答えになってないんですけどね。どうやって伝えていくのかずっと考えてますけど。

飯嶋　：でもそれって大事なところだと思いますよ。水俣でも原田正純さんとか、石牟礼道子とか、みんなやっぱりそっちの人に注目しちゃうんですよ。だけどみんな（原田さんや石牟礼さんたち）が言ってんのは、中村先生も一緒だけど、いやいや水俣病の患者のこと見てくれよってことなんですよね。僕はいいからさっていうような感じだったんですね。そこもすごく大事なことですよね。

中原　：両方だと思うんですよね。中村先生への共感と実践を伝えること、それが直接のパワーになるのが一番いいことだな。

邊見　：高校とかで伝えていくってなったらやっぱり、どっちも伝えてくっていうのはすごく大変だなって思って。やっぱり根本的なところをみんなまだ知れてない状況で、いきなり現地の活動（の話に）いっても、「何これ？」ってなるし、先生のことをあんまりフォーカスし過ぎても、「だから何？」っていうふうになっちゃうから、そこがすごい難しいかなって思ってます。

鉾立　：自分たちも、九大から特に若い人に向けて発信をしていく立場として、いろいろ考えてきたんですけど。やっぱり今の悩みを聞いてると、それでも興味を持ってくれる人に対して、まずは知ってもらうことで代わりに発信してくれる人の数が増えていけば、だんだんだんだんその輪自体が広がっていくのかなって思っていたので。

　最初から全員にとか、興味ない人にもっていうよりは、段階を追ってとか、やっぱり周りがみんな中村先生のことをよく知っていくにつれて、自分も知らなきゃいけないのかなって思うんじゃないかなと思って、正直、九大の医学部生もなかなかやっぱり知らないので、ちょっとずつでも知る機会を増やしたいなと思って活動してますって感じです。

當眞　：（進行アナウンス）どのグループも座談が本当に深まっておられて、このまま続けたいところですが、お約束の約 5 分ほどになりましたので、じわじわとこちらに移動していただいて、どうぞ、おトイレ休憩もしていただいて、宮﨑先生のお話にみんなで一緒に耳を傾けて。

飯嶋　：やっぱりキリがないよね。

當眞　：（進行アナウンス）この後はまた全体で語り合うという時間を用意していますので、語り残した部分はそこでまたシェアしていただけるとありがたいなっていうふうに思います。

飯嶋　：お互い知り合いになれて良かった。取りあえずありがとうございます。

一同　：ありがとうございました。

（了）

座談会参加者のインタビューシートより

※座談会参加者に回答してもらった、事前インタビューシートから、回答の一部を抜粋して掲載しています。

	村上優(むらかみ　まさる)　ペシャワール会会長、PMS 総院長,医師
専門・仕事	精神科医療、特に依存症医療、司法精神医学、DPAT(災害精神医療)、 国立病院(国立病院機構)の公的精神科病院運営
中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？	
1974 年に国立肥前療養所で出会い、大牟田労災病院、ヒンズークッシュのトレッキング、ペシャワール会のメンバーとしてかかわる	
中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？	
ペシャワール会の活動に関わらず、生き方のすべてに影響	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
時と場合で変わりますが、現在はこれしかありません 「水は善人・悪人を区別しないように、誰とでも協力し、世界がどうなろうと、他所に逃れようもない人々が、人間らしく生きられるよう、ここで力を尽くします。内外で暗い争いが頻発する今でこそ、この灯りを絶やしてはならぬと思います。」	
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
これほど長く彼の地にとどまり、世界のすべての矛盾が現れる現場で、常に前線で、灯りのないところを灯し、道を作っていく、中村哲の生き方	
その他	中村哲は単純で明確なメッセージ性の側面と、深い思索的な面とがあります。多角的な見方で理解が進む、そのためのデータベースの蓄積と研究者がでてくること、そして継承し実践してくれる人の育成を期待しています。

	中原興平(なかはらこうへい)　西日本新聞社
専門・仕事	2002 年西日本新聞社に記者として入社。事件や事故、災害の担当が比較的長く、特に近年では熊本地震や九州豪雨などの災害現場のキャップなども務めました。新聞記者の仕事は突き詰めると「人権」を守ることだと考え、裁判のやり直し(再審)が議論されている過去の殺人事件や部落問題についての長期連載も手がけてきました。
中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？	
本格的に取材を始めたのは、2014 年。戦後 70 年を目前に迫る中、安全保障法制が議論されていた時期です。日本の国際貢献の在り方や平和への道しるべとして、中村哲医師の活動を道しるべとしたいと考えました。現地で密着取材をしたほか、国内でも繰り返しお話を聞いて、記事にしてきました	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
非常に多いので、絞りきれませんが、「どうせやらないかんことは決まっとる」「目の前のことをただやりなさい」でしょうか。ペシャワール会のスタッフにかけられた言葉です。	

中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
「キリスト者として生きるとは、『当たり前の人』として、今をまっとうに生きようとすることである」と、中村さんは述べています。私は「キリスト者」だけでなく、すべての人に通じる言葉で、誠を尽くすことの大切さを説いているのだと思っています。中村さんの生涯の実践を通じ、このメッセージの意味を自分のものとすることが大切だと考えています。	
（報道関係の方へ）国際情勢が変動する中、中村哲先生の活動や価値観には変化はあったのでしょうか？＊	
根幹の部分には、一切の変化はないと思います。アフガン戦争 20 年の経緯と結末から見ても、結果として浮き彫りになったのは、その間も一貫して続けられた中村さんとその活動の正しさだったと思います。	
その他	顕彰の活動を丁寧に続けられている九州大学と学生の方々の取り組みと姿勢に敬意を表したいと思います。アフガンからの米軍の撤収など、物事が大きく動くときに注目が集まるのは当然です。新聞ももちろん、そうした際に大きく注目します。ですが、大切なのは普段の取り組みだと考えています。中村さんのことを直接知らない人たちが増えていくのは当然。今後、どのように中村さんとその事業のことを伝えていくかが問われていると自戒を込めて考えています。

	樋口　響（ひぐち　たくと）　　福岡高校 1 年　ペシャワール班
中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？	
昨年の 6 月（文化祭）で。 母校が同じで、後輩であり、先生の思いを伝える活動をしている	
中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？	
医師になりたいという夢の幅が少し広がりました	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
百の診療所より一本の用水路	
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること	
活動のみを伝えるのではなく、その気持ちを伝えるようにしている	
ほかの参加者の方に質問！	
（報道の方、大学生の皆さんへ）これから先生の思いの発信方法はどのようなものがありますか （教える立場の先生方へ）どうやって伝えようと工夫していますか。	
（高校生・大学生へ）中村哲先生について、どんなことを知りたい、学びたいですか？＊	
どういう経緯で、活動を始めたのかを知りたいです。	

	邊見紗来（へんみさら）　福岡高校 2 年　ペシャワール班
中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？	
中村哲の母校に通っていて、活動を伝えるために活動している。 先生が銃撃でなくなったとき。	

中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？
先生の信念に感銘を受け、母校である福岡高校で先生の活動、信念を伝えていきたいと思った。
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？
水のようにごまかさない、水のように正直なこと
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい
先生は本当にすごいことをしているけれど、決して大それたことをしようとしてやったわけではなく、ひたすらに自分の信念を貫いた結果医療活動以外のことも成し遂げたということ。 先生はそれを当たり前だと思っていたこと。
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること
活動を伝えるだけでなく、その背景にあった先生の信念や活動を伝える工夫をしている。 特に、言葉を大切にしている。今後高校でどんなふうに伝えていくか悩んでいる。
（高校生・大学生へ）中村哲先生について、どんなことを知りたい、学びたいですか？＊
先生の昔、学生時代について　先生の宗教観

	木原 秀将（きはら しゅうま） 九州大学医学部１年,哲縁会
中村哲先生とあなたとの関わりは？ 出会った/興味を持ったのはいつですか？	
（先生が亡くなった時に知る。）中村哲記念講座 2021 年度受講生	

	鉾立春響（ほこたてはるき）九州大学医学部６年　中村哲先生の想いを繋ぐ会/哲縁会
専門・仕事	学生生活では国際ボランティアの団体で全国の代表を務めました。 将来は途上国の乳幼児死亡率を下げるべく、医療だけでなく教育や経済の面からも支援できる国際協力医師を目指しています。春から医師として神奈川県で働きます。
中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？	
九州大学に入学して、ひょんなことから中村哲先生が九州大学医学部出身だと知った。 大学 3 年の時に初めて中村先生の講演を生で聞き、その翌年に実際に先生の前でプレゼンをさせていただき叱咤激励をいただきました。先生が亡くなられてからは九州大学における「中村哲先生の想いを繋ぐ会」の運営に携わりました。	
中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？	
偉大な学部の先輩であり、自分自身の将来の目標を達成するための手段の一つを与えてくださった。	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
講演会の中で、科学技術の発展に対して「それよりももっと大切なことがある」と強い意志表示された時の姿勢や言葉	

座談会「中村哲先生のスピリットを継承する」記録

座談グループ ： ペシャワール

進行役 ： 鏑木政彦 九州大学比較文化研究院教授（政治思想史）・中村哲記念講座担当

参加者 ： 藤田千代子 PMS 支援室長・ペシャワール会・看護師・元現地ワーカー

佐々木亮 朝日新聞社 記者（当時）

武内厳太 春吉小学校 教諭

岡本偉吹 九州大学共創学部 2 年・哲縁会

寺田愛理 九州大学大学院生物資源環境科学府修士 1 年・中村哲先生の想いを繋ぐ会/哲縁会

坂本雄哉 福岡高校 2 年 ペシャワール班

松木沙和 福岡高校 2 年 ペシャワール班

座談会コーディネーター ： 當眞千賀子 九州大学人間環境学研究院教授（発達心理学）

記録 ： 九州大学附属図書館

※ この記録に登場する参加者の所属等は、座談会が開催された 2022 年 3 月当時のものです。

鏑木　：せっかくの機会ですので、できるだけ皆さんにお話ししてもらいたいなと思ってます。
ファシリテーターをします鏑木です。よろしくお願いします。
まずは短く簡単に自己紹介をしていただいて。その後、どんな話を聞きたいのかっていう事前の質問もありますけれども、今この場で、何かここで話したいなっていうことを自己紹介のときにもお話しいただければ、そうしたものをキャッチして話ができる人に振っていきたいなというふうに思っています。

《自己紹介》

佐々木：じゃあ、私から。朝日新聞の記者の佐々木と申します。
中村さんを最初に取材したのは、ここ（インタビューシート）にも書きましたが、2001 年の 9 月 17 日、成田空港経由で福岡に帰国されたとき、ちょうど、9.11 同時多発テロから 1 週間足らずの時期ですね。大変恥ずかしいんですが、それまで私、中村さんのこと全く知らなくて。ただ、「こういう人が現地から帰ってくるから誰か空港で捕まえて取材をしてくれ。誰か手が空いてる記者はいるか」って社内でデスクが言ったので、「じゃあ私行ってきます」って言って。空港で、いわゆる出待ちっていうんでしょうか、出てきたとこを取材して。当時、KBC と私ともう 1 社か 2 社いたと思うんですが、中村さんのそばで話を聞いているその映像が、つい先日 KBC の『良心の実弾」にちらっと出てきて、今日いらしている臼井さんから、「これ、佐々木さんだよね？　若いね」って言われてしまったんですが。
そのときは、まさかこれほど長く取材をさせていただくとは思わなかったんです。
やっぱり、ちょっと短時間、話を聞いただけだけど、「何か気になるな、あの人の話」っていうことで、講演会を取材したりとか、インタビューをしたりしまして。聞けば聞くほど、何だか気になるなっていうふうなのが深まっていってですね。ここ（インタビューシート）にも書きましたけど。もちろん、アフガニスタン情勢ですとか、ペシャワールのこととかお話しされているんですが、それに留まらない、何かすごく、一言で説明するのは難しいんですけど、何かもっと大事なことを話されてるなっていうのでですね。座標軸というか、北極星みたいな存在としてずっと話を聞いてきまして。
新聞記者というのは転勤族ですので、途中、ちょっと福岡県外に行ったり他のポストに就いたりしてブランクはあるんですけど。ですから、亡くなるまでの 18 年間のうち 13 年くらいは取材をさせていただいて。私、間もなく新聞記者やって丸 34 年に近づくんですが、恐らく新聞記者人生の半分くらいは中村さんの話を聞き続けて、結果的に最も長く取材をさせていただいた人だった。でも最初のきっかけのときは、本当に恥ずかしい話ですけど、これほど長いお付き合いになるとは思わなかったっていうんでしょうか。ちょっとずつの取材を積み重ねているうちに、気が付いたらそれだけの時間がたってたっていうことです。またほかの話もしようと思います。
よろしくお願いします。

鏑木　：ありがとうございます。「簡単に自己紹介」って言ったけど、簡単じゃなくていいです。

佐々木：すみません。

鏑木　：皆さんの思っていることをちょっとここでまずは。
もちろん、結果として短くても長くてもそれは構いませんので。じゃあ、寺田さん。

寺田　：はい。九州大学大学院の、今、修士1年の寺田愛理といいます。専攻は農学部といいますか、一番奥(の農学部棟)で森林、林業の研究をしております。中村先生を初めて知ったのは、大学1年生の講義のときに政治学の岡崎先生の授業の中で、中村哲先生のことをトピックスで取りあげられた回があって。正直、他の回の授業はとても難しくてあまり分からなかったんですけど、やっぱ、そのとき先生のお話を初めて知ってすごく衝撃を受けまして。それからご縁がいろいろありまして、ここにも参加している学生団体の先輩のご縁とかでペシャワール会の方のイベントを聞いたりとか。医学部キャンパスに哲先生が講演にいらっしゃったときに、実際、直接生でお声を伺うことができたりっていうことで、ほそぼそと関心は寄せておったんですけど、この、「中村哲先生の想いを繋ぐ会」があったときに裏方として参加させていただいたりとか、昨年、講義のときはティーチングアシスタントとして参加させていただいたという感じで今に至ります。はい、大体そんな感じです。よろしくお願いいたします。

岡本　：僕は九州大学の共創学部の2年生、次は3年生の、岡本偉吹といいます。(中村哲先生のことは)亡くなられたときに初めて知って。そのときは高校3年生のちょうど12月で、もうすぐ入試だったときに、自分が、そのときは国際協力みたいなところに行きたかったときで、初めて知ったときになかなか頭からそのニュースが離れなくて、結局、高校の先生とかにもいろいろ聞いたりしてたのを、何かすごく今、覚えてます。

中村先生が亡くなられて初めて知って、また、ちょっと入試があって関心が薄れちゃって。九州大学に入った後で、中村先生が九大出身だということを知って。九大と聞くまでは、西南学院大学出身だと思ってて。きょう来られている飯嶋先生の少人数セミナーっていう授業の中で中村先生の本を読む機会があって。その中で、ニュースで知っていたのは中村先生の、うわべだけっていうか。本を読んで深い部分を知っていっていうところから、何か、国際情勢を他の角度から見る目を与えてくれたような気がして。これからも勉強していきたいなって思ったときに、そこのメモリアルアーカイブの言葉選定の機会をいただいて、そこで言葉を選んできました。今は、野中さんとかと一緒に学生団体で「哲縁会（てつえんかい)」っていうのをやっています。よろしくお願いします。

松木　：福岡高校から来ました松木沙和といいます。

私が初めて中村哲さんを知ったのは、福岡高校に入学して、生徒会活動があるんですけど、生徒会活動がしたくて、どういうのしようかなって考えてたときに、一つの委員会に入って。この（渉外）委員会の中の仕事として毎年文化祭で中村哲さんのことを展示するっていうのがあったんですけど、それが自分の仕事として回ってきたときに、ああ、こういうのがあるんだなって思ってペシャワール会に行ってみたりとかする中で中村哲さんを知っていったんです。「ペシャワール班」っていうのを昨年の夏立ち上げて、それは、福岡高校にこんな偉大な先輩がいるのにあんまりみんなに知られていないからっていうので、やっぱり私たちも中村哲さんの思いを受け継いで、私たちも知って伝えていこうっていう思いで始めたんですけど。最近、アンケートで、「ペシャワール班についてどうですか？」みたいなの

を取ったときに、あんまりよく…。

思ってくれてる人は思ってくれてたんですけど、何をしているのか分からないとかっていうのがちょこちょこ聞かれて。同級生とかに伝えていくときに私たちが考えていることがなかなか思うように伝わらないことが多いので、そういう、同世代に伝えるときにどのようにして伝えていったらいいのかなっていうのが最近思っていることであります。よろしくお願いします。

坂本　：福岡高校から来ました坂本雄哉と申します。

中村先生のことは、ニュースで、中村先生がお亡くなりになられたっていうところで初めて知って。そのときは、アフガニスタンで医療に従事している方っていうことだけしか知らなくて。さっきお話、松木さんがお話しになったと思うんですけど、ペシャワール班っていうのを校内で立ち上げたときに中村先生のことをニュースとかを見て知って。医療活動だけじゃなくて、井戸掘りを行ったりとか用水路を建設したりとか、ちょっと言葉はあれかもしれないんですけど、医師らしからぬ行動といいますか、というのを行ってきて、本当にすごいなって感心して。

そんな方が母校、自分がいる高校をご卒業になられているっていうことで、狭い範囲ですけど、高校の中だけでもより多くの人に中村先生のことを知ってもらいたい。知って、何か受け継いでいけるものがあればと思って、今ペシャワール班で校内で展示を行ったりとか、今日、講演会をオンラインで行うんですけど、そういうのを通して、できるだけ多くの人に中村先生のことを知ってもらいたいと思って、今活動しています。本日はお願いします。

武内　：春吉小学校の武内厳太です。今日はよろしくお願いいたします。

僕が知ったきっかけは、もともと出身が下関、山口なんですけれども、福岡に大学から来て、春吉小学校に赴任したときにペシャワール会が近くにあるっていうことを知っていたんですけれども、僕も深くは、正直、知っていなくて。

中村哲さんが亡くなったときに、いろんな報道を見て、すごく、何か最初分からなかったですけれど、何でか引かれたんですよ、すごく。引かれて、1 週間後にもう道徳で教材化しようっていうことで自分でひたすら家で調べまくって、ビールも飲みながら、ひたすらもう、ひたっすら調べて。そしたらどんどん楽しくなってきて。最初、道徳科を 1 週間後にしたっていうことで。その後、2 年連続、今、6 年生を担任させていただいているので。教科書も改訂されて中村哲さんも国際協力のところにたまたま入ってきたのでそこでもっとピックアップしてそこの単元を広げられないかな？ていうのがきっかけで今に至っています。

あと、印象に残っている言葉で、「希望を守り育てるべき」っていうので。やっぱり、守る、守るっていうイメージがあるんですけど、育てるっていう感覚っていうのは今まで当たり前にあったようなものだったんですけど、意外と自分の感覚になかったのかなと思って。今、例えば、小学校のなりたい職業ランキングももうランク外になってる状況で。やっぱり僕も見てて思うんでけど、先生たちが疲弊している。自分もその 1 人なんですけど。やっぱり子どもたちに魅力に映らない職業。でもその職業が未来を担っていく子どもたちを育てるのにこのままでいいのかなっていうので、そこのきっかけで中村哲さんをピックアップした、そして今に至るっていうところが現状です。

僕、本当に、熱しやすく冷めやすいタイプなんですよ。本当、大学時代からいろんなものに手を付けては辞めて。サーフィンかっこいい、溺れかけて辞めるという。だから中村哲さんはすごい本当に引かれたんだろうなって、ずっと今までもいろんなものを見たり勉強させていただいております。今日はよろしくお願いいたします。

藤田　：皆さんこんにちは、藤田と申します。

私はナースなんですけれども、日本で中村先生の講演を聴いて。その頃の中村先生はパキスタンのペシャワールのミッションホスピタルという所でハンセン病の診療をしてありました。現地のイスラム教国というのはありますが、長い長い培われた文化の中で女性が男性に肌を見せないという、近親者にしか肌を見せないっていうのがありまして。ハンセン病は皮ふの症状から現れるので、なかなか女性の服をこう、剝ぐって皮膚の検査をできないというので女性の働き手をというところで、その話を聞いた2年後にペシャワールに行きました。

それからいろんな、本当にたくさんの出来事があったんですけれども、アフガンの難民との出会いとか、あとその医療過疎地、パキスタンもアフガニスタンも医療過疎地だらけで、ハンセン病だけじゃなくて他の病気も治療できてないという、そういう状況の中で両国に診療所をつくっていこうということで、そういうものから。あと、アフガニスタンのほうがそのうちに干ばつになったりして井戸掘りをせないかんっていうことで、当時はアフガニスタン、本当に、干ばつで何もなかったので。全部、資機材とか、ペシャワールのほうで準備しなきゃいけなかったために、その 3 年後に用水路をいよいよ掘り始めるんですけれども、そのときにも重機とかですね、掘削機とかブルドーザーとか土のうまでペシャワールのほうで買い付けなきゃいけなかったので、一時は工務店で働いているような感じで。とにかく、現地に行ったら、何でも、医者もナースも事務職の人も、何でもしないといけないという柔軟さが求められました。

今、中村先生がいなくなられて思うのは、何でもさせてもらっていて良かったなということを感じております。一つ思うのは、最近は中村先生のことをよく話したりする機会があるんですけれども、中村先生としては、まずは、「あんたがわしのことを話すのか？」ていうことで笑ってるんじゃないかなということと、もう一つは、中村先生ご自身が亡くなられた後、この、全国でこんな取りあげられているっていうことに恥ずかしい思いしているだろうな、とか。決して「自分が、何かを成し遂げたぞ」って言われる方ではなかったので、ちょっとキョトンとしてあるんじゃない？「この動きは何だ？」て思いながらキョトンってしてるんじゃないかなとか思いながらこの2年半ですか、過ごしておりました。

しかし、あまりにも「すごいことをなさった」とか言われると、特に小学校の子どもたちとか、中学生もそうですけど、取っ付きにくい。あまりにも偉大な人っていうふうにされてるようなところがあって。本当に私はすごく近くにいすぎたせいか、そうですね、現地滞在のうちの、先生と一緒に仕事を何でも話し合いながらやってきたので、何か、半分くらいは私は怒り、怒ってました。よくけんかもしました。けんかもっていうのは、今は「協議」というそうですね。協議をしながら、しばしば腹をたてておりました。だからもっと身近な等身大の先生を知ってほしいなっていうところもあります。

今日はどうぞよろしくお願いいたします。

鏑木　：ありがとうございます。今、一通り、ざっとお話ししていただいて、いろんな興味や関心が刺激されたんじゃないのかなと思います。もう、自然に、聞きたいことを聞いてもらってもいいかなと思っているんですけれども。

一つは、今、聞いてて思ったことは、高校生や大学生の立場で中村先生のことを伝えていこうというときに、どうしたらいいのかなっていう、それぞれの場所での戸惑いというか、問題。そういったところに、もしも何か思うことがあればいろいろアドバイスなり感じることを伝えてもらえたらいいかなと思っています。

あと、それ以外に、やっぱり、それぞれがやはり中村先生に触れられて、関わって、こんな長い付き合いになるとは思わなかった、こんな飽きっぽいのにあんなやれるとは思わなかったっていう。きっとまたそこは掘りだせばもっといろいろとお話ししたいこともあるのかなと。特に藤田さんには等身大の中村先生のお話をやっぱりいろいろ聞きたいなという気持ちがあります。

今、ざっとお話を聞いて、こんなこと、話ができたらいいのかなっていうことを取り出してみました。まずは中村先生についてもうちょっといろんな話、立場で知ったこと、あるいは関心持ったことを話してもらって、その後に、どんなふうに伝えたらいいんだろうかっていうような話に持っていきたいなっていうふうに思っています。

ということで、私のほうで勝手に流れを決めてしまいますが、あの、もしも話したいことがあれば、自由に違う流れで話をしても、構いません。ということで、少し順番を変えまして、では、飽きっぽい武内さんに、もう少し「中村先生のスピリット」っていうところで自分が感じるところを、ご自由にもうちょっとお話しいただきたいなと思います。

《中村先生が伝える現地、等身大の中村先生―意外とぶきっちょ》

武内　：飽きやすい武内です。飽きやすい武内なんですけど、なんで飽きやすいのに飽きなかったか。

シンプルに、かっこいいなっていう一言ですね。

僕、本当、いろいろすごい迷ったら、迷って、迷って、プラスしていくのはすごい簡単ですけど、大事なものをそぎ落としていく。授業をとってもそうなんですけど、膨大な学びの中から何を大切なところとしてピックアップしていくのかっていうのを考えたときに、すごい悩むんですよね。僕もいろいろ、まだまだ若いんですけど、悩むこともありまして。そのときには、かっこいいか格好悪いかっていう、すごいシンプルな考え方に、もう、最終的にはなっていくんですよ。

中村哲さんの、僕は『ニホンオオカミと呼ばれた』っていう新聞（＊注 6）とかも見たりとかして。国会の中でいろんな議員さんがいる中で、簡単に言うと、「あなたたちは現場を知らないんだ」、「今、現場の現状はこうなんだ」っていうのをバンッて言われたときに、国会の人たちからすごいいろんな批判を受けるんですね、やはり。それでも伝え続けるだけの、ただ言うだけじゃないっていう。

＊注 6 ：【中村哲という生き方】(中)ニホンオオカミと呼ばれ(2020-01-03, 西日本新聞)

https://www.nishinippon.co.jp/item/n/573015/

西日本新聞社の中村哲医師特別サイト「一隅を照らす」から公開されている

僕、そこ（インタビューシート）にちょっと書かせていただいているんですけれども、信念を貫くだけの思いと、力を付けている。何かそんなに真っすぐな目と心で伝えられる、このご時世ってなかなか難しいじゃないですか。いろんなしがらみ、教育界もそうなんですけど。例えば宗教問題だったりとか政治とかももちろんタブーですし。でもやっぱり中村哲先生の話をする中でやっぱり政治的な発言だったりとかをどう扱うかっていうのもそうなんですけど。何て伝えようかまとまってないんですけど、エネルギー、覚悟、言いづらいところもあるんですけど、強さと今必要な思いやり。

先ほど藤田さんがおっしゃられた、等身大の中村哲さんっていうので子どもたちも事務所にちょっとお邪魔させていただいたときに、藤田さんが「本当ぶきっちょで、いつも縫い目もきれいとかじゃない」とかっていう話をして。（一同：笑い声）

子どもたちが、今まで遠い存在だったのが、すごく、自分たちの身近な存在として落ちてきたんですよね。さっき話されていた、同級生にどう伝えるかっていうところにもつながるんですけど、やっぱり一番初めの取っ掛かりは、興味、関心をどう引かせるかだと思うんですよね。子どもたちで言ったら、教えたいことと自分の立場を、ギャップを埋めてあげる。最初にそれをするかしないかで伝わり方っていうのは変わるのかなって思います。すみません、ちょっとまとまってないですが。

鏑木　：いえいえ、全然。

武内　：すみません。よろしくお願いします。以上です。

鏑木　：まとまりは全然必要ないと思いますので。思ってることが、ポッポッと出てくるだけでいいと思います。もしもその場で聞きたいことがあればすぐに自由に発言してもいいですが、どうですか。よろしいですか。「縫い目もきれいじゃない」っていうのは何の？

藤田　：オペの。

鏑木　：オペの？

藤田　：はい。ハンセン病の患者さんたちの手術。大きいのになると脚の切断とかもあるんですけど、この、縫うのは、私のほうがすごく上手でした。（一同：笑い声）

縫う、それが、いろんなところを縫うんですけど、結構ぶきっちょで。オペの道具とかも足元に落として。あるときはメスが私の足の親指とそのとなりの指の間にストンと落ちたり、とか。大変ぶきっちょでいらしたんですけど、しかしまあ、その目的は果たすと。目が閉じることができるように。ハンセン病の患者さん、ここら辺の神経がやられてですね、目が閉じれなくなったり、脚をこう、持ち上げることができなかったりするんですけど、そういうのをもう一回、目が閉じられるようにするとか、脚が持ち上げられるようにこういう手術をするんですけれど、その、下手なんですが不器用なんですが、しっかりその技術は学んで目的は果たすんですよ。なので、目を閉じられるようになる手術も少し自分たちの手でどのぐらい閉じれるようになるかを調整してここで結ぶんですけどね。それがあまりにもき

ついと、目が、通常こうなるんですね。しかし閉じれるようになって失明は免れるという。
　そういう患者さんたちが来たら、もうすっかり自分がオペしたっていうのを忘れて、「きみ、これは閉め過ぎじゃないか！」って怒るので。（一同：笑い声）
「どの医者が手術したんだ？どこで？」とかって言って。
　でも私たちは覚えているので、みんな、もう、でも、先生は偉い先生なので、みんな、笑えないんですよ。私が先に笑って、みんなの苦痛を。（一同：笑い声）

藤田　：そんな、ぶきっちょなんだけども目的をきちっと果たすという。それがいろんなその後に始まる事業の中で生かされてました。なので、現地に来た日本人のワーカーたちもたくさんいましたけれども、現地の職員も割とそういうところでは親しみを感じるというのがありました。

鏑木　：ありがとうございます。佐々木さん、先ほど「取材していてもっと大事なことを話しているんじゃないか」と。そこをもう少しお話しいただけないですか。

《中村先生との出会い―自分の座標軸が変化する》

佐々木：最初は本当にちょうど9.11、それから米軍の空爆が迫るっていうタイミングで取材したので、「現地はどうなっていますか」みたいな話を聞いていたんですけど。こちらが今、目の前に起きていることを聞こうとすると、もう少し長い視野とか時間軸とか空間でお話しされたりとか、して。特にやっぱり、私、その当時、アフガニスタン、パキスタンに詳しくなかったわけですから、そうするとやっぱりアメリカから出てきた情報中心でそれを理解していたんですけど。「あ、現地側から見ると世の中ってこういうふうに見えるのか」みたいな、ある意味で、聖書の言葉ですけど「目から鱗が落ちる」みたいなね。西側というかアメリカ側に振れていた自分の座標がギューッと矯正されていくというか、修正されていくみたいな。あるいは日本から見ていたけど日本の外から見ると違って見えるみたいな、そういうのを覚えてですね。そういうのを繰り返しているうちに、やっぱり、本も読んだりして。こちらはでも、どうしても報道ですから、「今、現地の活動はどうなってますか」とか、「今、アフガニスタンはどうなってますか」ということを聞いて記事にすることが多いんですけれども、その記事の外側にもう少し長い視野や広い視野でお話ししていただいたり、あるいは、こっち側の見方だけじゃなくて、向こうから見ると世界はこう見えるんだみたいなことを教わったりしてですね。
　私も、このアンケートにも書いたんですけど、メディアの宿命というか、新聞だとページの広さ、テレビだと時間とかで、多分、聞いたことの10分の1というか、何十分の1くらいしか記事にできなくて。しかもさっき言ったように、「今はどうなってますか」っていうことを中心に書いてきたので、そこを書ききれなかったなっていうふうな、自分の筆力のなさみたいなものもあるし。逆に、書ききれなかったなと思うから、また行って聞かなきゃ、みたいなね。やっぱり、何回でも行って。例えば、「今どうなってますか」っていうのも、2001年はこうなっています、2002年はこうなっています、2003年はこうなっていますっていって、それをずうっと続けていくことでもう少し長い、変化っていうんでしょうか、ちょっとずつの変化かもしれないけれど。

例えば、2001 年当時は用水路は全く、2001 年の 9 月の段階で用水路の話なんてほとんど、もしかしたら考えてたかもしれないですけど、外には出てなかった。初めて私が用水路の話を聞くのは 2002 年の春か初夏ぐらいだったと思うんですけど、やっぱりそういうふうに、ああ、まだ全部書けないなと思って。あるいは、まだ全部聞けていないなと思って何回もインタビューしたり講演会行ったりしているうちに、だいぶ書けた、でもやっぱり全部伝えきれなかったな、みたいなのをやっていたら、気が付いたら 18 年追いかけてたみたいな感じですね。何か聞いても聞いても、書いても書いても、まだまだ、まだまだみたいな、ずっと続いたみたいなところがありますね、すごく。

ただそれはさっき申し上げたメディアの宿命で。例えば、1 冊の長い本とかだったら相当書き込めたり完結できたかもしれないんですけど、やはりどうしても新聞、それからテレビとかネットもほぼそうだと思うんですけど、一つはやっぱり、今起きてることはどうですかっていうことに軸足を置きがちなのと、もう一つは、物理的やら時間的やらな制約で、聞いたことのうちやっぱり優先順位を付けてニュース判断をして、なおかつその枠に収まるように報道しなきゃいけないっていうのとでやっぱりそれとも悩みながら、悩んで、答え出ないで、じゃあまた日本帰ってきているそうだから話を聞きに行こうみたいなことを繰り返してきたって感じです。

藤田　：あの、全然違う話ですけど、中村先生が亡くなる年の 2019 年にもあれでしたよね。「これから中村先生のことを書きます」っておっしゃって、都久志会館の。（＊注 7）

佐々木：そうです。楽屋で。

藤田　：はい、講演会場の都久志会館の控室で打ち合わせをしてあって。そんなら、あんまり時間が取れなかったので、そしてそのときは、自分が原稿書くのはいやだとか、中村先生はちょっときついから、それは、「自分が書くんだったらいやだ」とかおっしゃって。佐々木さんが「自分で先生の話を取材して書きますから」って言って。時間がなかなか取れないので、帰国したときに関西空港とかから移動する間にじゃあ取材をしてもらおうかっていうことで話が決まったんでしたよね。

佐々木：そうです。

藤田　：その後、1 回も、だから、結局できなかったんですよね。

佐々木：そう。そのときは実はうちの社内で中村さんの評伝っていうんでしょうか、ライフヒストリーを連載するっていう企画がやっと通って。ペシャワール会を通じて中村さんにお願いして、ちょうど都久志会館の楽屋で、「それは私が書くんですか」、「いやいや、聞いて書きますから」、「だったらいいですよ」っていう話になって、ゴーサインもらったんで、いつから始めましょうかって話になったときに、これ、本当に痛恨なんですけど、「じゃあ取材入る前にもう一度、本とかを全部洗いざらい読んで頭に

＊注 7 ： 2019 年 9 月 2 日、都久志会館（福岡県福岡市）で行われた講演

入れてから聞きたい」とお願いした。取材については、例えば関西空港から福岡。中村さん、国内移動は大体、新幹線使われていたんですよね。

藤田　：新幹線。

佐々木：ね。東京からでも新幹線を使われていたので。そうすると例えば、東京を往復したらそれだけで10時間くらいインタビュー取れるだろうとか、関西空港を往復したらそれだけで5、6時間インタビュー取れるだろうっていった、そういうのを何回か。その前に御著作を全部というか、手に入るだけ読んでから、準備してからって言ったのが2019年の9月で。

3カ月くらいかけて本を読んでたらあの事件が起こって、藤田さんに告別式でね、「佐々木さん、残念。約束ができなかったね」って言われたときに、僕も痛恨のね。なんであと1年早く準備を始めなかったんだろうとか、なんで、本は後から読みますから先にお話を聞かせてくださいってやらなかったんだろうかとか。ただ、準備なしで臨むのも失礼かなという判断も当時あったんですけど、まさか、しかもあんな事件が起こるなんて想像もしてなくって。その約束がやっぱり果たせなかったのが自分にとっては痛恨ですから、違う形でその約束は、果たしていかなきゃいけないんだろうなとは思いながら。これからやっぱりきちんと自分が聞いたり見たりしてきたこと、あるいは追加で周囲の方を取材して。

でも、せっかく約束を取り付けたのにそれが実現できなかったっていうのは、もう、本当に悔やんでも悔やみきれない。ちょっと、それ、すみません、話が横道にそれました。

當眞　：（座談の時間延長のアナウンス）Enjoy yourself、どうぞ楽しんでください。

鏑木　：いえ、横道じゃないと思います。

鏑木　：本当、だけど、そういうことがあったんだっていうのを知っただけで、僕はすごく、何か今胸がいっぱいです。等身大の中村先生を。僕は、生前は2回講演会を聞いただけで、直接お話をしたことはありませんので。福岡に2000年に来て、ペシャワール会を知って、すごいなというふうに思っていて。例えば、僕の知り合いは、講演の後に行ってですね、何か中村先生と話をして来るんですけど、僕はちょっと何かそういうお話しするような勇気もなくというか、遠くで見ているだけでいいかなと思ってたんですよ。まさかこんなことになるとは思ってなくて。

本当は、僕個人は、そういうものをどんなふうに伝えていけばいいのかって思ったときに、それぞれの立ち位置、親しい関係のものもあれば、ペシャワール会の働きを見て、感じることを伝えるようなこともあるだろうし、いろんな関わりがあるだろうと。そういう中で距離を持ちながら、しかし…、そうですよ、佐々木さんが座標軸っていう表現を使ってくれてて、僕、本当にそうだなって感じていまして。中村先生、ペシャワール会の活動がこういうふうにあるっていう、それに対してそこから見たとき、僕は何をしているのかなっていうのを考えながら参考にさせていただいているという、何かのためっていうより僕自身のためにやっているっていうようなところがあってですね。

ちょっと話がもう混乱しているんですけれども、だから、等身大の中村先生の話っていうのは僕にとっ

ては全然知らない裏側の部分なんですが、それを知ることで、さっき、どんなふうに伝えていけばいいのかって言ったときのいろんなヒントがあるような気がしました。
それで、いろんな見え方があって、本来であればもっと聞きたいことがたくさんあった、調べたいことがいろいろあったということだと思うんですけども、どうなんでしょうか。さっき手術のお話ありましたが、それ以外にも等身大の中村哲先生で、何かこんなところがあったんですよっていうふうに、若い人にお話しするとしたら？

《中村先生と働く―お話し好きで質問を楽しみにしていた中村先生》

藤田　：何か聞きたいことって。中村先生、私、（インタビューシートに）書いたと思うんですけど、物忘れがひどいとか、同じことを何回も言うとか、結構、中村先生と働くときの難しさと言いましょうか、朝おっしゃったことと夕方おっしゃることが随分違うときがあったり。それは勘違いが多いというふうに私は書いているんですけれども。
　私も一緒に仕事を始めて 2 年間は、黙ってたんです。いや、私の勘違いだろうかとか、先生のおっしゃる通りにしとったほうがいいとか、思ったんですけど、2 年過ぎたときに 1 回、日本に帰国したときにペシャワール会の方に相談したんですね、あんまりにも多いから。
そしたら、「それはやっぱり率直に先生と話したほうがいいよ」と言われてから、気楽に。「先生、それは朝はこういう指示でしたよね？」って言ったら、「僕、そんなこと言ったかね？」って言って、すぐに自分を変えれる方だったんです。それがもっと大きなことになって、良く言うと「協議」ですね。悪く言うとけんか腰になって言うと、中村先生は、『論語』にあるんですかね、「君子は豹変す」とか、何かそんな言葉でやり返してきたりとかされるんですよ。
　しかし、中村先生に、私が気楽にいろんないことを言えるようになったのは、ちゃんと聞く耳を持ってあるんですね。私たちの年齢を重ねていくと、何か年下の人にいろいろ言われたらカチンときたり、なにくそとか思ったりするんですよ。しかしちゃんと聞いて、「自分の言うたことはそういう意味じゃなかったんやけどね」とか、「あら、言い間違うとったね」とか、「あ、ごめんごめん」とか言って、次の仕事にそれを必ず生かしてくださってた。だから、ちゃんと聞いてくださってるなというふうにこっちも理解するわけですよ。だからやっぱり腹を立てて、私はよく本当に「目をそんなつり上げて言わんで」とか先生によく言われるぐらいカチンときてたんですけれども、腹を立てることなく、きちんと中村先生に伝えれば聞いてくださってるなっていうのはありました。
　佐々木さんは取材する側だったのでよくお分かりかと思いますが、中村先生結構話好きなんですよ。無口だということで通ってるみたいですけど。私さっき、鏑木先生のお話を伺って思ったのは、ああ、もったいないことなさったなって。
　講演に行ったときも、とにかく、この活動は長かったし、中村先生本人はいろんなことを話したい、いろんなことを知ってほしい、いろんなことを伝えたいと思っていらしたので、とにかく質問がお好きでした。私は日本に帰国して、後は中村先生の講演会にずっとついて、かばん持ちと言ってもかばんは持ってなかったんですけど、ついていったんですよね。そのときに「質問が出なかったら、あんたが質問しなさい」とか言って、「はい」って、質問。（一同：笑い声）

藤田　：はい。そのぐらいお好きでしたので、もったいないことなさったなと感じました。

　というのは、本当に、怒るときは怒るし。現地の人にも、暴力は絶対に振るいませんでしたが。うちには、今はアフガン人だけですけど、（当時は）パキスタン人、アフガン人で半々、それに日本人が混じって働いていましたので、いろんな民族が出てきたり、宗教的な問題が出てきたり、日本人の私たちが言ってることに対する問題が出てきたりするんです。

けれども、朝礼とかで話をして、よく、「あそこの山の雪を見てごらん」と。「あんたたちアフガン人が見て黄色く見えるか？　黒く見えるか？　山の雪は誰が見ても白いんだ」とか、「顕微鏡を見てこの菌を見たときに、これをアフガン人の菌だとかパキスタン人の菌だとかそういうことは見分けは付かないだろう？　だからみんなで仲良く仕事をしなさい」っていうふうに、分かりやすい言葉で。本当に簡単な言葉で、けっこう説得力もあることを話してありました。

　しかしそれが、朝礼のときとか終礼のときなんですけど、ウルドゥー語、これはパキスタンの公用語です。パシュトゥ語、これはパキスタン、アフガニスタンで使われている言葉。アフガニスタンだけで使われているダリー語っていうのがあるんですけど、この三つの言葉が入り交じって、そうやって話をされるので、なんか、みんなは聞いてて最後は笑ってしまうという。また先生言葉が混じってる～っていう感じでね、何ともおちゃめなところもあるし。怒ったら大変怖い面もありましたけども。中村先生が一貫していたのは、自分も口で言ってたら自分もそれを実行するという強いところはありましたね。失敗例はいろいろありますけど、そこら辺でいいんじゃないでしょうか。

鏑木　：ありがとうございます。皆さん、もったいないことがないように、今、いろんなことを聞いてくれたらいいかなあと思います。どうぞ。

松木　：藤田さんがアフガニスタンに行かれた当時って、日本から見るとアフガニスタンとかってどういうような？　今だとタリバンが、とかっていうイメージがあると思うんですけど、当時はどういうイメージを持たれてたんですか。

藤田　：私は知りませんでした、アフガニスタンという国がどういう国なのか、パキスタンっていう国がどういう国なのかっていうのを全く知らないで、ただ求められるままに飛び込んだ感じだったので、知らなくて。

　しかし、日本からパキスタンに。まずペシャワールに行くんですけど。そのときに中村先生に言われたのは、やっぱり、自分では意識してなくても、私は支援に行った側の人間なんですね。そして支援に行った側の人間だから、何もかも日本のものが一番だと思ってたんです。日本のものが一番いいというふうに思って現地に行くと、何でも、腹が立つくらい、そうなってないんですね。

　よく腹も立てたし、「もう私はここでは働けん！」って言って飛んで帰ってきたこともあるんですけども、そのときに中村先生が、何かいつもの話、普段に話してることで言ってたのは、「日本のほうが異常なことはあるんだ」っていうのを結構言ってたんですよ。その目で見るとですね、現地は本当、腸チフスとか結核とかマラリアとか。腸チフスとか言ったら、日本の方はすごく恐れますけど、現地は普通の病気なんですよ。診断さえ付いてちゃんと治療すれば確実に治る。しかし、診断が付かないで遅れ

てしまうと子どもはもうバタバタと死んでしまう、という感じなんですけれども。そういう環境の中にあって、ハエもいっぱい。腸チフスの菌の媒体になるんですけど、それがいて、感染したりすることもあるんですけどね。そういう所から日本を見ると、あまりにも潔癖すぎて、そのうちに、日本からこんな送られてきたボールペンに「抗菌」って書いてあって、何だこれは？と思って。（一同：笑い声）あまりにもきれいになりすぎたりとか、それはやっぱり現地から見るとすごく異質に感じるところもありました。

他の報道のこととかも、タリバン政権、私は日本にいなかったんですけど、日本から帰ってくる中村先生が、「タリバンたちがえらいたたかれようよ」って言われて、私たちは、なんでしょう、ベッタリはしてませんでしたが、タリバン政権のときはタリバン政権のルールに従ってアフガニスタンで活動していたので、別に、すごい貧しい人たちのことを考える人たちだったので、そのルールに従ってさえいれば安全に仕事ができたわけです。

で、この報道の違いは何だろうかとか、今のウクライナのこともありますけど、タリバン政権に去年政変したときのことも考えると、やっぱり中村先生のおっしゃってたことは正しいなと。正しいなというのは、そういう目で今の日本を見て、日本が全く正しいのかとか、報道は正しいのかとか、そういうことをやっぱりすんなり受け入れるんじゃなくて、この自分の目でとか、自分の頭で考えながら、これが悪い、これがいいっていうふうに決着つけるんじゃなくて、そういうこのやわらかい頭で見ていく必要があるのかなというのを中村先生から学びました。

松木　：ありがとうございます。

藤田　：すみません、長くなりました。

鏑木　：いえ。

《継承するだけでは十分ではない。　自分のプラスアルファを》

武内　：僕、ちょっといいですか。

鏑木　：どうぞ。

武内　：岡本さんに、ちょっと。

何かすごいいろいろ書いてて、これからのことをすごい考えた質問シートだなあというふうに家で見てて感じたんですけど。その中で中村先生を伝えるときに大事にしたいっていうところで、本当に尊敬できるもの、実際に岡本さんも選ばれてっていうところでいろんな本を読まれたんだろうなって感じたんですけど、「それを継承するだけでは十分ではない気がする」っていうところなんですけど、僕も近い考えのところがあって、岡本さんがどういうふうにそこの辺を考えているのかなって、もしあったら教えていただきたいなと思います。

岡本　：はい。中村先生の、生前、活動する時のことっていうのは、本当にここに書いてあるように尊敬できるもので、自分にとっても。先ほど、座標軸っていう言葉が出てきたと思うんですけど、自分にとっての座標軸みたいな感じになってきたものだったと思うんですけど、じゃあ、中村先生の言葉や活動だけを伝えていけば、それが中村先生が望まれてたことなのかなっていうふうに疑問に感じるようになってきて。逆に中村先生の、例えばその座標軸でものごと、いろんな、例えば今のロシアとウクライナの問題であったりとかも考えられるようにしなきゃいけないのかなとは思ったりっていうふうに、何かそんな気がして。

　じゃあ、本を読んだりして、功績や言葉について知っていくっていうのもすごい重要なことだと思うんですけど、それをプラスアルファで、どういうふうにして展開していけばいいのかなっていうことは自分で疑問に感じているところ、という意味で書きました。

武内　：ありがとうございます。僕も今、社会科研究委員会っていうのに入っているんですけど、そこでも中村哲さんの授業を発表させてもらって、教材とかを、福岡市の先生とかに一緒にしていく中で、伝えるだけじゃないっていう。やっぱり僕たち社会科の小学校の社会科研究の中で考えているのは、未来を担う子どもたちの未来志向っていうところを育てていこうっていうのを一番重きに置いていて。その中でもやっぱりいかに「自分ごと」に落としていくかっていうところで、先ほど、高校のことで「自分たちのしていることがうまく伝わらない」っておっしゃってたんですけど、僕はもうそういう活動をしているだけでも、もう、1 人、2 人、3 人と自分ごととして活動されている方がいる。もっと広げたいと思ったときに、伝える中に、さっき言った、自分のプラスアルファじゃないですけど、プラスアルファの活動が聞いてる側にとってすごく魅力的であれば広がっていくのかなと思って、僕も教えるときにすごくそれを気を付けていて。

　今回、ペシャワール会の会員になりたいと思って資料もいただいていたんですけど、春吉小学校にいる間に僕がペシャワール会に入って、それが、入ってるからそういうふうに広まってるとか伝えてるってなったらいやなので、もし入るのなら春吉を出て。来年度はまだ春吉にいることになったので、春吉を出てから入会して何かしたいなと思ってたんですけど、やっぱり、先ほど岡本さんが言われた、継承する、伝えるだけじゃなくて、プラスアルファのことがやっぱり人々にとって何かすごい魅力だなって思ったら、いろんな人が来てくるのかなと思いました。ありがとうございました。

藤田　：でも、武内先生…、明日交通事故に遭ったら、もう会員になれませんよ。

（一同：笑い声）

武内　：そうですね、確かに。

藤田　：こんなこと言ったらちょっとあれですけど、中村先生はいつも≪生≫も見つめておりましたが、≪死≫も見つめておりました。なのでいつも、自分がいなくなったらどうするかとか。

　私が赴任した当初は、日本から女性のお医者さんと一緒だったんですけど、結局現地のことをよく把

握してないので、一所懸命働いたんです。あるとき中村先生が日本から帰ってこられて、その姿を、私も一緒に働いていた方も何も不思議にも思わなくて、とにかく一所懸命働いたの、患者さんのためにも。中村先生が帰ってこられて、この私たちをすごく頭ごなしに怒鳴ったんですよ。それは、もう忘れもしないんですけれども、「あんたたちが主役じゃないぞ！」っておっしゃったんですね。そんなふうに言われて気が付いたら、私たちが全部仕事をしてしまうものですから、現地のメディカルワーカーたちも、例えば、ハンセン病の患者さんの脚の傷の手当をするとか、それを遠巻きに、何かいすに座って見ているという感じ。でも私たちはとにかく慣れない所で一生懸命やらなきゃって思ってこんなやってたんですね。そしたら、自分（中村先生）も外国人であると。「あんたたちも外国人で、いずれはここを去るんだから、彼らがやれる方法で仕事を進めてくれ」って言われて。いつも、この、そのときはだから 1990 年時代ですね。

いつも≪生≫も真剣に考えてありましたけど、この、≪死≫という。自分がここからいなくなるっていうのも考えてあったので、武内先生…、早く会員にならないといけません。（一同：笑い声）

武内　：そうですね。もう明日死んでしまう可能性もあるのか。ありがとうございます。
早く会員になります。大事に取っておきます。

藤田　：そんなところですね。

《中村哲さんについて教える―小学校の授業》

松木　：武内さんにちょっとお伺いしたいんですけど、授業でどのように中村さんのことを取りあげて小学生の子たちに伝えたりとか考えさせたりっていうのはどのように授業で取り扱ってきたのかなっていうのが気になるんですけど。

藤田　：私も聞きたかったです。

武内　：最初言った道徳科で言ったら、気持ちの面で。結構、中村哲さんのことを教えるときに、道徳性っていうか、そっち側が強く出てしまうところがあって。ただ、それを質問シートの中にどれぐらい出すか、抑えるかっていうのは、僕自身でコントロールは全くしてなくて。（「道徳性」が）出ようが、そこの中で押さえられようが、子どもたちが「これ」っていう何か一つ見つけたことに価値があるな、そう思っているので。社会科に落としていくときに、一番大切だなって教えるときに思ったのは、≪事実≫と≪解釈≫を分ける。どうしても解釈メインになってしまうと、自分がどう思ったか、道徳性が強くなってしまって、それこそ思想を教えてしまうっていう。僕がこの立場じゃなければ大丈夫だと思うんですけど、どうしても社会科で入れていこうってなったときには、事実を自分がどう解釈していくかってなったときに、子どもたちが思考の広がりとか深まりが出てくるんだって自分は感じているので、事実と解釈を分けるっていうことですかね。

あとは、最終的に自分ごと。さっき言った自分ごとじゃないけど、じゃあ自分たちで何ができるのか

っていうところに落とし込む授業を中村哲さんの場合は、今回はさせてもらったんですけど。今回、昨年と今年、2 年間させていただいて一番の違いは、前時に中村哲さんの授業につながる学習を入れたか入れなかったかっていうところで。去年は入れずに中村哲さんをやったんですけど、今年度は中村哲さんの前に違う学習を入れてやったんですよ。それは、中村哲さんがさっき等身大っていう言葉が出たんですけど、やっぱ、遠い存在。去年は、偉人だったみたいな授業になったんです。

それをどうしたら自分が子どもたちに近い距離、近くなればなるほど子どもたち、自分たちにもできるかもしれないって思うので、前時に、世界が身近に感じられるところないかなっていうので、吉塚市場リトルアジアマーケット。国が 3000 万円くらい補助金を出してリトルアジアを作っていこうっていう。もう廃れちゃったんですけど、そこから今、再生していっている。そこを取り扱う中で共生社会とか多様性を目指している人たちがこんなに近くにいるんだって取材を子どもたちが実際にして。で、哲さんに入っていったんですけど。やっぱ一番気を付けているのは事実と解釈。そしていかに≪近しい存在≫として子どもたちが感じ取れるかどうかっていう授業を常に、何の授業もそうなんですけれど。算数とかもそうで、何かただ単に、はい、じゃあ何リットルとかじゃなくて、実際に実物を見て楽しむ中で、これってなんで？ていう疑問を持たせることによって子どもたちが、「なんでやろ？」て、もっと知りたいって思うような学習にしていくことを心掛けています。

すみません、長くなりました。

松木　：ありがとうございます。

寺田　：重ねてお聞きしたいんですけど、その授業をやられた後の子どもたちの反応とかっていうのは、1 年目、2 年目との違いであったりとか、ちょっとお聞きしたいんですけれども。

武内　：1 年目も 2 年目も、卒業文集に尊敬する人、誰ですかっていう項目を子どもたち自身が作ったりするんですけど、中村哲さんって書く子がやっぱり数人いるっていうのと、違ったところでも何か書かせたときに、将来自分がどんな人になりたいかっていうときに、やっぱ中村哲さんの言葉が出てくるんですね。「困っている人がいたら僕はすぐ助けたい」とかですね。やっぱ子どもたち自身にも、それぞれ捉え方は違うけど、1 年目と 2 年目の大きな変化っていうのは、先ほど言った、偉人として捉えているか、自分たちにもできるって思って捉えているかの違いで。

ただ、すごく子どもたちは、じゃあ自分にとって何ができるのかなって思ったときに、電気を消すでもいいんですよね。未来を考えるときに。さっき、多角的って岡本さんが書かれてたけど、その出来事をいろんな視点から見るっていうのもそうだし、中村哲さんの業績を見たときに、ただ政治面だけじゃなくて、多面的じゃないですけれど、じゃあ環境面からも見てみようっていうようなそんな姿も子どもたちから見られたなって感じています。以上でございます。

寺田　：ありがとうございます。

武内　：難しかったんですが、一番は、やっぱり、何か楽しいとか、何か魅力。

さっき、最初の先生が（なりたい職業）ランク外じゃないですけど、それってすごい悲しいなと思って。自分もめちゃめちゃ疲弊しているんですよ。毎日帰って、それこそ 12 月 3 日に授業させていただいたものの、2 学期とかも死にそうなくらい。もう毎日、過呼吸になるんじゃないかっていうくらい。それは冗談なんですけど。本当、苦しかったりとか、毎日毎日分単位で、きょう、ここまで絶対終わらせないかん。じゃあそのためにこの資料を作ってこんなんしてとかって、めちゃめちゃ頭フル回転で、頭おかしくなるんじゃないかなって。本当に、頭おかしくなるんじゃないかなって。でも、未来を担う人たちが魅力的に映らない、教師が。中村哲さんもそうだと思うんですけど、魅力的に映ったからこんだけ広まった。何か、今、有名な方とか芸能人とかもそうじゃないですか。結局、魅力的に映ったから、その人がどんどんと輝いていく。何かその魅力的に映る人に自分がまずならないといけないなっていうので、最近はですね、何か、格好つけるようになってます。（一同：笑い声）

きょうも一番お気に入りの香水付けてます。こんな先生いていいんだっていいますか。

藤田　：うん。

武内　：すみません。

藤田　：いえ。

鏑木　：なるほど、かっこいいです。

武内　：ありがとうございます。

《死に直面する中で―「人生何があるか分からん」、自分は何をするか》

鏑木　：ちょっと頭の中で少し引っかかっていることが少し解かれようとしていると言いますか、「あんたたちが主役ではない」、現地ではまさにそうだと思うんです。そして、例えば日本で、戻ってきたとき、ペシャワール会に「先生のお仕事を見てとても感動させられます」って言うことはほとんどナンセンスですよね、ペシャワール会の働きにとっては。それよりは、ペシャワール会に何も言わなくて入会して、現地の活動で使える寄付金をしたほうが意味があるといいますか。

藤田　：はい。

鏑木　：そうですよね。（一同：笑い声）

藤田　：確かにそれはそうです。

鏑木　：その辺りっていうか、こういう活動とか、僕も授業（中村哲記念講座）とかやってて思うのは、

結局何かそういう、何の意味があるのかっていう。ペシャワール会の活動、現地の活動に関わることの意味っていうものもあると思います。もちろんそれが中心だと思うのですが、それを離れてそのスピリットを継承するといったときに、何というんでしょう、「感動しました！」ではちょっと薄すぎるんですけれども、それをもって自分が新しい何かをやるとか、さっきの、継承することの意味プラスアルファの部分なんですけれども、何か始めるっていうことがあり得ると思うんですよ。それはまたペシャワール会そのものの活動とは違うけれども、だけどそのスピリットを継承することで始まる何かっていうものも、あると思うんです。

何かそういう広がりというものを、考えられたらいいのかな、と。ただ、その際にやっぱり軸にある中村先生のされたお仕事の意味って言ったらいいでしょうか、それはきちんと受け止めて。で、明日死んじゃうかもしれないので、というようなことも思いながら、ちょっと、今、何かがこう…、つまりは同じことの繰り返しなんです。要するに「中村哲先生に関わるってどういうことなんだろうか」ということを考えさせられるんですよ。確かにもったいなかったと思うんです。ただ、僕とすると、僕が話を、時間取っちゃったら、他の人が話せないじゃないですか。何か他の人と話をしていたので。僕は僕なりに先生の言葉をいろいろ何か受け止めて、自分なりの何かをしていこうとかって考えてたんですね。

藤田　：あっ、はい。（一同：笑い声）

鏑木　：いや、すみません、何か、あの。

藤田　：いえ。

鏑木　：何を言いたいのか分かんなくなっちゃってるんですが、結局、意味のあること、継承して何かする意味のあることっていうのは、何か、そこ、もうちょっと僕もお話聞いて考えたいなっていうふうに思いました。

藤田　：いや、私もさっき、ちょっと言葉足らずだったんですけれども、よく中村先生と話してたのは、（みなさんは）まだ 20 代ですよね？　私も…

学生たち：10 代。（一同：笑い声）

藤田　：ごめんなさい、間違えた。失礼しました。

私が 30 代の頃、よく先生と話をしていたのは、中村先生はとにかく、困ってる人がいたら放っておけないという性質。性質というか、それで済ませていいのか分からないけど、そんな感じだったので、とにかくそれを察知すること。それから、どうやったらいいのかということを次から次に展開していかれるという中で、よく話していたのは、「人生何があるか分からん」と。本当に何があるか分からないですよね。先生がまさかあのときに死ぬなんて私たちもちっとも思ってなかったし、もう、「人生何があるか分からん」と。「その中で自分が何か人のためにできることっていうのは少ない」っていうよう

な話をよくしていました。私はそれがずっともう、そういう話をしていた頃から、日本に帰ってきても現地にいても、とにかく自分に与えられた何か。この言葉もいやなんですけど、何か役に立てるっていうものが身に付いたら、すぐ行動しなきゃと思うようになりました。

當眞　：(座談会の残り時間あと 5 分を知らせるアナウンス)

藤田　：例えば、紙くずが落ちてるとかいうときに、例えば、バス、電車に乗ってたりしたときに、お年寄りが乗ってきたときとか、荷物をたくさん持ってる人が乗ってきたときに席を譲る、割と勇気のいることですよね。でもそんなときに、もう、迷うことなく、あ、おばあちゃまに座っていただこうとか、そんなことを。格好つけるんじゃなくて、もう、この時間が。

　きみに与えられた時間っていうのは誰も分からない。もしかしたら明日、何か病気になってしまうかもしれない。その自分が置かれた中で何か役に立つことが自分が気が付いたらすぐしなきゃ、とかね、そういうこともよく中村先生と話していました。それで先生は突っ走るわけですよ。私たちは後ろからこうやって、ハアハア言いながらついてくるという…。そういうのを先生に教えてもらったというか、すごくいいというか、自分がこのどこでも生活する中で自分がどうありたいかっていう、そうカタいものじゃないんですけれども、どうにかそういうことって自分の人生であんまり遭遇することはないんじゃないかと。だから一つ一つが貴重な遭遇であって、そのときに何か自分がさっと動けるような自分でありたいなというのは。いつも動けてるわけじゃないけれども、そういうのは気を付けるというか、自分がどうありたいかで、そうしておきたいなというのは中村先生から学んだ大きなことかな。だから大きなことやないんですよ。

　中村先生が言ってたのは、日本で年老いた母親がいてとか父親がいてとか、誰か兄弟で病気の人がいて、そういう人を手厚くお世話している。そのことはニュースにもならないけれども、そういう人が自分は英雄だと思うって。たまたま自分はこのアフガニスタンに関わってててニュースに出たりするけれども、そういう人はいっぱいいて、そういう人こそが英雄だと思うって言ってたんです。

なのでそういう中村先生を私は好きでした、はい。いばってないし。

鏑木　：岡本くん。

岡本　：さっきの、藤田さんが、「主役じゃない」っていう言葉。いくつか前のところにあったと思うんですけど。僕が言葉の選定のときに気になった言葉で、「『いい経験になった』などというセリフは止せ、要するにきみらのロマンや満足のために仕事があるのではない。ともかく結果を出せ」。(＊注 8) 言ってる意味はちょっと違うかも分からないけれども、この言葉がすごく印象に残ってて。僕もそれまで、国際協力とか国際支援とか何か大まかなキラキラしたものにすごく何か憧れを抱いていて、その憧れが何かいい意味で幻滅したというようなことがあって。

＊注 8 ：『医者、用水路を拓く：アフガンの大地から世界の虚構に挑む』p177 (2007.11, 石風社)
http://hdl.handle.net/2324/4772333 (中村哲著述アーカイブ)

思い出したときに自分も、じゃあ、目の前に困っている人がいたらすぐ助けてきたのかなって思ったら、全然やってなかったなって、すごく自分に失望したっていうような思いがあって。今さっきの藤田さんのお言葉を聞いて、じゃあ、何かニュースにもならないような例えば小さなことでも、すごく、やることが、自分にとっての中村哲先生の思いや言葉を知る、プラスアルファになるのかなっていうふうに感じました。すみません、質問でもないですけれど。

藤田　：いえ。何か、「いい経験になりました」っていう、そこは、私たちは、カチンカチン来ながら中村先生と話してたんですけど、現地は、それだから、私たち、中村先生が活動を始めてるわけなんだけど、結構、この≪死≫と、例えば、ペシャワールですと、アフガン難民が難民キャンプに何十万と住んでいると。すごく劣悪な環境で住んでて。こっちはすごく、「日本から手伝いに来ました！」とか言って張りきって来る人もいっぱいいました。

當眞　：（グループでの座談の終了を知らせるアナウンス）

藤田　：その中で、もう現地はいやだと思って帰る人もいるんです。それを非難するんじゃなくて、そのときに、「いい経験をさせていただきました」って言われると、こっち側はもう≪死≫に直面している人たちをいっぱい見ているわけですよ。その中でその言葉があると、すごく、そういう言葉になるわけです。あんたたちの経験のために私たちはここで仕事してるんじゃないってなる。

だからああいうときはもう、いずれあなたたちもそういうことがあったりしたら本当にそういう言葉は発しないで、自分の心の中で何かを感じながら。挫折も大事だと思うんですよね、挫折。自分は環境には合わなかったっていう、そのことを経験するのも大事なことなので、もう何も言わないで「ありがとうございました」って言って帰ってもらったほうが、私たちは穏やかでおれたんです。その話はよく中村先生とやってて。あの、何か生々しいですか。

鏑木　：はい。ということであっという間でしたが、プログラムの都合上、座談会はここまで。

當眞　：全体でまた座談の時間がありますので。

鏑木　：　ええ。

當眞　：なんか本当につらいですね。もう終わりって言いたくないなっていう感じがしましたけれども。

鏑木　：　皆さん、本当にありがとうございました。それではまた全体の流れに入っていきます。

一同　：ありがとうございます。おつかれさまです。

（了）

座談会参加者のインタビューシートより

※座談会参加者に回答してもらった、事前インタビューシートから、回答の一部を抜粋して掲載しています。

	藤田千代子（ふじたちよこ） PMS 支援室長 ペシャワール会理事 元現地ワーカー
専門・仕事	看護師。日本での病院勤務を経てパキスタン・ペシャワールの中村哲医師の活動へ参加し、現在に至る。
中村哲先生とあなたとの関わりは？ 出会った/興味を持ったのはいつですか？	
共に働いた。 中村哲先生の講演会。	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
目の前に困難が立ちはだかっても、足踏みをしてゆっくり歩いたり、回り道をしたりして時を待てばよい。とにかく一生懸命力を尽くせば、たとえ失敗しても神様は許して下さるだろう。気がつかないだけで、私たちのまわりには恵みが備えられている。失っちゃいけないもの、医療人では思いやり。非難の合唱に加わらない。異文化のなかでちょっとした違いを自分の物差しで、優劣をつけたり、進んでいる遅れていると決めつけないように。等々	
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
たいへん楽天的なところがある。現地活動である地点にたどりつくまでたいへんな苦労をして嘆いたりしても、結果を出し次にとりかかる時にはいつも「ここから先は楽勝だ」と、とても明るく、しかし再度同じような苦労をするのだが。これの繰り返しで医療や用水路は進められた。決してあきらめることはなかった。謙虚なところ。神を恐れる。物忘れと勘違いが激しい。同じことを何度も何度も話す。	
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること	
困っている人を前に、何が困っているのか何が必要か、何をするべきかを見極め出来ることから実践する人である事を伝えたい。一方で失敗もたくさんあり普通の人ということも。	
その他	中村先生を知る人生と同時に知らないで人生を送ることも大いにあり得ますが、この九大プロジェクトで中村先生の事が次世代に継承されていくなかで、出来るだけ多くの人が”知る人生”を送られることを願っています。九大のご担当の方々のご努力に感謝致します。

	佐々木 亮（ささき りょう） 朝日新聞社 新聞記者
中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？	
取材。2001 年 9 月 17 日、福岡空港で初めて取材しました	
中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？	
「座標軸」あるいは「北極星」のような存在です	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
「もし道に倒れている人がいたら手を差し伸べる。それは普通のことです」	
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
決して「聖人君主」ではない人間味、だからこその素朴な正義感。	

中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること
大事なことは何度でも書いて伝えたいと考えてきました。 一方で、新聞の紙幅の制約から、書き切れない、載せきれないことがありました。
（報道関係の方へ）国際情勢が変動する中、中村哲先生の活動や価値観には変化はあったのでしょうか？＊
あくまで私見ですが、私が取材をはじめた当初、中村さんはある意味「孤高」の存在でしたが、次第にアフガニスタン政府や国連、JICA とも協働を探るようになっていったと思います。

その他	こうした活動を九大を拠点に、他校・他地域・他国の若い人たちも能動的に関われるように広げていってください。

	武内　厳太（たけうち　げんた）　　春吉小学校教諭　（社会科）

中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？
5 年前。　校区に PMS 事務所があり、中村哲先生をピックアップさせていただき、授業を公開。
中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？
シンプルに生き方がかっこよく、中村哲先生のようにかっこよく生きたいと思った。
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？
希望を守り育てるべき　誰も行かぬなら　我々が行く
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい
中村哲先生のもつエネルギーの源とは 中村哲先生の行動から見る心の在り方 中村哲先生のように信念を貫くだけの想いと力をつけ、大胆な発言を国会の場面などでも真っ直ぐな目と心で伝えることのできる人が今の社会であまりいないと思う。そんな人を今の社会だからこそ、無意識的に憧れ、求めているのではないかと思う。今のジェンダーフリーの社会でこの言葉が適切かどうかは分かりませんが、僕は、生物学的に男と自分自身で認識している者の奥底にある強くありたいと思う本能をくすぐられる。一言で言うと、過去から存在する強さと現代で必要な思いやる心のハイブリッド、そして、チャーミングな人柄が、今みなから注目を集める理由ではないかと考える。
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること
事実と解釈を分けること。
（先生方へ）中村先生について伝える際「道徳的」なメッセージ性を、どのくらい出そうと(抑えようと)していますか？＊
小 6 年生の社会科教科書に国際理解の大きな単元が 2 つあります！その中で、国際社会の仕組みを知るだけでは、学びは深まりません。自分ごととして考えるために、例えば前単元で身近な場所で共生社会を目指している所、僕は吉塚市場リトルアジアマーケットの目指す姿などをピックアップし、教材化し、そこから真の共生社会とは何かを学ぶことをはじめにしました。要するに、言葉（教えたいこと）と子どもとの距離やギャップをいかに縮めてあげた上で、中村哲先生の授業をすることだと考えます。そうすることで、思想だけでなく、根拠や事実をもとに自分の解釈から、学びをより広げ、深めることができると考えます。

	坂本雄哉（さかもと　ゆうや）　福岡高校 2 年 ペシャワール班
中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？	
約 2 年前ニュースで見て。中村先生の通っていた母校で活動している	
中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？	
物事の見方	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
百の診療所より一本の用水路	
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
現地の人々との接し方。中村先生がどのような意志で活動を行ったか	
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること	
現地の人々を第一に考えていたこと	
（高校生・大学生へ）中村哲先生について、どんなことを知りたい、学びたいですか？*	
現地の人々と接してどのように考えが変わったか	

	松木沙和（まつきさわ）　福岡高校 2 年 ペシャワール班
中村哲先生とあなたとの関わりは？　出会った/興味を持ったのはいつですか？	
去年の春頃。 中村哲先生の母校である福岡高校に通っていること	
中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？	
生徒会の活動などをする中でどのような精神を大事にして、仲間と協力して行っていけば良いのか影響を受けた	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
信頼は一朝にして築かれるものではない。利害を超え、忍耐を重ね、裏切られても裏切り返さない誠実さこそが人々の心に触れる。	
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
中村先生が残されてきた言葉一つ一つに込められた思い	
（高校生・大学生へ）中村哲先生について、どんなことを知りたい、学びたいですか？*	
現地で働いている様子について、中村哲先生の国際協力のあり方についての考え	

	岡本偉吹（おかもといぶき）九州大学共創学部 2 年　哲縁会
専門・仕事	民主主義の持続可能な発展の仕方
中村哲先生とあなたとの関わりは？　出会った/興味を持ったのはいつですか？	
亡くなられた際。読書やメディアを通して、こちらが一方的に存じ上げているのみです。 （中村哲医師メモリアルアーカイブの言葉の選定に参加）	

中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？
国際情勢を見る目をより多角的にしてくださったと思う
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？
環境問題を論じる際の発言について「『環境問題』という語の響きは、目前の旱魃を見てきた者にとって、いくぶん生ぬるい。このアフガニスタンという世界の片隅だけで、既に数百万人の人々が生存する空間を失っているのである。」図書館に掲示されてあるものです。
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい
命への向き合い方
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること
彼の生前の功績や言葉は、本当に尊敬できるものだが、それを継承するだけでは十分でない気がすること

	寺田愛理（てらだあいり）九州大学大学院修士１年　想いを繋ぐ会/哲縁会
専門・仕事	専攻は森林計画学で、森林管理について学んでいます。学生団体に所属し、地域活動を行っています。将来は、森林に関わる仕事をしながら、地域活動を継続していきたいです。

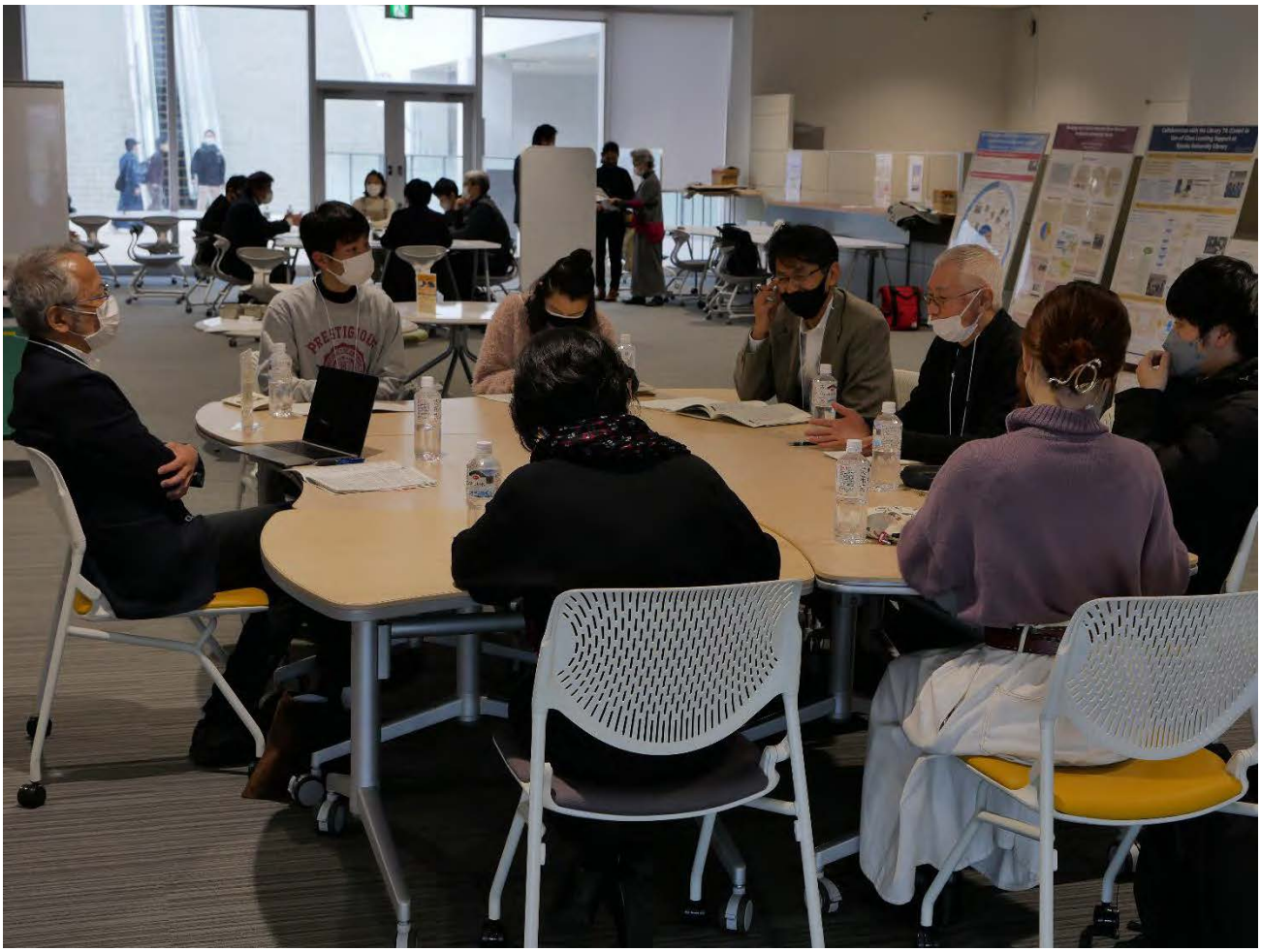
	鏑木政彦（かぶらぎまさひこ）　九州大学教授（政治思想史）　中村哲記念講座担当
専門・仕事	大学教員として、大学運営、学生の教育、研究をしています。大学運営では、この３月にはじめて卒業生を送り出す共創学部の学部長としての仕事や、全学の教育に関して教育担当の理事の補佐のような仕事をしています。学生の教育では、学部（共創学部）と大学院（地球社会統合科学府）の担当教員として、授業、ゼミ（少人数での講読）、論文指導を行っています。研究では、政治思想史という分野を専門としています。西洋世界が世界を支配していく 19 世紀から 20 世紀前半までの時代を対象に、遅れて近代化を果たしたドイツや日本に登場した近代批判の思想（ニーチェや和辻哲郎など）を読みながら、近代社会を生きる人間（個人と共同体の両面）の課題を掘り起こし、それに対してどう向き合うべきかを考えてきました。
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
『天、共に在り』の中に書かれている少年期のエピソード。大病で意識を失い、回復した後に読んだ絵本に出てきた「白髭の古老」が幻視のように現れ、対話を繰り返したという経験（42 頁）。「天、共に在り」「神聖なる空白」という中村哲医師の言葉がどんな経験から生み出されてきたのか、考えさせられる。	
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること	
政治との関係。中村医師の発言と行動は、政治的な立場の違いを超えた意味をもつ。だが世界の現実の中でそれは、何らかの政治的な意味をもつことになる。中村医師の言葉や行動を、いずれかの政治的立場や国の政策を批判したり、支持するために用いるのではなく、政治とは何かを根源的に反省できるような仕方で伝えたいと考えている。	

（先生方へ）中村先生について伝える際「道徳的」なメッセージ性を、どのくらい出そうと(抑えようと)していますか？*

政治と同様に、中村哲医師の考えや行動を道徳から切り離すことはできないと思う。ただ、何らかの道徳的メッセージを発するためにその思想や行動を語ることには、慎重でありたいと思う。それは政治的立場のために中村医師の言葉や行動を引用したくないと思うのと同様である。大切なことは、中村哲医師の言葉と行動、およびそれらが発言され実行されたコンテクストを精確に伝えることだと思う。そこからどのようなメッセージを汲み取るかは、聴く側に委ねたいと思う。

座談会「中村哲先生のスピリットを継承する」記録

座談グループ ： ダラエ・ヌール



進行役 ： 久保智之　九州大学人文科学研究院教授（言語学）・九州大学附属図書館長
参加者 ： 福元満治　図書出版石風社 代表・ペシャワール会
臼井賢一郎 KBC 九州朝日放送 解説委員長
山下隼人　ペシャワール会 PMS 支援室
中西幸大　福岡高校 1 年 ペシャワール班
野中諒　九州大学文学部 2 年・中村哲先生の想いを繋ぐ会/哲縁会
初見かおり 九州大学広報本部サイエンスコミュニケーター
オブザーバー：レイク沙羅 九州大学共創学部 1 年 哲縁会
座談会コーディネーター ： 當眞千賀子 九州大学人間環境学研究院教授（発達心理学）

記録 ： 九州大学附属図書館
※ この記録に登場する参加者の所属等は、座談会が開催された 2022 年 3 月当時のものです。

久保　：さっきお名前だけ紹介があったので、ちょっとアイスブレークというか、打ち解けるために、もう打ち解けてらっしゃる方もいるかもしれませんが、この中で「好きなもの」っていうのありましたね。私、そこしか書いてなかったような気がするけど。「大好きなもの、楽しみは？」、これをキーワードに、お一人ずつ簡単に自己紹介していただいて、それから、「ご自分にとっての中村哲先生」というような感じで、お話をそれぞれ聞かせて、分かち合いができればと思ってますが、いかがでしょうか。

《自己紹介、大好きなもの、楽しみは？》

久保　：とりあえず私から。私、山登りって書いたかな。中村先生も、一番最初にアフガニスタンと関わられたのは山登りだったと思いますが、私はそんな本格的なのじゃなくて、今週も月、火、水は山に行ったんですけど、朝5時に起きて、近くにある300メートルの山に登って、それから出勤という。結構寒かったですけど、この頃、ものすごくぬくくなって、そんな感じで、もうだいぶ年になったんですが、山登りで体をちゃんと健康に保とうというようなことをやっております。よろしくお願いします。

一同　：　よろしくお願いします。

久保　：他にも、山登りって書いてらした方、いらっしゃるような。

福元　：山歩きです、私は。

久保　：山歩きですか。じゃあ、お願いします。福元さんですね。

福元　：温泉付きの山歩きとNetflixいうのが。

久保　：いいですね。

福元　：コロナでなかなか行けないんですけれども、前は頻繁に九重の裾野をうろうろしてたんです。九重の麓の温泉宿に行ってました、年に5、6回ぐらいですが、コロナでなかなかそうもいかなくなりました。もう一つは、Netflixでドキュメンタリーを観ることと書いています。コロナになって、ちょっとでかいテレビを買いまして、それでNetflixとYouTubeを見始めました。映画も観ますが、ドキュメンタリーの質がなかなかいいんですね。それで、毎日1、2本は観ています。

　隣にテレビ局の方がいらっしゃるんですけども、YouTubeっていうのはあらゆるジャンルのいわばアーカイブスで、70年代のニーナ・シモンのライブがあったり、浅川マキのライブがあるんですね。そういうものを観たり。ニュースも、オンタイムで見なくても、いつでも各社のニュースが観れる。

　以前はよくDVDを借りていたんですが、今は家の中にレンタルビデオ屋があるようなもんです。Netflixの製作費はNHKの5倍ぐらいあるらしいので、これはメディアにとっては非常な脅威でしょうね。テレビ局も新聞社も、かなり危機的ではないでしょうか。

私らの世代が、あと 10 年ちょっとすると死に絶えていきますから、そうすると、新聞を読む世代は激減すると思います。紙の新聞は、今のままだと、ほとんど壊滅的になるだろうと思います。私は出版社をやってますので、新聞広告を出したりもするんですが、広告の掲載料がかなり安くなったんですね。つまり、新聞は広告収入が以前の半分以下になっていると思います。全国紙も地方紙も、部数が劇的に減って夕刊がなくなった新聞社も多くあります。

紙の新聞というメディアがなくなっていくかもしれない。そうすると、「社会の木鐸」としての機能が果たせなくなっていく。実際、アメリカ辺りでは、紙の地域新聞がなくなったせいで、公務員の不正が増えたっていうことがあるんですね。

久保　：私の世代では、もう新聞、取ってないっていう人間、だいぶいます。

福元　：そうでしょうね。

久保　：皆さん、取ってらっしゃる。

初見　：私は広報室で取ってるんですけど、広報室も今年までは、学生さんたちに新聞スタッフで切り抜きしていただいてたんですけど、来年から廃止になると。全部オンラインのほうになるみたい。多分、九大広報室も、紙はそろそろ終わります。

久保　：学生さん、あんまり取ってないんじゃないですかね。

福元　：ほとんど取ってないのではないかと思います、学生さんは。

うち（石風社）はまだ 4 紙ぐらい取ってるんですね、そうすると、月曜日になると事務所には山のように新聞があって、これを読むのが結構大変です。若い人たちが活字を読まなくなったって言われますが、そんなことはないだろうと思います。活字自体はかなり読んでると思う。

極論かもしれませんが、紙の新聞のニュース的機能っていうのはほとんどなくなってるんじゃないかと思いますね。それと、記事が面白くないんですよ。私の偏見かもしれませんが、記者の主体性と身体性が希薄になっている。だから面白くない。新聞を読むときにも、個性的で面白いエッセーだとか、気の利いた時事解説みたいなものは読みますけれど、読むに値する内容が減ってるように感じます。

久保　：ありがとうございます。皆さんにいろいろしゃべってほしいので。

福元　：はい、どうぞ。

久保　：臼井さん、今、やり玉じゃないけど。

臼井　：ジャーナリズムの危機については、今、福元さんがおっしゃったのが、私も実は、その中にいつ

つも、同じような認識を持っていて、テレビジャーナリズムについても表現において相当厳しいというか、時にお粗末というかね。本格的なルポルタージュは、恐らく相当減ってきているなっていうのを感じていて、それはジャーナリズム全体にとって非常にまずいなっていうふうに思っています。

確かに、新聞、読まなくなりました、テレビ、見なくなりましたっていうんですけども、今日もそういう話になれば確認したいんですけども、決してニュースを嫌いじゃない。見ないわけじゃないし、本格的な、多分、調査報道とかルポを、読まないわけじゃないと思うんですよ。あれば読むんだろうと思うし、見るんだろうと思うので、結局、それをどういうふうに伝達させるかというところが、今、われわれの課題みたいになっているんです。

けれど、さっき、福元さんがおっしゃったように、Netflix、すごかったり、相当な競争相手が、今、ネット上にあふれているので、旧来のクラシカルメディアは非常に困惑しているというか、それに乗っていくのにどうするかっていうところが、偽らざるところです。

久保　：なるほど。

臼井　：話を戻しますと、大好きなものということで、クラシック音楽の鑑賞と書きました。その中にも佐渡裕さんの名前が出たり、浅利慶太さんの名前が出ていますけど、要するに、舞台芸術とかそういうのが、私好きなんです。

とりわけ、クラシックと書いたのは、ドイツの特派員として、ベルリン支局長をテレビ朝日系列で担当した時期、今から二十数年前、1998 年の 1 月から、2001 年のちょうど同時多発テロが始まるぐらいまで担当しまして、ベルリンっていうのは、ご存じのとおり、ベルリンフィルハーモニーをはじめ、宝物の山なんですね。その宝を前にして、それを掘らないわけにはいかんなということで、行くようになったんですよね。

昔からクラシックは、嫌いじゃなかったけども、そんなに興味もなかったんですが、行ったらものすごくはまってしまいまして、それから本当によく行くようになって。ベルリンは、ベルリンフィルがありながらも、世界の最高峰の芸術の都市なので、もちろん、隣からウィーンフィルも来ますし、アメリカからもわんさか来ますし、もちろん、日本の楽団も勝負しに来るし、いろいろなそういう環境下があったので、たっぷり聞いたと。

ベルリンフィルって、今、相当、普通に買うと高いんですよ。実は、地元にいると、ポディウム席っていうのがあるんですね。オーケストラピットのすぐ後ろにある。椅子が全然、大した椅子ではないんですけど、音も、ティンパニーや太鼓がうるさかったりするような、バランスからはちょっとかけ離れた部分なんですけど、そこですと、当日で 800 円ぐらいで見れるんですね。そういうトライもしながら、いろいろ、もちろん普通の席も行くんですけど、かなり見たというところで、クラシックが好きになったということです。

ヨーロッパの話をちょっとさせてもらうと、今とちょうど真逆ですね。そこ（インタビューシート）にも書いていますけども、EU 拡大、EU サロンというとこで、旧東欧系の国が次々に加盟をしていく。何に対して敵と設定するのかというのが明確じゃなくなっていく。ソビエトが崩壊してしばらくたって、ロシアの力が静かになっている時期だったんです。

そこで、いってみれば、調子に乗って EU サロンがどんどんでかくなっていったんですね。恐らく、その澱（おり）みたいなのが、30 年たまってるのが、今回のウクライナの一つのきっかけだろうというふうに、私は見てますけども、そういう、取りあえず冷戦が終わって、新たな拡大が行われるというところにいました。

久保　：ありがとうございます。じゃあ、山下さんにお願いしましょうか。

山下　：はい。

久保　：アイスブレークのつもりだったんですが、結構まじめな話になってます。ちょっと短めに。

山下　：はい。ペシャワール会の山下と申します。よろしくお願いします。今、ペシャワール会に入職して、4 月で丸 3 年なんですけども、好きなものは動物と書きました。もともと小さいときから動物が好きで、家でも犬を飼ってたりして、高校生のときは、獣医さんにでもなって動物園とかで働きたいなとか思っていたんですけども、なぜか、今 NGO で働いてます。以上です。

久保　：はい。向こうに、アフガニスタンに行ったりする機会も。

山下　：アフガニスタンは、2016 年頃を最後に、今は退職した先輩が 1 週間だけ行ったんです。もともと 1 カ月の渡航予定で、1 週間、アフガニスタンにいたところで、現地の責任者の方から、危ないから帰れというふうに言われて、帰って。それから今までずっと、ビザは日本からは出てないです。

久保　：そうなんですね。厳しいですね。

山下　：はい。なので、私も行ったことはございません。

久保　：中西さん。

中西　：福岡高校の中西と申します。今回、恐らく、会の中で最年少になると思うんですが、たくさん学べることだったり受け取れるものがあったらいいと思ってます。趣味が、乃木坂って書いてて、がっつり趣味な感じで、ちょっと「やったな・・・」と思ってるんですけど、登山の話が出てると思うんですけど、高校で登山部に所属してて、登山が好きです。

久保　：どこら辺、行ってるんですか、山は。

中西　：福岡の英彦山だったり。春に屋久島に行く予定だったんですけど、教育委員会の方針とかで、コロナ禍であんまり行ったら駄目ということで中止になったんです。いつか屋久島に行けたらいいな

と思ってます。

久保　：いいですね。このペシャワール班って、長いんですか歴史は。

中西　：もともと（福岡）高校のほうでペシャワール会を扱っていて、（渉外）委員会の生徒会活動に1回なったんですけど、専門的には扱ってなくて、他の仕事のついでにペシャワール（会）のことも扱うというやつなんです。ペシャワール会のことを調べて、それをする組織っていうのを生徒会の中につくったのが今年度の夏で。まだ発足して 1 年足らずっていう感じなんですが、中村さんの母校でもあるので、文化祭で発信していったり、そういうことをできたらいいなと思ってます。

久保　：結構、人数いるんですか。

中西　：いや、まだ今 5 人ぐらいで少ないんですが、どんどん増やせていったらいいなと思ってます。

久保　：すごいですね、高校生。野中さん。

野中　：はい。九州大学の文学部の、今井先生と岡崎先生ご指導の西洋史学研究室のほうで、最近は、第 1 次世界大戦と第 2 次世界大戦の戦間期におけるアルザスでの自治主義者たちが、民族主義者と言われることもあるんですけど、その人たちの葛藤とか経験について研究できたらいいなと思いつつ、卒論の準備に入っております。

趣味が、研究室に、昼前にいると、この図書館の入り口のほうにあった童夢カフェのパンの方が訪問販売に来てくださってるので、それを楽しみにしてるのと、あと、実家に猫がいるので、実家に帰ったときは、猫とよく遊んでいます。

久保　：童夢カフェのパンっておいしいんですか。

野中　：カレーパンが本当に絶品で。

昼前になると、もしかしたら匂ってくるかもしれないんですけど、本当におなかがすく感じです。よろしくお願いします。

久保　：アルザスってあれですよね、ドーデの『最後の授業』ってありますね、あの舞台というか。

野中　：最近のウクライナ情勢においても（話題に上る）、アイデンティティー問題で最初は気になっていたんですけど、自分たちがドイツ人なのかフランス人なのか、それとも、いや自分たちはアルザス人だって言ってる人もいて、すごい地域だなと思って、興味が出て来ます。頑張りたいです。

初見　：はい。九州大学で、サイエンスコミュニケーターという仕事をしています、初見と申します。

標高 700～1000 メートル級の長野県で育ったので、福岡の人が山って言うと、どれが山なんだ？と。すみません、丘にしか見えないんですけど、皆さん、山と呼ばれてて、すごいすてきだなって思うんですよ。それでも、九州が大好きで、九州から出る気持ちは全くないんですけど。

好きなものはスリランカのカレーなんですけど、研究の関係で、文化人類学の研究で長い間スリランカと関わっていたので、スリランカカレーと書かせていただきました。今日は、多分、年代的に真ん中辺りに位置する人間として、哲先生の世代と、皆さんの若い方たちの間で、自分が何をしてくべきか、何ができるのかっていうのを、真剣に考えてるんですけど、それについて感触が得られたらなと思っております。よろしくお願いします。

久保　：ありがとうございます。

レイク：本日は来れるか分からなかったので、オブザーバー参加で、インタビューシートは書いていないのですが、レイク沙羅と申します。九州大学の、次、2 年生です。今、1 年生の終わりです。

好きなものは、読書が好きで、私も周りを見てて、文字を目で追うこと自体に苦労してる人もよく見るんですけど、その中では、比較的文字を目で追うっていうのが苦じゃないので、いろんな文字媒体の情報を取ることに抵抗がないので、うれしいというか、本や文字を楽しく読めるっていうことのありがたさに、最近、気付きました。

爬虫類が苦手って（他の方が）書いてあったんですけど、逆に、爬虫類が好き。あと、好きなものは、私もクラシック音楽が好きで、いつか生の演奏を聞いてみたいと思っています。そういう感じです。本日はよろしくお願いいたします。

久保　：どうもありがとうございます。じゃあ、一通り紹介が終わったと思いますので。

あまり方向性とかは決めないというのが今日の方針というふうに、さっき言ってましたけども、皆さん、ご自分にとっての中村哲先生とか、どういう視点でも結構ですので、中村先生とのつながりみたいなのを話をしていただいて、それで分かち合いがみんなでできれば、第 1 回としては十分かなという気がしておりますが、いかがでしょうか。どなたからでも。

初見　：個人的には福元さんに、すみません、少しお話ししていただきたいんですけど、多分、一番ご存じな方で。

福元　：かなり長い話に。

初見　：じゃあ、途中で久保先生が切られるので。

久保　：いやいや。

《中村先生との出会い：出版社と著者という関係で終わらないだろうなという予感》

福元　：私が関わりはじめたのが 87 年頃で、会自体が発足したのが 83 年なんです。84 年から中村さんはペシャワールに行かれておりまして、私は最初の頃、中村先生のことは新聞では知ってたんですね。途上国で、貧しい国の人を診療する奇特なお医者さんがいると、そういう美しい話は、自分には縁がないと思ったんですね。正直、そういう話は苦手だと思っておりました。

私はここで最高齢だと思うんですけど、数の多い一番うっとうしい世代でして、全共闘世代とか団塊の世代とか言われてまして、1 クラス五十何人、学年が十数クラスあるような世代です。ちょうど戦後すぐ、うちの父親が満州から帰ってきて、復員してきた男たちの勢い余ってできた子どもたちなんですね。その後大学の騒動も経験をいたしまして、水俣病事件にも関わったものですから、一般的な市民運動というようなものに対して、私、あまり気が乗らなかったんです。

そういう中にあって、たまたま 1987 年頃、ちょうどバブルの最中なんですけれども、中村さんの連載エッセイを西日本新聞で読みまして、それは『ふるさと』というタイトルのもので、アフガンの難民でハンセン病の少年の話だったんです。（＊注 9）中村医師が回診のときに、その少年に、「君はきょうも生きてるかい」っていうふうに尋ねるんです。そうすると、その少年が暗い顔をしたまま、「僕は生きてるけど、僕の命は完全ではないんです」っていうようなことを訴えるわけです。中村先生がハッとして 2 人でちょっと問答をする。中村さんは、なんとかしてこの少年に希望を与えなきゃいけない、というふうに思う。と、そういうふうなくだりがありまして、それを読んでいたときに、久しぶりに、自分のさめた気持ちみたいなものに、熱い血が巡ってくるような感覚を覚えたんです。

私は出版社を 1981 年に始めておりまして、それを読んで、この人の本を出したいと思った。ちょっとのぼせ上がって、「他の出版社には出させないぞ」というぐらい頭に血が上ったわけです。それで、ペシャワール会に出掛けていきまして、取りあえず、1 年間は黙って手伝いをしようということで、会員への礼状を書いたりすることをやっておりました。中村さんに会って、本を出したいということを話して、「分かった、いいよ」という話で、それでできたのが『ペシャワールにて』（1989.3，石風社）という、一番最初の本なんですね。

普通、　著者と出版社の関係っていうのは、本が出てしまえばそれで終わってしまうんですね。普通の編集者っていうのは、著者と編集者という「矩（のり）を踰（こ）え」ないんです。でも、私はそのときに、「この人の本を出すと、出版社と著者という関係で終わらないだろうな」という、そういう予感がしたんです。

結果的に、現地に 20 回ぐらい行くことになりました。そして、広報担当の責任になって、2 年、3 年前まではペシャワール会の事務局長をやっていました。2000 年までは、ペシャワール会には専従者が一人もおりませんでしたので、私の事務所が一時期、分室という形で外からの連絡を受けるということ

＊注 9 ：【地の果てから】(14)　＜ふるさと＞(上)いつかは父が迎えに来る（1987-10-02、西日本新聞朝刊）
https://www.nishinippon.co.jp/item/n/613397/
『地の果てから ： パキスタン北西辺境の人々』は、1987 年 9～10 月に西日本新聞夕刊で掲載された連載。
ペシャワール会報 14（1987.12）　http://hdl.handle.net/2324/4362866（中村哲著述アーカイブ）

もやっていたわけです。

それから、中村さん関連の本、主要図書の6冊を含めて全部で10冊ぐらい出しました。

それで、私の役割は、たまたま出版社をやってたということもありまして、マスコミに知り合いもあったものですから、先生の著作を出すとともに広報活動を整えたわけです。会報を定期的に出すとか記者会見したりとかですね。

そのことによって、会の発足時は、「哲っちゃんがやるから、応援しよう」っていう、同級生や教会の仲間という友人や知人の同好会的感覚だったものが、中村医師の事業そのものに対する関心とか共感によって、会の性格が事業中心に変わっていく、そういう広報的な役割はあったのではないかと思います。

それと、これは後で気付いたのですが、私は中村さんに嫉妬したんですね。中村さんのハンセン病の患者やアフガン難民に対する〈関係の深さ〉に嫉妬したことに気づきました。

《等身大の、人間くさい中村先生、 NGOペシャワール会の努力》

久保　：福元さん、ここに、『あまり理想化せずに、等身大の先生が成した本当にすごい実像を伝えたい』というふうに書いてらっしゃいますけど。

福元　：中村医師は、聖人であるとか偉人であるとか言われることがありますが、ある意味では非常に人間くさい人で。常に現場で判断する人ですから、例えば、朝言ったことと夕方言うことが違うっていうこともたまにあったんですね。現場に即して判断を変えるわけです。

當眞　：(座談の時間延長のアナウンス) Enjoy yourself、どうぞ楽しんでください。

福元　：じゃあ、できるだけ早めに切り上げます。中村医師は『花と龍』(火野葦平著) の主人公玉井金五郎の孫でして、そういう意味では、玉井家の血脈みたいなもの、血筋を引いている。それから、火野葦平というのは、ご存じのように、『糞尿譚』という作品で芥川賞を取った人で、『麦と兵隊』、『花と兵隊』、『土と兵隊』の3部作で、戦前は国民的ベストセラー作家だったんです。戦後は一転してGHQによって公職追放されたりしましたけれども、そういう人が伯父さんです。

中村先生は、ご存じのように、非常に文章が巧みな人で、巧みっていうよりは、読んでいただけると分かると思うんですが、きわめて明快な文章で、明快なうえに非常に思索的な文章なんですね。そして、物事を単線的に見るのではなくて、かなり深く、複合的に見てる人ですね。それに戦略的で構想力のある人でした。

だから、若松の沖仲仕の元締めだったおじいさんのある種の義侠心みたいなものと、伯父さんの持ってる文章力みたいなものを兼ね備えている。ペシャワール会やその現地事業体である PMS (平和医療団・日本) が、広がりの力を持ってるというのは、現地事業に実体があり実質があるっていうのが一番なんですけれども、それを中村さんがかなりクリアに、そして、ディープに、文章によって伝えていくという、そういう力があったっていうことが大きいのではないかというふうには思います。

ついでに申し上げますと、NGO の存続に必要な点というのは 3 つあると思っています。一つは、まず、「事業に実体があること」ですね。2 つ目は、「それをきちんと、明暗を含めて伝える」と、それから、3 つめが、「会計、財政がきちんとしてる」ということですね。実際に九州で二つの大きい NGO があったんですけれど、これが両方ともつぶれてしまった。要するに、実態を粉飾してきれい事しか報告しなかった。そしてお金を流用してしまったということです。NGO に関わらず、組織っていうのはみんな同じだとは思うんですけれども、往々にして、実態を粉飾する NGO っていうのがある。きれい事だけ言って、そして、会計が不明瞭、ということがあるんですね。

だから、ペシャワール会の場合は、まず事業に実体がある、ということですね。具体的に医療活動を行ったり、井戸を掘ったり用水路を造ったりする。その中で、きれい事だけではなくて、そこで起こったいろんな困難な問題についても報告する、ということがある。それから、会計は税理士さんがきちんとやってますし、弁護士もちゃんと承認する。しかも、できるだけ現場に多くのお金を使う。

ある程度、全てとは言いませんけれども、大きい組織では、国連を含めて、どうしても組織維持のほうにお金を使いがちである、現場ではなくて。例えれば、水を送るのに、送る手段であるポンプとかホースの維持費のほうが高くて、実際の水はちょろちょろとしか出ないとか、そういうふうなことが往々にしてあります。けれども、ペシャワール会は、極力そういうことのないように、現場に、実際のお金を含めて、届くようにしてきたっていうようなことがあると思います。

それから、中村さんは寡黙な人に見えるんですけれども、移動中はよくしゃべる人です。いろんなことを話をしてくれまして、いろんな話を聞きました。話せないこともいっぱいあるんですけれども。

一つだけ面白い話をしますと、中村さんは英語も、それから、現地のウルドゥー語も、パシュトゥー語もしゃべった。私、一緒に移動してるときに、ダラエ・ピーチで同じ部屋で泊まってましたら、突然、夜、中村さんが何か言いだしたんですね。どうしたんだろうと思ったら、寝言を言ってました。最初に日本語で言って、次に英語で言って、それからパシュトゥー語の 3 カ国語で寝言を言っておりました。つまり頭の中で 24 時間、現地のことを、考えてるような人でした。

それからよく言われるので皆さんご存じと思いますけども、「先生の後継者はどうするんですか」と尋ねたら、中村さんは、「自分の後継者は用水路である」というふうに答えたっていう話は、ご存知だと思います。用水路が必要である限り、現地の人がそれを維持するという意味だと思います。

もう一つ、「先生、キャプテンがいなくなったら、船は航行不能になるじゃないですか」と私が尋ねたんですね。そしたら、中村さんが何て答えたかというと、「しばらくは、慣性で進む」って言ったんです。要するに、自分がやってきた方向に今までの推力で事業は進んでゆくということですね。

だから、今、中村先生が亡くなって 3 年になりますが、うち（ペシャワール会）の会長が、「中村先生のやろうとしていたことを全て実現する」ということを言ってるわけで、現地も含めてそうですけれども、中村さんという一つのキャプテンが描いたプラン、蓄えたエネルギーを含めた≪推力≫と、ある種の≪慣性≫でもって事業は進んでいる、というふうに思います。あとは、いかに現地が自立して自力で進んでいくかということだろうと思います。

いろいろあるんですけど、長い話ですみません。

久保　：いえ、ありがとうございます。今おっしゃった、現地の言葉で寝言を言うとこ、私、言語学者な

ので、言葉の話があるとぴんと反応するんですけど。中国の新疆ウイグル自治区って、今、時々話題になりますけども、強制労働とか、どこまで実態が正しく伝えられてるかっていうのは、僕は疑問に思ってますけど、確かに、強制労働的なものもあるだろうけれども、かなり実態とは違うんじゃないかという気もしています。

少数民族の中でも一番少数民族を、私、調べていて、そういう人たちが、社会の構造が一番よく見えてるんじゃないかというふうに思うんですね。私、シベ族っていう少数民族、調べてますけど、四つぐらい、言葉をしゃべれるんですね。中華人民共和国ですから、中国語はもちろんしゃべれますし、それから、自分の民族のシベ語もしゃべれる。でも、周りにいる、もっと自分より数の大きい、勢力のあるウイグル語もしゃべれる。それから、カザフ語もしゃべれる。四つしゃべれるっていうのがごく普通で、ちょっと、はたから見ると、すごい言語の天才じゃないかとか言う人もいるんですけど、実は、そうじゃなくて、それができないと暮らしていけない。だから全部できる。

反対に、じゃあ、漢民族はどうかというと、漢民族の悪口を言うわけじゃないですけど、漢語しかしゃべれない人が大多数なので、そういう少数民族の中になかなか入っていかないし、いけないというような事情がありますね。

だから、言葉っていうのはものすごく大事で、中村先生が、現地で使われてる言葉を大切になさったっていうのは、やっぱり、すごいなというふうに。もちろん、ものすごく苦労して習得なさったに違いないと思うんですけども、それは本当に、世界を見る窓が増えると思いますね。

≪伝わりにくい現地の現状≫

福元　：それに関連するんですけれども、ああいう国では、外部からの援助者が現地で雇ういわば現地のコーディネーターのほとんどは、英語が流ちょうな人たちです。中村さんはそういう人たちに信を置いてなかったと思います。

英語がしゃべれる知識層にコーディネートをしてもらうと、外部、特に先進国の人間たちの期待するような形でのアレンジをしたり、コーディネートをするわけですね。そうすると、その世界の表層しか見えないというか、そこの世界のいわゆる基底部っていいますか、庶民（農民）の生活に届かないというふうなことがあります。

NGO が現地で信用されなかったっていうのは、意外と知られていません。現地の大統領も言ったんですけれども、「自分たちに援助する場合には、NGO を通さないでくれ、NGO はビジネスだから」っていう言い方をしたわけですね。

日本では、NGO は全て善なるものであるというふうに思われてるわけですけれども、実はそれが現地のニーズに合ってないということがいっぱいあります。私たちは、2001 年の 9.11 の後、カブールに 5 カ所の臨時診療所を持っていたんですけれども、最初、宿舎の家賃が 250 ドルだったのが、タリバン政権が崩壊して、世界中から援助団体が入ってくる、それから、メディアが入ってくる、国連が入ってくると一挙に上がりまして、3000 ドルになったんですね、250 ドルが。マンハッタンより家賃が高いって言われたんですよ。

結局、そういう援助団体が入ってくることによって、物価が急激に上がっていく。そうすると、そこ

にいる貧しい人たちがさらに貧しくなっていく、というふうな。だから、外国人は来ないでくれ、というような感じがありました。要するに、現地の感覚とずれてしまっている、といいますか、結局、そこで仲介する、コーディネートする人たちが、どうしても知識層、富裕層である、ということがある。

今日、うち（ペシャワール会）の会長が、「現地の治安は非常にいい」というふうに言っても、なかなか、それ、信じられないと思うんですけれども、それはどういうことかというと、結局、あのとき（2021 年 8 月の政変時）に空港に殺到した人たちは、欧米や旧アフガン政府と関係のある知識層、富裕層の人が多いわけですよね。あのときに空港だけにスポットが当たってアフガン中が大混乱しているように報道されましたが、カブールのバザールは、概ね平穏であったということです。

今、一番問題なのは、アメリカが経済封鎖してるっていうことがあります。アフガン人の 1 兆円ぐらいのなけなしのお金を全部押さえておいて、その半分を 9.11 の被害者の補償に充てるみたいなことを言ってるわけですよね。

それは全く理屈に合わない話で。そもそも、9.11 のときの実行犯っていうのは 19 人いますけれども、あの中には 1 人のアフガン人もいないわけです。15 人がサウジアラビアの青年たちで、あと、アラブ系の青年ですから。そもそも、タリバンとアルカイダっていうのは基本的な性格が違いまして、アルカイダっていうのは、ウサマがリーダーであるとすれば、19 人全員が大学を出てるんですね。高学歴です。サウジがああいう形の王政ですので、あそこから排除された人たちで、言ってしまえば根無し草なんですね。それで、彼らは国境を超えたインターナショナルなテロリストになった。

タリバンというのは、どちらかっていうと、マドラサ（イスラム神学校）を出た中等教育程度の人たちで、農民の土着のメンタリティーを持った人たちなんです。だから、言ってしまえば、ナショナリスト、郷土防衛隊なわけです。だから、彼らは国境を越えない。

久保　：途中で腰を折って申し訳ないですけど、先ほど、会長さんがおっしゃった、「治安は大変良くなってます」という見方っていうのは、われわれ、普通の日本人は、「ええっ？」というふうに思うと思うんですけど、そこは、富裕層とかと密接に結び付いたマスコミの情報をわれわれが送られていることによって、誤解してる部分、正しい姿が見えてない部分があるっていうことですか。

福元　：そうですね、要するに、国際報道は欧米の視線でやってますから、われわれがそう言ってもなかなか信じられないところがあると思います。けれども、現地にも国連の関係で行った上智大学の東大作教授がレポートしていましたが、現地の友人たちに連絡をしたら、『ガニ政権が崩壊してから「治安が劇的によくなった」　』（＊注 10）と。そして、初めて警護を付けずに、アフガン国内を移動できるようになったというようなことを報告してるんですね。

それまでの、アメリカ軍とアフガン政府軍に対するタリバンの戦闘が終わったわけですので、IS が時々テロをやってますけれども、以前より治安が良くなっている、というのは事実だと思います。ただ、経済封鎖されてお金が動かないものですから、貧困が深まっている。もともと貧しい国ですから、

＊注 10：西日本新聞 2021 年 10 月 10 日朝刊に掲載された、上智大学東大作教授の共同通信への寄稿「アフガン人の生存権守れ」。西日本新聞の他にも全国の地方紙に掲載。

子どもの売り買いをしたり、幼い女の子を嫁に出すとかいうことは、タリバン以前から行われてきたことです。さらに旱魃がひどくて、飢餓状態がひどくなっている。国連機関などでも、今、アフガニスタンの人口 3500 万ぐらいだと思いますけれど、2000 万人以上が飢餓に直面してると言ってますね。特に子どもたちの餓死の可能性が高まっている。

久保　：実態がなかなか見えないっていうのは、いかがですか、文化人類学の（観点から）。

初見　：私も、お話、聞いてて、よく分かるんです。結局、スリランカも一緒なんですけど、やはり、海外からのいろんな力が入ってきて。一番極端な考えで現地の人たちを扇動しやすいのは、彼らを極限状態に置くことなので、飢餓状態がどんどん悪化すればするほど、タリバンの中でも、またいろんな意見が出てきたり、人々が受け入れるタリバンの考えの中でも、また差が出てきたり、結局、そういうふうになっていって。上の人たちが狙ってるような、ファンダメンタリスト的な極端な話になっていくんだろうなっていうふうに、お話、聞いていて思いました。

スリランカも似たような状況があって、国土防衛軍がゲリラ軍だったかっていうと、そうではなくて、むしろ、スリランカ政府、スリランカも内戦があったんですけど、スリランカ政府軍もゲリラ軍も、どちらかという貧しい、仕事のない若者たちを吸収する先であって。両方とも、貧しい若者たちが、共産主義を抱えて国っていうものに反対していく運動が広がってた中で、そういう人たちを引き込んで、それでも来ない人たちは、政府軍とゲリラ軍を使って皆殺しにするみたいな、そういう状況になったので。

スリランカの場合は、ゲリラ軍は必ずしもタリバンとは重ならないと思うんですけれども、でもやっぱり外部の力が強いですね。共産主義とか、そういう貧しい人たち、若者がどう動くかをすごく恐れる。権力者側がいろんなことをしますよね。

≪等身大の中村先生の姿を、現在の現地事業を、自分たちの思いをどう伝えるか≫

久保　：失礼ですが。若い方にも少し発言というか、お話をしていただきましょうか。
いかがですか、中西さんとか。

中西　：中村さんの人間性みたいな、面白みというか。

久保　：今、おっしゃってた？

中西　：すごくよかったなと思いました。より多くの人に知ってもらうみたいな面では、そういうところから始まり、というか、取っ掛かっていくというのも親しみやすいというか。

久保　：福元さんが言ってた、「理想化しない」ということね。

中西　：すごい共感しました。

福元　：中村さんは山歩きが好きで。福岡高校のときに、修学旅行のエピソードです。修学旅行のために、貯めてるお金があったので、彼はそのときに、修学旅行に行かずに、そのお金を先生に出してもらって、1 人で九州の山に行った。みんなは修学旅行に行くのに、本人は山登りをやっています。とにかく「体調が悪いから修学旅行に行きません」っていって、それで、山登りに行ったわけです。そのときの（高校の）先生もなかなか分かる人で、「そうか、保養に行くのか」と言ったそうです。

　中村先生は子どもの時から昆虫少年です。ペシャワールにハンセン病の診療に行くきっかけも蝶への関心からだと書いています。パキスタンとアフガニスタンの国境地帯にティリチミールっていう 7000 メートル級の山があります。その山の登山隊付のドクターとしてついていった。モンシロチョウの原種を見たかったからです。ところが、そこでは入山条件として、医師は村人の診療を拒否できないっていうのがあるんですね。病院もない医師もいない村の人たちが来るけれども、ちゃんとした薬は渡せない。仁丹とかビタミン剤でごまかしていくしかない。そこに、重症化した結核の青年を連れた老人がやってきた。その人に、「かなり重症だから、麓の病院で診てもらいなさい」と先生が言った。ところが、その老人が、「いや、その麓の病院で診てもらうだけのお金があるようだったら、先生の所には来ない」と言ったんですね。それで登山の楽しみは消えて、世の不条理を突きつけられた。それが中村さんはずっと引っかかっていて。その後で日本キリスト教海外医療協力会（JOCS）からの派遣依頼があったときに、ペシャワールにハンセン病の診療に行くというふうなことになった。最初から高い志があったわけではない、きっかけは蝶々だと書いています。

　中村さんは、クリスチャンです。中学がミッション系の西南学院なんですけれども、そのときにキリスト教に…

久保　：そのときに受洗なされたんですかね。

福元　：そうですね。多分、内面的な、「自分とは何者であるか」ということを深く考える少年だったのではないでしょうか。お父さんが、戦前、社会運動みたいなことをされた人で、中村勉っていう人ですけれども、そのお父さんの影響もあって、子どものときから論語の素読をやってたって言ってましたから。私と年一つしか違わないんですけれども、感覚としては明治のメンタリティーを持った人、日本人のちょっと古風な、伝統的な美質を持った人です。ある新聞のインタビューを受けたときに、最後に、「憲法 9 条と天皇がいて日本だ」と言ったんですね。そうしましたら、記者が「天皇」の所を削ってくれって言ってきたんですよ。そしたら、中村さんは、それを削るんだったら、全部ボツにしてくれって言いましたから。だから、伝統的で古風な面と、リベラルという両面がある。

久保　：西南学院は中学校からですよね。

福元　：そうです。

久保　：それは、地元の普通の公立中学に行かずにっていうのは。

福元　：どうだったんでしょうね。成績が良かったんでしょうけれども、最初から、クリスチャンの学校だからっていうことではなかったと思うんです。

久保　：そうなんですか。

福元　：はい。1 時間以上かけて電車で通ってた。幼いときは若松で育って。あとは、ちょっと外れのほうです、西のほうの。そこから通ってたんですけども。

担当職員：そのとき、古賀のほうにいらっしゃったんですか。

福元　：古賀です。そうです、小学校は古賀西小学校です。

久保　：今の古賀市ですね。

福元　：はい。古賀から西南学院中学ですね。

久保　：だいぶありますね。大変ですね。

福元　：そうですね、かなりの。

久保　：JR で行って。

レイク：質問してもいいですか。

久保　：どうぞ。

レイク：個人的な問題関心によるんですけど、私は環境問題にすごい環境問題に結構問題意識を持っています。インタビューシートの中で、岡本さんがちょうど引用されてるんですけど、中村哲先生も、最後は環境問題の影響というか、そういうものと闘ったというふうに思っていて。

話の中で、それこそ、学生運動が盛んな時代、そういうのに抵抗を示されていたとか、あと、中村先生自身も、学生運動とかを少し経験された後、ぱたっとやめるというか、何というか、急におとなしくなるというか、そういうこともあったと。

私にとって、今、環境問題で、具体的に行動していることもあって、そういうのを「どう伝えていけばいいのか」というか、「伝え方」っていうことに関心があります。

中村先生に会ったりすると、お考えというか、はっきりと分かりやすいメッセージを言い過ぎるの

も、過激じゃないですけど、伝わりづらいとも思って、ただ伝わるように、どうやって伝えていけばいいのかな、というふうに疑問に思っています。思いが強過ぎて、例えば、学生団体とかで大きくなり過ぎると、抵抗感を示す人もいる、というのも分かりますし。実は、この後、天神に街頭演説みたいなのに行くんですけど、そういうのをしてても、あまり通りすがりの人は話に耳を傾けてくれないとかで、すごい大きなことをし過ぎても伝わりづらいっていうのも、聞く側として感じることもあるので、どの辺でバランスを取っていったらいいんだろう、ということを、もし何かお考えがあれば伺いたいです。

福元　：非常に難しいですね。難しいっていうのは、正しい方法っていうのが、これがいいっていう方法はなかなかなくて、例えば、中村さんは、いわゆる平和構築ということをスローガンにして、アフガニスタンで事業をやってきたわけではないんですよね。

旱魃が起こったので井戸を掘り農業用水路を造る。そうすると、どういうふうなことが起こるかというと、用水路を造ることそれ自体が一つの公共事業になるわけですね。アフガンっていうのは、もともと 8 割が農民なわけですよ。それが、干ばつと戦乱によって、難民にならざるを得ない。あるいは傭兵にならざるを得ない。アメリカとか、地元の軍閥であるとか、あるいはタリバンであるとかの兵士として雇われる。

ところが、用水路を造る過程で、そこに雇用が発生するわけですね。そうすると、難民であるとか、雇われ兵になってた人たちが、まず、用水路事業で食っていける。用水路が出来上がると、農地によみがえっていく。農地によみがえることによって、その人たちが帰農して生活できる。そうすると、治安が確実に安定してくるんですよ。すると、自然に学校ができたり、モスクができたりしていって地域が安定していくということがある。

當眞　：（座談会の残り時間あと 5 分を知らせるアナウンス）

久保　：あまりご発言になってない方、きょうの皆さんのお話を聞いた感想とか、そういうのを聞かせていただいてもいいですか。どなたからでも。

野中　：いいですか。

久保　：はい。

野中　：じゃあ。今回、すごくこの会、楽しみにしてたことが、学生団体のほうの哲縁会で、自分、代表を務めさせていただいて…そちらのほうで活動させていただいているんですけど。

「中村哲先生っていう方がどういった方だったのか」とか、「そこから何を考えるか」ってなった際に、中村哲先生について考えているっていうよりかは、「すごく人道的な国際協力をされた方」っていう、象徴的な方の話をしてる感じがして、その話をするために中村哲先生を使ってるっていう、利用してるっていう感じがすごくして、どうしたらいいんだろうって、すごく悩んでた際の（この）会だったので、楽しみにしていて。中村哲先生の等身大、福元さんがおっしゃられてたみたいに、実態を伝えるってい

うことが、ちょっとテコ入れが、テコ入れっていうか、違うやり方が必要なのかなって感じて。

臼井　：ちょっといいですか。メディアの立場として、ちょっと発言しておきたいんですけども。とりわけ、やっぱりお亡くなりになった後の2年強ですか、特に亡くなられた直後、急に中村哲、中村哲っていうのが強まった感じがあるんですね。

それはそれで素晴らしいことで、いろいろ伝えられていることもあるし、メディアも散々いろいろ伝えてきたんですけども、今ご指摘のとおり、「一体どういうところがすごいのか」とか、「何を実際にやって、何に共感するのか」っていうところが、意外とふわっとしてるところがある部分も少なくないと思ったんですよ。ですから、私はメディアとして、改めて、中村さんってどういう方で、逆に、なぜこれほど人々の支持を得るとかというところを、逆説的に取っていくというようなことをして伝えなきゃいけないな、というふうに思ったんですね。

たまたま私は、ここにも書いてますけども、メディアの取材者としては、現地取材を初めて日本人としてやっているものですから、そのときに感じたことっていうのが、果たしてどうだったんだろうか。つまり、やっぱり、自分として中村哲っていうのは唯一無二で、単純、シンプルに、本当に目の前の人が困っているからただ助ける、そのためにアイデアを考えて、できることをやっていくということで、それがどんどん大きくなっていった結果が用水路だったっていうのが分かったんですね。

じゃあ、そのプロセスっていうのは、本当に変わらない中村さんだったのかっていうところを、個人としても確かめたかったっていうのがあったんです。

びっくりしましたけど、さっき冒頭で福元さんのお話の部分、実は、弊社（KBC）でも相当インタビューさせてもらって、その部分を番組でも使わせてもらってるんですけども、いろいろな方に聞くと、本当にそのとおりだなっていうか、自分が考えていたそのまま、そして、それをさらにいろいろな実態経験を踏まえて大きくなっていく、しかし、ベースは何ら変わっていないっていうところを確認できたんですね。

ですから、そこを、僕は、ささやかな一メディア人としてやったのですけども、今、お亡くなりになって、九州大学のこれ、素晴らしい取り組みであって、こういう中村さんの実態というか、それをどういうふうに伝えていくのかっていうところが、存外難しいなっていう感じがしているところも、正直あるので、そこはファクトを知っている立場として、微力ですが、お力になれるところはなりたいし、いろいろ知恵を出してもらいたいなと思うし、そういう質問はどんどんしてもらったほうがいいし。

恐らく、具体的な話をいくつも聞くことがいいんでしょうね。先ほどの福元さんのお話なんか、これだけでもあっという間に本になるぐらいのお話でしたし。

久保　：そうでしたね。

臼井　：そういうふうなことを思いましたので、最後に申し上げておきたかったんです。

野中　：ありがとうございます。

久保　：いかがですか、（山下さん）ペシャワール会の中で働いて…。

當眞　：（グループでの座談の終了を知らせるアナウンス）

福元　：やりかたに正解はないと思いますので、いっぱいいろんな形で私らもやってきました。

野元　：そうなんですか。

福元　：　まずは、自分の思ったことをやって。それで人生を踏み外すことがあるかもしれませんけれども、踏み外した果てが私みたいな人間なので、それでも生きてはいけますから。大丈夫です。

野中　：ありがとうございます。

久保　：山下さんのお話を伺う時間がなかったですね。

山下　：いえ、大丈夫です。

久保　：大丈夫ですか。何か一言だけでも。

山下　：中村先生を語るというか、九大でそういう活動をされていると思うんですけど、やっぱり、現地活動なくして中村哲先生は語れないと思うので。
先生も、以前、おっしゃってたんですけど、現地の活動は、自分一人がやったわけではなくて、現地の事業体の PMS と日本の支援、それから、中村先生、この三つのうちのどれ一つでも欠けたら成し得なかったことだから、先生がなぜ人々から支援、支持されるのかとか、なぜこの事業ができたかっていうのは、現地事業を知ってもらえたら分かるかなというか、伝わってくるものがあるかなと思います。

久保　：現地のかたがたとのあれですね。

山下　：そうですね。

久保　：タッグを組んでやっていくことの大切さっていうかですかね。どうもありがとうございます。
皆さん、本当にいろんなお話が伺えて、面白い会だったと思います。
というか、まだ終わってないですよね。

（了）

座談会参加者のインタビューシートより

※座談会参加者に回答してもらった、事前インタビューシートから、回答の一部を抜粋して掲載しています。

	福元満治（ふくもとみつじ） 図書出版石風社代表・ペシャワール会
専門・仕事	1981 年に図書出版石風社を創業。中村医師の主要著書の他、ノンフィクションから詩集・絵本などこれまで 400 冊ほどの書籍を出版。
中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？	
1987 年頃。ペシャワール会には 1987 年より加わり、会の広報活動を行うとともに中村医師のほぼ全著作のマスメディアへの発表や出版（他社を含め）に関わった。	
中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？	
物事を判断する時の指針の一つ	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
近代化とは、中世の牧歌的な迷信が、それらしい科学的な迷信に置き変えられる過程に過ぎない	
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
とにかく実践の人です。日本にも世界にも良心的な医師はたくさんいらっしゃいますが、必要とあれば、メスをシャベルや重機にかえて、井戸を掘ったり用水路を建設する医師は稀だと思います。常に現場（自然）に目を向けて、現場が必要なものを模索・思考して実現する人でした。	
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること	
あまり理想化せずに、等身大の先生が成した本当にすごい実像を伝えたい。	

	山下 隼人(やました はやと) ペシャワール会 PMS 支援室
専門･仕事	1.現地 PMS の会計業務 2.現地 PMS の農業事業連絡担当 3.日本側のイベント窓口(主に写真展･DVD 上映会)4.ペシャワール会のカレンダー製作
中村先生と出会った/興味を持ったのはいつですか？	
大学 3 年生のときに中村先生と PMS を知る	
中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？	
PMS の仕事に関わりたいと思い、ペシャワール会に就職しました	

	臼井賢一郎（うすいけんいちろう） KBC 九州朝日放送 解説委員長
専門・仕事	報道記者、ドイツ特派員、報道局長など報道系の業務が大半。報道では社会、経済、政治、災害対応などの取材や采配、ドキュメンタリー制作に注力。中村医師の足跡を描いた作品をはじめ、警察の不正捜査のルポ、日本の戦後補償問題、世界遺産沖ノ島の深層などを対象にした。このほか、放送の総合調整を図る編成部長や会社の経営計画を策定する経営企画部長を歴任。2019 年からは解説委員長という仕事。ニュースの本質について多角的に説明するのが軸。テレビ、ラジオでコメンテーターを担当。
テレビ朝日系列の特派員としてドイツ・ベルリン支局長を担当。(1998 年 1 月～2001 年 9 月）主なところで EU の東方拡大、共通通貨ユーロの導入、ユーゴ紛争で NATO 空爆、ユーゴスラビア市民革命、ドイツの新幹	

線事故などの取材。従軍慰安婦問題の取材で韓国取材多数。(1992 年～1997 年)

中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？

1992 年の春頃。先生の著書「ペシャワールにて」を読んで。1992 年のアフガニスタン、パキスタンの現地取材をきっかけに動向を見守る。

中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？

本質的に生きるとはどういう生き方か？本質を見る目とは？一貫した生き方とは？上滑りのない生き方とは？そうした問いを思い出してはしているということが影響だと考えている。

中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？

「理屈抜きの善意で支えられている自分を幸せ者だと思った。祈りは見える力として現実化してのみ活路がある。本来の素朴な正義感や思いを理屈の中で変質させてはいけない。それぞれのペシャワールに向けて『良心の実弾』をぶちこめ。そうした支え合いの中に身を失うことによって得る恵みのいかに大きいかを知らねばならぬ」

中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること

中村医師の絶対的な存在感をリスペクトする。英雄視はしない。

（報道関係の方へ）国際情勢が変動する中、中村哲先生の活動や価値観には変化はあったのでしょうか？＊

変化はない。若いころの訪問診療で、時間に制限があり治療を施せなかった住民から投げかけられた恨めしそうな眼差しが持つ意味。困った人がいたら手を差し伸べるという中村医師の骨格の部分に揺らぎはなかった。それがすべてに通底している。

	中西幸大（なかにし　こうだい）　　福岡高校 1 年 ペシャワール班
専門・仕事	法学部に進んで、法律について学びたいと思っています。

中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？

出会ったのは中学生の頃(4 年くらい前)で、興味を持ったのは高校に入ってから(昨年)です。
高校で中村哲先生について活動しています。

中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？

この地域、この時代で

	野中　諒（のなか　あき）九州大学文学部 2 年　中村哲先生の想いを繋ぐ会/哲縁会

中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？

2019/12/05。ニュースにて。2020 年の夏から、中村哲先生の想いを繋ぐ活動に携わっています。

中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？

国や所属が違うからといって他人ごとにしてはいけない、という考え

中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？

（憲法 9 条に対する発言）「よく理想だけではやっていけない、ちゃんと現実を見なければ、と言いますが、それこそが“平和ボケ”の最たるものです。それは、マンガと空想の世界でしか人の生死の実感を持てない、想像力や理想を欠いた人の言うことです。現実を言うなら、武器を持ってしまったら、必ず、人を傷つけ殺

すことになるのです。」このアンケートに答えている今が 2 月 24 日、ウクライナのことを思うとどうするのか正解なのか、ということに一つ道筋を見出してくださっているように思います。

中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい

中村哲先生の著作以外で、先生が活動されていた時期のアフガニスタンのもつ背景や都合をよく知らないので、研究していただきたいなと思います。

中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること

中村哲先生エピソードの持つ、人としてのすばらしさという面がどうしても大きくなるので、話す際には現在の状況との結びつきが必要だと思っています。

（高校生・大学生へ）中村哲先生について、どんなことを知りたい、学びたいですか？＊

中村哲先生から見る戦後思想史

	初見かおり（はつみかおり）　九州大学サイエンスコミュニケーター 研究者
専門・仕事	文化人類学。スリランカと南インド。サイエンスコミュニケーション

中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？

大学生のとき。九州大学の中村哲プロジェクトの仕事をたまにサポートさせて頂いています。

中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？

自分が今後「書く仕事」を通して貢献していかなければならない領域を照らしてくれている

中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？

「その昔栄光をほこったガンダーラ文明の廃墟に立って、このアフガニスタンでおきた悪夢のような血の狂宴を思うとき、ひとつの感慨に支配される。我々の文明もまた、自壊作用がはじまっていることを感ぜずにはおられない。目をこらせば、人間は自ら作り上げた虚構の崩壊におびえ、虚構に虚構を重ね、事実と自然とを粉飾する。その虚構のはげおちた無残な姿がこの廃墟に厳として存在する」
（『アフガニスタンの診療所から』）

中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい

日本人愛

中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること

自分が伝えたいことなのか、哲先生が伝えたいことなのか、その二つの境界の見分け方が時にわからなくなってしまうこと。

その他	中村哲を知るということはどういうことか、まずこの点について若い方たちと討論したい。「中村哲先生について、みなさんはどんなことを知りたい、学びたいと思っていますか？」という質問から始めることで、彼らのニーズが明らかになり、それを踏まえた上で対話を進めていけば、自然と善悪についての中村先生のお考えも議論に上がってくると考えます。

	久保智之（くぼ　ともゆき）　九州大学教授（言語学）　九州大学図書館長
大好きなもの・楽しみは？	山登り
仕事（活動）をしてきた土地は？	中国新疆ウイグル自治区でことばを学んだ

座談会「中村哲先生のスピリットを継承する」記録

座談グループ ： ガンベリ

進行役 ： 堀　優子 九州大学附属図書館 e リソース課長

参加者 ： 籾井孝文 ペシャワール会・PMS 支援室

小林　晃 医師・元現地ワーカー

谷津賢二 日本電波ニュース社 カメラマン

藤井登睦 福岡高校 2 年 ペシャワール班

轟木亮太 大分大学医学部 2 年・九州大学薬学部卒業生・中村哲先生の想いを繋ぐ会/哲縁会

吉松拓也 九州大学芸術工学部 2 年・哲縁会

オブザーバー：宮﨑信義 久山療育園理事長・医師（重症心身障害医療）・中村医師の友人

座談会コーディネーター ： 當眞千賀子 九州大学人間環境学研究院教授（発達心理学）

記録 ： 九州大学附属図書館

※ この記録に登場する参加者の所属等は、座談会が開催された 2022 年 3 月当時のものです。

堀　　：このグループの世話役を務めます、堀です。皆様よろしくお願いします。
　早速、皆さんの自己紹介をしていきたいと思います。若い人から順にしていきますかね、いきなり高校生は少し話しにくいかなと思うので、大学生のお二方からお願いします。

《自己紹介》

吉松　：では、自分から話していきます。九州大学芸術工学部の吉松拓也です。
　哲先生と出会ったのは、高校 1、2 年生の頃に母の影響で哲先生のドキュメンタリー映像を見たことがきっかけです。映像の中で、乾燥した大地が緑豊な土地に変わっていくことが本当に衝撃的で、もっとこの方について知りたいと興味を持ちました。
　その後、大学に入学しまして、去年、大学の授業の中村哲記念講座に受講生として参加しました。そのつながりで、今は哲縁会という学生組織に所属しています。
本日はよろしくお願いします。

轟木　：大分大学医学部 2 年の轟木亮太です。私は元々九大の薬学部を卒業したという経緯もあり、去年の谷津さんや村上会長、藤田さんにも登壇していただいた「中村哲先生の想いを繋ぐ会」に企画などに関わらせていただきました。その後、記念講座の TA などもさせていただきました。自分はネパールの農村に累計 3 か月滞在して、現地の人と共に被災した水道設備やコミュニティハウスを再建するプロジェクトをしました。その際に、中村哲先生の著書から考え方や現地の人々と関わる姿勢などを学ばせていただきました。
　あとは、活動していた団体の先輩が、ペシャワール会の支援室で働かれていて、講演会があったり、蛇籠を作るワークショップとかがあったりとか、そういうときには呼んでいただいて、お手伝いさせていただいていました。という感じです。よろしくお願いします。

藤井　：福岡高校のペシャワール班に所属しています藤井と申します。
　中村先生を知ったきっかけは、新聞でお亡くなりになられたというニュースを聞いて、中村先生のことに初めて興味を持ったのですが、この班に所属してから、知識を深めて、中村先生の活動や現地のことを知って、いろいろ興味を持ったので、本日は学ぶことのほうが多いですが、よろしくお願いします。

小林　：私は 1997 年から 4 年間、現地で医師としてペシャワール会の活動に参加しました。学生時代にアジアの国々を放浪して、藤井さんもそうかな、いろいろ、海外医療やってみたいとか、そういうところに興味がありまして。国境なき医師団とかがテレビで活動しているのを見て、かっこいいことやってるなとか、そういう気持ちで、アジアの国々と関わっていきたいと思って。
　中村先生は、当時は全然というか、今ほど有名ではなかったんですが、パキスタンのペシャワールという所に、そういう日本人がおるよっていう噂を耳にしましたので、そのまま大学の卒業旅行で、ペシャワールに行って。ちょうどそのときは、ソ連軍がアフガニスタンから撤退する頃で、世界中か

らジャーナリストがばーっと集まっている頃やったんですけど、そのときに中村先生に初めてお会いして、こんな人もおるんやなっていうことで、参加したいと思って、4年間、活動させていただきました。志半ばで途中で帰ったんですけれども。

籾井　：おはようございます。ペシャワール会、PMS支援室の籾井と申します。

PMS支援室というのは、現地要員として、職員として雇っていただいて、治安が改善すれば現地で働くところになります。私はそこで5年間ぐらい働いていまして。きっかけは、前、現地で働いていたワーカーの人と縁があって、その人からお話を聞いて、自分も挑戦してみたいなというふうに思って参加しました。きょうは、よろしくお願いします。

谷津　：日本電波ニュースの谷津といいます。皆さん、初めまして。小林先生、籾井さんと、堀さんともよく存じ上げておりますが、どうぞよろしくお願いします。

テレビのドキュメンタリーとか、記録映画を作る会社にいまして。たまたま私は、幸運なことに中村先生に許されて、21年間ぐらい中村先生の取材をさせていただいていました。その間に、中村先生を撮った映像が1000時間ぐらいあるんですね。基本的に、今まで20本ぐらいドキュメンタリーを作っていますので、吉松さんが見ていただいたのは、多分私が作ったものかなと思っているのですが。

本来、記録する人間というのは黒子なので、皆さんの前でお話しするタイプではないのですが、中村先生のことをきちんと伝えていくためには、私が見て記録したことを伝えていくことが必要かなと思って、こういう活動にも参加させていただいています。

最初に取材したのが1998年で、そのとき小林先生がドクターとしていらしたので、小林先生と中村先生のやりとりとかも、いろいろ実は映像が残っているんですが、なかなかそういう出せていないものを、今後どんどん世の中に出さなきゃいけないなとは思っています。

どうぞよろしくお願いいたします。

堀　　：私も一言。図書館で働いております、堀です。

中村先生が、前から福岡にいるっていうのもあって、中村先生のこと、テレビとか新聞とかでずっと見てきてはいたんですが、中村先生の亡くなられたニュースを、亡くなられた後、何か、私ができるとしたら何があるんだろうと考えたときに、アーカイブだなと思ったんですね。

中村先生の言葉とか、そういうものをきっちり残していけるのは、多分、母校である私たち、長く続く組織である私たちだろうと思って。できたらいいなと思っていたところ、当時の久保総長が、中村先生を記念する何かを作ろうという話になって、よし！と思って「こういうこと考えてるんですけど」って。村上会長以下、皆さんに、「それは是非！」と言っていただいたので、それをきっかけに「（中村哲）著述アーカイブ」を立ち上げさせていただきました。

そうすると、最初は、表に出てきているものを集めて…と思っていたんですが、話を聞いていくと、ものすごい記録魔で。お話ししたこととか、スケッチにしろ、何にしろ、ものすごくたくさんのモノがあるんですよね。それにかなり圧倒されながら、これをどういうふうにずっと続けていけたらいいかなというのは、日々考えているところです。よろしくお願いします。

一同　：よろしくお願いします。

堀　　：じゃあ、若い方々から。長く中村先生を見てこられた方に「ぜひこれ聞いてみたいな」というようなことってありますか。

《中村先生を知り、想いを繋ぐ―若い世代は何ができる？》

轟木　：じゃ、自分が。今、（中村哲）記念講座があって、そこで受講していた学生とかが、学生団体として、中村先生のことを知って想いを繋ぐ活動をしていこうって話になってるんですけど、本を読むとか、中村先生のことを知るっていうだけだと、どういう活動をしたらいいのかなって。読むだけではなく、やっぱり実践していくというか、何かをしていかないと、参考になるメッセージが生きてこないのかなと思っていまして。

かと言って、じゃあ今、アフガニスタンに行ける状況でもないしっていうところで。学生が何か具体的にイメージを持ったり、行動したりというのは、どういうふうにしていくのがいいのかな、もし、こういうことしたらいいんじゃないかっていうのがあれば、ぜひ伺いたいんですけど、どうですか？

堀　　：学生さんたちは、同じ世代に知ってほしいなっていうのが一番、ありますね。

轟木　：そうですね。二つあるかなと思うんです。

もちろん、同じ世代だったり、その後の世代にも伝えていくっていうのも、一つ、活動としてはできると思うんですけど。やっぱり、伝えるってなると、著書を読んだ方が、僕はダイレクトに言葉が伝わってくると思うので、一番いいと思う。じゃ、僕らが代読して伝えるっていうのも、またなんか違うのかなと思っていて。そうなると、何をしたらいいのかなっていうところもあります。

小林　：一つ意見ですけど。中村先生の本って、僕はあんまり国語できるほうでなかったから、（先生の本を）読んでも難しいんですよ。20 歳ぐらいだったらね。

恥ずかしい話やけど、僕は中村先生亡くなってから真剣に読んだの、声に出してね。そしたら、この年になったら分かることがいっぱいあって。はっきりと言って、うちの息子、娘も、ペシャワールに行ってるんです。行ってるけど、読まないんです。ぱっぱっていう感じで。先生の話が、あちこち飛ぶからね。で、ものすごく哲学的なこと書いてるから。若い子はどこまで分かってるんかなって。それは、文学部とか、中村先生みたいに、昔からそういうのに接してる人なんかには分かる、みたいなね。どうなんでしょうかね、あの本読んで。

『ダラエ・ヌールへの道』（＊注 11）なんか、なかなかものすごく難しいと思うんですが。

＊注 11 ：『ダラエ・ヌールへの道 ： アフガン難民とともに』（1993.11,石風社）
http://hdl.handle.net/2324/4772346（中村哲著述アーカイブ）

轟木　：確かにそうですね。いろんな本を読んでいくと、バックグラウンドとかが理解できて、解釈できるようになっていくのかなとは思います。

小林　：だから、そういう意味では、研究会なんかを見聞きして、みんなで語り合うとか。

轟木　：本を1冊、みんなで一緒に読んでいくみたいな。

小林　：そう。で、ここ分からんかったとか、そういうような勉強会やってもええんちゃうかなと、私は思ったりはしますけどね。

轟木　：はい、ありがとうございます。

谷津　：すみません、僕もついでに話しますが。まず、すごく大真面目にいうと、中村先生の本質って、こないだまた新しい「医師 中村哲の仕事・働くということ」っていう映像記録を作ったんですね。確か2011年7月、ペシャワール会報108号に書かれているのは、要は「人は人のために働いて支え合い、人のために死ぬ」っておっしゃっているんですね。（＊注12）これは、大げさにいうと利他、オルトリズムっていって、エゴイズムの反対ですよね。他者のために生きるっていう考え方を、中村先生は実践されたんだと思うんですね。

このコロナ禍になると、多分、その考えなしには、われわれ、生き残れないだろうなっていうふうに、強く私自身が思っていて、自分ファーストとか、自民族ファーストとかでは生き残れない。だからこそ、他者のために働く、他者とどういう関係を結んでいくかっていうことが、ものすごく必要だとおっしゃっていたと思うんです。ただ、先生はああいう方なので、「大げさなことは考えなくてよか」みたいなことをおっしゃっていて、それは小林先生が書いてる。まさに、一隅を照らして、置かれている場所で、何ができるかっていうことを考える。

ある講演会に、私がたまたま先生のかばん持ちで付いて行ったときに、大学生の方が「先生、何か、いい言葉をください」って言ったら、中村先生が「犬も歩けば棒に当たる」って言ったんですよ。みんな、どぎも抜かれて、どういうことなんだろう、みたいになったんですが、先生が「私、ふざけて言ってるわけではありません。若いときは、自分がこうならなきゃいけないとか、こういうふうに生きなきゃいけないなんて、考える必要はないんじゃないか」とおっしゃったんですね。「いろんなことをしてるうちに、だんだんいろんなものが見えてきます」と。

中村先生がおっしゃっていたのは「自分も医者になったときに、40年後50年後にパワーショベル

＊注12：ペシャワール会報108（2011.7）　http://hdl.handle.net/2324/4362965（中村哲著述アーカイブ）

「吾々の良心的協力が、立場を超え、国境を超えて躍動しているのは、自然の理に適っているからだ。己が何のために生きているかと問うことは徒労である。人は人のために働いて支え合い、人のために死ぬ。そこに生じる喜怒哀楽に翻弄されながらも、結局はそれ以上でもそれ以下でもない。だが自然の理に根差しているなら、人は空理を離れ、無限の豊かな世界を見出すことができる。そこで裏切られることはない。」

に乗ってると思ってもいなかった」と。だからそういう意味では、自分のできることをするっていうのが、先生のことを「先生ってこういう方だったんです」なんて、無理に伝えるっていうことは、僕は何となく必要がないような、気がしていて。自分が置かれた場所で、自分のできることをするっていうことが、多分、先生が目指していた、先生が望んでいたことなのかなと、思いましたね。

轟木　：ありがとうございます。

堀　　：今、PMS 支援室にいらして、伝える、伝えないとかではなく、きっともう、まさに実践というか、どうやってつなげていくか、その活動を続けていくかっていうところで、日々ご苦労なさっていると思いますが、そういう立場から見ると、どうですか。実践を続けていくことで何か伝わっていくだろう、とか、そんなことを考える余裕とかってあるんですか。

籾井　：さっき轟木さんから、「実際、何ができるか」っていう話をいただいたんですが、この前、九大のかたも、中山さんの講演会をやったり、今日もペシャワール班が Zoom で会を開いてくださるじゃないですか。そういうことを定期的にしていってもらって、おふたりが辞められた後も、その次の人が続けてくれるようにしてもらうのが、一番かなと思いました。もちろん、不安なところ、いっぱいあると思いますが。私たち支援室も藤田さんとか村上先生も、できる限りで力になりますので、そういう場をつくっていただくことが一番かなと。

　逆に、自分も、九大のかたとか、ペシャワール班の人とか、学校と両立しながら、こういうふうに活動してくれてすごいな、と頭が上がらない思いです。

堀　　：講演会やイベントをしていても、中村先生のスケールが大き過ぎて、ほんの少ししか、伝えられないんだろうけれども、そこをもらうことで、その人が主体的にいろんなものを見て、考えるというのが始まっていけば、それだけでもいいのかなという気がしていますね。それのために、アーカイブがどーんと、いつでも見れるような形に、できるだけ多くのものが提供できたらと思っています。

轟木　：ありがとうございます。

谷津　：今、私も含めて、大人がきちんとして、世の中を残してない。中村先生が、現地でおっしゃっていたのは、「若い酒は若い皮袋に入れよう」（＊注 13）ということわざがヨーロッパにあって、要は、若い人たちは若い酒だと。自分たちの世代は、若い皮袋を用意してあげられなかった責任はあるっておっしゃってたんですね。

＊注 13：『新約聖書』マタイによる福音書の一節「新しき葡萄酒を古き革袋に入るることは為じ。もし然せば袋張り裂け、酒ほとばしり出てて袋もまた廃らん。新しき葡萄酒は新しき革袋に入れ、かくて両つながら保つなり」に由来する故事成語。新しい思想や内容を表現するには、古い形に囚われない新しい形式が必要という意で使われる。

だから、そのことは、われわれ大人が自覚しなきゃいけないなと思っていて。そういう意味では、今の自民党の政治家とか見てると、希望とか信頼とか、そういう言葉をおとしめて、足で踏みにじっているような大人が多いじゃないですか。その中で中村先生っていう信頼できる大人がいたんだっていうことを、皆さんが気付いてくださっていることが、素晴らしいなと思うんですよね。

中村先生が残したことが、希望とか信頼とかっていうことに、新しい命を吹き込んでるとしか、やっぱ、思えなくて。それを皆さん、関心を持ってくださっていることが、第一歩になっているんだろうなという気はします。

堀　　：いろんな世代の人たちが、こうやって一緒に話せる場っていうのは、すごく重要ですよね。ただ、今 20 歳前後の方が思っていること、それから 30 代ぐらいで行かれたんですか、ペシャワール？

小林　：31 か 2 ぐらいですね。

堀　　：谷津さんは、1998 年って言われてましたが・・。

谷津　：私は、先生に最初に取材したのは、多分、32、33 ですよね。

堀　　：どの世代で、そうやって関わりを持つかで、やっぱり、考え方とかも違ってくると思うんですよ。

谷津　：そうですよね。小林先生みたいに、今まさに人の命と向き合っているかたもいらっしゃれば、私なんか完全に黒子なので、先生のことをどう伝えるかっていうこととでは違うんですが。ただ、ベースにあるのは、先生が何を持っててっていうことと、自分がしてる行動を照らし合わせる土台になっている気はするんですね。

私や小林先生がすごく幸運だったのは、生身の中村先生と触れ合うことができたっていう。もう、それは今言っても詮無いことで、先生は戻ってこないので。

ただ、そのためにどうするかというと、やっぱり、堀さんたちがやってらっしゃるような、「中村先生が残したもの」っていうのがきちんとあって、そこから若い人も、どんどん自由に、いろんな先生の考え方を知って、それを自分の、今生きていることと照らし合わせるっていう作業が、もっと簡単にっていうと語弊があるんですが、できるような場が、この会もその一つなんだと思うんですけども、きっとこういう会が広まっていくっていうことも、さっきおっしゃった、どうしたらいいんでしょうかねってことにつながっていくと思うんですよね。

堀　　：ありがとうございます。私、吉松君が、中村先生はデザイナーであると感じることが多々ありますって（インタビューシートに）書いてくださってるじゃないですか。その辺の話をちょっと聞きたいなと思って。

《デザイナー、中村哲先生の仕事》

吉松　：私も、学部自体がデザインの学部で、プロダクトだったり、こういう空間だったり、デザインすることを学んでるんですけど、その中で、デザインって理論的に考える場と、直感的じゃないですけど、自分がやりたいことをやる場の二つあると思うんです。

哲先生の場合は、本当、現地になじむっていう言い方なんですかね、自分が好きな考え方に、透明になって、他人の靴を履いたりして、現地で活動するっていう考え方があるんですけど、まさにそれを体現されてるような方だなと思ったりするなと。実際に理想なんかで終わらないで、実現するっていうことも含めて、そこがデザイン的な人なのかなと、勝手に思ったりはしてました。

堀　　：どうですか。一緒に働いておられて。

小林　：吉松さんが偉人として扱うのではなくと書いていますけれども、今から考えたら、中村先生は偉人やったと、それは当たり前の話なんです。僕はレオナルド・ダ・ヴィンチみたいな人やなと思ってですね。何でも、医療にしても一流にして。

谷津　：ダ・ヴィンチ的な天才ですよね。

小林　：困ってる人がおれば、サンダルを分解して、それはどんなもんなのかっていうのを考えて、ハンセン病の患者さんのために靴も作ったし。ハンセン病の再建手術も、自分が知らなければ韓国に行って、それを学んだりして。それも一流の、最近でもやってるとこでですね。僕が直接関わったのは、PMS 病院を造るときですね。ちょうど 2000 年辺りね。あれも、中村先生が設計してるんですね。知らなかったので、驚きましたけど。設計図まで書いてしまって。

谷津　：バリアフリーにされてましたもんね、当時ね。

小林　：それも一生懸命考えて、換気はどうするかとか、女子トイレはどこにやるかとか、そのこと一生懸命考えて、そういうことまでやられとったっていうのは、今から考えれば、すごい人やなと思っていて。それも恥ずかしながら、中村先生が亡くなってから、こんだけ偉人やったっちゅうのを、改めて思った。

谷津　：中村先生がおっしゃっていて、僕がよく覚えてるのは、緑になったとこを一緒に見ていたときに、「こんないい仕事はないです」っておっしゃったんですね。水路が延びれば延びるほど、人が喜んでくれて、みんなが笑顔になる、と。働くことの本質ってのは、やっぱり、誰かのために働くことだと、先生はおっしゃっていて。

先生が具体的に言ったのは、魚屋さんだったら、おいしい魚をお客さんに買ってもらって、ああ、おいしいって喜んでもらう。それ、誰かのためでしょう。床屋さんだったら、お客さんの髪をきれい

に切ってあげて、ああ、さっぱりしたって言ったら、それはお客さんのためだと。だから、仕事ってのは、自分のためにするんじゃないと思うっておっしゃっていて。必ず誰かのためにすることが仕事だって、先生はたぶん強く思っていらして。

吉松さんが言うデザインってことも、きっと、いいデザインをして、誰かがそれで何かが役に立つとか、新しいデザインの車いすがあって、それが非常に機能が優れているとかって、必ず誰かのためになることを、きっと吉松さんもこれからするんだと思うんですね。だから、長く先生を取材していて、強く、それは、働くことの意味っていうのは、目の前で拝見すると、すごく考えさせられて。それはさっき一番最初に言った利他っていう、他者のために生きるっていうか、それは働くっていうことにも通じていて、これから学生の皆さん、社会に出たときに、自分のために働くってことじゃなくて、他者のためにどう関われるのかってことが、きっと中村先生が望んだことのような気はします。

吉松　：同感です。

《中村先生の言葉の鉱脈、線引きをすることで見えなくなるもの》

堀　　：福高の藤井さん。中村先生の他に尊敬している方、仁徳天皇って書いておられるんですけど。歴史が好きとか？どういうところに進みたい？

藤井　：歴史が好きってわけじゃないんですけど、仁徳天皇って人は、自分の都の人たちが、飢饉とかで困っているときに、2 年ほど徴税を停止して、どこまでが本当か分からないんですけど、都をよくするまで待っていた。自分の身を削ってみたいなことをしてたんですけど、尊敬してる人、そうですね。中村哲先生って、現地の人たちの話、自分の人生、現地にいて、相手のこと考えて、活動されている方なんで、通じるところはあったのかなと思うんですけど。どちらも尊敬する人でありますね。

堀　　：「100 の診療所より 1 本の用水路」と、福高の皆さんが（印象に残った言葉として）同じ言葉を書いておられるんですけど、これ、皆で勉強する中で、ここいいよね、みたいな感じだったんですか。

藤井　：まだ知識が浅いので、あんまり言えることは少ないんですけど、先生の活動ってやっぱり、現地の人、相手の立場になって考えるってことが、すごく大事なことなんだなって、彼の言葉とか活動を通して思いました。

堀　　：このモスクとか、マドラサですかね。こういうのは、びっくりしてしまうんですけど。
こういうところは、リアルタイムで谷津さんご覧になっていたんですよね。

谷津　：中村先生がモスク造ってるときに、ずっとそばで撮影していたんですけども、そのときに中村先生にインタビューして「皆さん、喜ばれたでしょうね」みたいなことを聞いたら、「これで自由に

なった」っておっしゃったというんですね。そのときは、「自由になった」っていう意味が、なかなか分からないじゃないですか。「これで自由になった」って、意味が分からなかったんで、中村先生にその後よくよく聞くと、イスラム教徒とあるだけで、蛇蝎のごとく嫌われるとか、世界中がイスラムフォビアっていうんですが、イスラムに嫌悪を示すっていうのが、広まってしまったんですね、ヨーロッパとかで。

そういう中で、イスラム教徒であることが、あたかも悪いことであるかのような、ある種のプレッシャーっていうのをみんな感じている中で、中村先生はそういうとこまできちんと見抜いて、モスクってのを建ててるんだと思って。要は、クリスチャンである中村先生が、モスクを造ってくださったっていうことに対する、彼らの感謝の言葉が「自由になった」って、そこはすごく深いんだと思うんですね。だから、中村先生の一つ一つの行動というのは、その場で拝見しても、小林先生と一緒で、後から考えて分かることが多いんですが、非常に重層的にものを考えていらした方なので、彼らが困ってるから建てましたではないんだと思うんですね。

ここに「100の診療所より1本の用水路」って藤井さんがおっしゃっていることも、きっと先生がどういうことを考えて、どういう思考の後にこういう発言をしたのかなっていうことを考えるっていうのが、きっと、そういうことをされたほうがいいかもしれないなみたいなことを思うことはありますね。小林先生もそうですけど、私も籾井さんも、その先生がその場でぱっと言ったことって、やっぱり、難しいことが多いので、どういうことなんだろうなと思うんだけど、後で分かると、なるほどと腑に落ちることが多くて。それは先生が残してくださった本とか会報とかって、村上先生、金の鉱脈だとおっしゃったんですよ。

小林　：それ、誰がですか。金の鉱脈って言ったのは、誰が？

谷津　：金の鉱脈って、村上先生がおっしゃったんですね。

小林　：村上先生が。

谷津　：掘れば掘るほど、いろんな。

小林　：ほんまにそうですね。

谷津　：そうなんですよ。中村先生の文章ってのは、本当にそういうものが多くて、金の鉱脈だなって、つくづく。村上先生が言ったのは至言だなと思うんですが。自分が、今、向き合ってることが、どんなことなのかなと思って、先生の本とか会報を読むと、ある種の答えのようなものが、必ず見つかるんですね。

ただ、それで答え見つけて満足だってせずに、きっと若い世代のかたは、じゃあ自分がそれをするときにどう思うか、この先生の言葉から何を学ぶかっていうことがきっと。僕はもう、60歳なので、きっと皆さんのお父さんと同じぐらいなので、じじいのつもりで言ってますが、きっとそういうこと

が先生は望んでたんだろうなっていう。だから小林先生がずっと本、読んでらっしゃるっていうのは、私もつくづく分かって。

小林　：私の場合は、4年間現地におったときは、ほんまに目の前にあることをこなすのに精いっぱいで、言葉の問題とかね。子どもも連れてきたら、子どもの問題とか。それで4年間あっという間に過ぎてしまって。で、9.11のあれがあって。やっと現地で役に立てるかなと思ったときに、もういろいろ問題があって、志半ばで終わってしまったんですけれどもね。

當眞　：（座談の時間延長のアナウンス）Enjoy yourself、どうぞ楽しんでください。

小林　：そういうことで、志半ばで帰ってしまって。現地の人とペシャワール会の皆さんも一生懸命、家族4人を送るためには、大変なんですね。そういうの、やっていただいたのに。別に期待されてたかどうかは、分からんけども、途中で辞めてしまったことに対して、非常にうつ状態っていうか、そういうのがあって。ちょっと自分を精神的に律せなあかんな、と思って、座禅したりとか、お遍路に行ったりとか、いろいろしとったんです。で、いろんな哲学書をいっぱい読んだりするんだけども、全然頭に入ってこない。それで、ずっとそれなりに一生懸命人生を歩んでて。

で、中村先生が亡くなって、中村先生の本を読んだら、ここに全部答えがあるやないか、と。答えではないけれど、谷津さんが書かれてますけれども、中村先生は、実践に基づいた哲学なんですね。僕もそう思っとったんです。中村先生は、現地を見なさいってことは、いつも言われとったですね。それに基づいて、金の鉱脈やないけど、素晴らしい言葉がいっぱい隠されてるんですね。

そういうのがあって、ラッセルの哲学書で何が分かるんやって。分かる人には分かるかも分からへんけども。中村先生の言葉は、難しい言葉でも、実践に基づいてやってきた言葉やからね。谷津さんが言われてる「人と自然との和解」とかね、そういう素晴らしい言葉がいっぱいある。だから、そういうの研究したいって人がいっぱい出てくると思います。そういう意味で、学生さんたちも一生懸命、みんな読んでいただければと思います。

堀　　：（オブザーバーの）宮﨑先生がこちらにいらっしゃってるので、ちょうどこういう若い頃から、中村先生と一緒に。変わってないんですか、その・・・。

宮﨑　：そうですね、私が昭和41年、1966年、同期入学なんですけど、彼の素顔は常々のんびりしているんですよ。福高のときも、1年のんびり（浪人）してから入ってるんで、年は、彼のほうが一つ上なんですけどね。よく言っていたのは「今の日本は何かせせこましい」ということです。YMCA活動や学生運動をはじめた後や、ペシャワールに派遣ワーカーとして活動し帰って来て会ったときも、「日本は息苦しい」と、高度経済成長のときですが、言ってました。

谷津さんがおっしゃった「自由になった」っていうのは、私なりに解釈すると、彼は嫌ってたのは、「金科玉条」とか「ドグマ」、「教条主義」をよほど嫌ってたのだと思います。嫌ってたというか、信用してなかった。だから、恐らく自分のやってることが英雄視されることも、とても嫌ってた

から、最初から医療支援が成果を上げても、端緒は切っても現地の人に引き継げる素地を考え実践していました。

早い段階で始めてますもんね、ペシャワール・ミッション病院でも、それから医学の講義や、現地ワーカーの育成をしてますしね。ハンセン氏病のかたは、診療が進んでいくと軽くなる。そうすると、その人たちが自立できる生き方で、靴工場造って、日本からいろいろ、同じ靴を送ったり、材料送ったりしたんですけど。日本からすればわずかでも、労賃で自立できる。彼は洞察力が鋭いなんて言ったら嫌がるだろうけど、びっくりするような先見性と深みがあるんですよね。彼だから、腑に落ちる、とういうことは、たくさんありましたね。

そして、後でお話しするけど、学生時代はあんまり目立たない、目立ちたがらないというかね。私なんかはよく、盛んなときで 8 カ月間、無期限ストライキした時代でしたからね。とにかくそのときに活動家が言うシュプレヒコールっていうのを嫌がってたんですよね。むしろ、黙々と淡々と、やるわけですね。そのことが、活動を始め、35 年で凶弾に倒れるまで、淡々と、続けていったことが、よく分かると思いますね。取材なんかされても、そう思われたんじゃないですかね。

谷津　：宮﨑先生のおっしゃるとおりですね。自分のことを自慢話もしなければ、ひけらかすということも一切しない先生だったので。とにかく行動を見て、中村先生の息子さんが、いみじくも言ったように「俺は行動しか信じない」と先生はおっしゃったようで、あれこれ口で言う方ではなかったと思うんです。それは小林先生が身近で一番、よく分かってらっしゃると思うんですが。いい意味で中村先生の背中を見て、周りの人間が理解していくっていう。だからこそ、言葉も、民族も、宗教も違う人たちが、あれほど中村先生に付き従うっていうのは、べらべら言葉で「こうですよ君」ということじゃなく、行動をみんなが見るからこそ、先生についていったんだなっていう感じは、取材させてもらって思っていました。

人の中の信義っていうのが、多分、関係ないんだと思いますね。宗教も、民族も、国籍も。だから、人として、何が大切なのかっていうことは、アフガンの人たちは鋭く見抜いていて、だからこそ中村哲のためなら命も捨てるっていうような、強い組織なんだと思うんですね。それがいいのか悪いのか別にして。とにかく、強い組織だなと思います、PMS っていうのは。

宮﨑　：さっき、9.11 の話をおっしゃったでしょ。あの後に急に、ブッシュなんかが、アフガニスタンにテロリストをかくまってるっていうのを、ずっと言ったときに、彼は、タリバンというのはいろんな人がおるよと。原理主義者だけじゃない、と。むしろ寺子屋みたいな学校で、現地の人を支えてる。だから施設造ったときも、イスラム教の寺院、モスクを建てたりして、全然信じられないかもしれないけど、それが彼にとっては当たり前ですよね。

當眞　：ペシャワール会のタリバンの語り方っていうのは、世界的に見ても独特で。タリバンが、それこそ教条主義的に悪とか善とかっていうのではなくて、タリバンとひとくくりにして語るのが問題で。中もいろいろあって、実は、もっと中村先生の命を、ペシャワール会の行動を妨害する勢力から体を張って守ってくれたのも、タリバンの戦士たちだったっていうようなことなんかも、九大での講

演会のときにも、お話をしてくださって。

それこそアメリカのブッシュ大統領が≪War for justice≫みたいな、justice 対 evil みたいな、悪と善みたいにカパッと分けて語る語り方をするなかで、そうではない、よく見て判断しないといけない領域っていうのを提示してくださった。

今回、アフガンの混乱が起きて、当初の頃、全世界がタリバン批判みたいなことにばーっと走ったときに、中村先生やペシャワール会とゆかりのあった方や、メディアの方がたが、ちょっとブレーキをかけるような、タリバンを悪か善かっていう枠で決めつけることで、今後が良くなっていくわけではないという。その中にある良質な部分っていうのに対する着目も発言されてたっていうのは、すごく記憶に残ってるところなんですけどね。

谷津　：2001 年に、一度だけタリバン支配下のアフガンで取材をしたことがあるんです、先生の手引きで。入ってみて、圧倒的に腑に落ちたのは、やっぱり、治安が良かったんですね。だから、百姓は農業ができて、商人は商売ができるっていうのを、タリバンが実現していたんですね。「宗教的に厳しい人たちだけども」って先生は言ってたけど。あのときにアフガンの人たちが何を望んでいたかっていったら、40 年も戦争してるので、誰でもいいから、とにかく治安を良くしてほしいっていうことに、タリバンがきちんと応えてたんですね。中村先生も「作業が今、一番、やりやすいですよ」っておっしゃって。それをアメリカとかが、一切無視して、壊してしまった罪ってのは、先生はやっぱり、憤っていて。

今、當眞先生がおっしゃってくださったように、中村先生って、物を見るときに、常にある意味、ニュートラル。小さい声しか上げられない人に耳を傾ける能力が、ものすごく高かったんだと思うんですね。小さな声しか上げられない人っていうのは、小さい声なのでなかなか人に届かないことに、すごく先生って、目も向けるし、耳を傾ける能力が、圧倒的に高い方だったんだっていう気はしてましたね。

小林　：今回タリバンが政権取って、僕がものすごい違和感を感じたのは、カブールの映像を流して、女性に対して差別をしてるってね。アナウンサーが「国際社会は、アフガンが前近代的な公開処刑や、女性平等をちゃんと守っていくか、見守っていかなければなりません」って、偉そうに言ってるけど、それやる前に、まず、謝らなあかんやろって。自分ら、自由と民主主義を掲げて、どんだけの人を殺してきたかって。そんなこと言わんと、国際社会がなんやかんや上から目線で見るちゅうのは、現地におった人にとっては、非常に違和感を感じたり。今もそういう報道は、時々なされてるからね。いまだ一般の方々は、何をしたかっていうことを、みんな理解してないとは思うんですけどね。学生さん、皆さんはどんだけ理解してるか、あれなんですけど。

轟木　：記念講座とかで、村上会長とか、藤田さんの話とかを伺ったりする中で、そういうことを繰り返しおっしゃっていたので、そうなんだなっていうのは、中村先生に関連することで、こういう関心を向けてないと、やっぱりタリバンは悪いんじゃ、とか、そういう認識は生まれてたのかなとは思います。

小林　：一時、中村先生は講演会で、学生さんたちに言うことは、「大人たちの言うことを信じるな」って。それは、タリバンに関する報道とか、そんなんに関連してのことやったと思うんですけどね。

堀　　：8 月の報道とか見ていて、高校生の目から見て、中村先生のことを少し学んでいたところで、自分が違う目で見れたなとかいうような感じはあります？

藤井　：そうですね。今まで僕は、ニュースとかそういうの見て、そのまま信じるような人間だったんですよ。でも、現地の人とかは悪いわけじゃないのに、一部を見て全体を話して、治安が悪いよな、みたいなイメージを持って考えていたので、知識を深めたことで、一部を見て全体を判断するようなことは、意識してしないようにしないといけないなと思いました。

堀　　：若い人には、まずそこから、そういう目を持ってほしいなっていうのが、一番ありますね。

轟木　：世の中の論調として、そうなってしまうって、なんでなんでしょうね。

谷津　：自分が、メディアにいる人間なので、ある意味、天に唾するような感じもあるんですが、みんなが同じこと言ってるときに、疑ったほうがいいなっていうのは、多分あると思うんですね。今も、多分、ウクライナの報道も、ウクライナが善で、ロシアが悪かのように喧伝すると、勘違いしそうな。メディアの報道って、洪水のように流れてるので。ただ、プーチン政権が悪いだけであって、ロシア人が悪いわけじゃないじゃないですか。
　だから、その辺みんなが、ウクライナが善みたいになっちゃったときは、おかしいなと思ったほうがいいかもしれない。僕が言うのは、非常に心苦しいんですが。

宮﨑　：中村君が言ってたのは、線引きをしないんだっていうことを言ってましたね。だから、悪の枢軸とか、ああいうのをものすごく嫌うんですよね。人間の多様性があってこそ、障害者のいない世界は健全なんだ、そんなことない。ノーマライゼーションの時代ができる話で、障害がある人、ない人、共に暮らしていける世間じゃないと。そういうふうに、はっきり言わなくても彼にはそれが身に付いてた、みたいな感じがしますね。

堀　　：それは若い頃から、やっぱりそう、でしたか？

宮﨑　：そうなんですよ。
いや、彼だったら、ちょっとくすぐったく思ってるようなね、人を愛すべく・・・信ずる・・・。

谷津　：信ずるに足る、ですね。

宮﨑　：こそばゆいんやないかな、それより、ぽつぽつと、当たり前のこととしてとかね。

小林　：ペシャワール会は、無思想、無節操、無駄、この三無主義やから、あんまり政治的な発言は、ペシャワール会としてはあまりしないわけなんですけども。

今、ウクライナの問題で、問題が出てきたら、ここぞとばかり、核共有って、核を共有するって。

谷津　：核シェアリングね。安倍元総理が言い出したんですよね。

小林　：これは軍事費を上げなあかん、GDP2パーセントとか言うて、叫んでる政治家おったけどね。

それは自分で考えることかも分からんけれども、しっかりそういう人たちにも、中村先生の本を読んでいただきたいなと、私の感想ですが。

《中村先生のことを伝える。実像はどんな人？》

谷津　：若い方にちょっと聞いても。

堀　　：もちろんです。

谷津　：中村先生は、さっき宮﨑先生がおっしゃったように、聖人君子に祭り上げられるのは、嫌だろうなって気がするんですね。ただ、どうしても報道とかだと、先生の人間的なことって、なかなか短い中だと出せないので、自分自身もそれは、いろいろ反省したり試行錯誤はしてるんですが。

僕らの世代だと、道徳っていう時間があってね、田中正造だとか、僕は正造が好きですけども、そういう人たちのことを勉強するのが、別にそのときには、一体、何だろうかなと思ってたんですが、中村先生と皆さんが捉えていくときに、道徳の授業じゃないみたいな感じで、皆さんがどういうふうに理解したいと思ってるのか、どういうことを見てみたい、聞いてみたいと思ってるのかっていうことを、聞いてみたいなと思うんですけど。

轟木　：一言で表せるわけじゃないですよね。すごく難しいかなと思うんですけど。今の質問としては、どういう質問でしたっけ、すみません。

谷津　：要は、僕とか、小林先生とか、籾井さんとか、中村先生を直接知ってる人間は、先生が決して聖人君子じゃなくて、くだらない冗談も言うし、それが全てではないんですけど、とにかく真面目で、祭り上げられるようなことは、きっと嫌だろうなと思うんですね。ただ、僕が作るドキュメンタリーだとかいろんなこととかで、そういう像をつくってしまってるんではないかなというような、ある種の心配は、実はあるんですね。

小林　：すみません、それに対して、ちょっとだけ、口、挟ませてください。

谷津　：どうぞ。

小林　：僕はミーハー的な人間やから、中村先生が亡くなったときに村上会長に、「先生、中村先生は亡くなったからノーベル平和賞取れないですけども、ペシャワール会としては、ノーベル平和賞取れますから、それ取りましょう。取ってもっとみんなに知っていただき、お金を集めましょう」って興奮して言うたら、「迷惑です」って、「哲ちゃんは、そんなこと思ってません」と言って、叱られました。

谷津　：ちょっと質問が難しかったかと思うんですけど、私たち、小林先生もそう、籾井さんもそう、先生のことを伝えていく際に、先生の実像と離れてしまうってことは、すごく怖いし、中村先生ってのは巨人なので、表現すればするほど、実像ともしかしたらずれてるかもしれないっていう不安とか、隔靴掻痒感っていうのは、実はすごくあるんですね。
それを、中村先生はこういう人だったっていうことを伝えていくことの難しさっていうのもあるので、そういう意味では、皆さんはどういうことを知りたいなと思うのか。
　ただ、すごいなと思うのは、そうは言っても、中村先生の言葉を聞きたい、文章を読みたいっていう人の熱っていうのは、燎原の火のようにずうっと広がってると思うんですね。それはやっぱり、中村先生のすごみで、皆さんもこういう場に参加してくださるっていうことそのものが、素晴らしいなと思ってるので、ちょっと僕の質問が変になっちゃいましたけども、皆さんが中村先生のことを伝えていくっていうのは、すごく大切だなって思いますね。

當眞　：どんな人だと思ってる？って聞いてみるといいかもね。どんな人だと思ってます？
中村先生って。会ったことないだろうけど。

吉松　：会ったことはないんですけど、知識だけやったら、偉人みたいな感じで、活動とかがすごく偉大な功績を残してるし。名言とか、すごくいい言葉とか残してくれてるから、やっぱり、偉人のように感じてしまうことは思ってますね、僕は。

當眞　：「こんなところ知りたい、実は」とかって、ありますか。だらしないとことか。おちゃめなところとか。

吉松　：日常的にしていたこと、みたいな感じですかね、中村先生が。

谷津　：小林先生もよく知ってると思いますが、中村先生って、緩急がすごくて、医師として、何か、ことに当たらなきゃいけない、今度は技師として、用水路を造るっていうときの顔付きとかと、そういうことから離れてリラックスしてるときは、ただの、本当にとぼけたおとっつぁんみたいな感じの落差がすごいんですね。多分、それも、ものすごい、魅力の一つで。
　この先生そのまんまだと、多分東京では必ず電車、乗り間違えるとか、講演会にたどり着けないとかって。それで僕がアテンドとか頼まれるわけですよ。日本人であって、大人で、なんで僕が地下鉄で先生を案内するのかな、みたいなこともあるような。

當眞　：一応、福岡って、都市部でいたはずだけど。

谷津　：それがやっぱり、ものすごい人間的な魅力で、ことが起きたときの先生の目の力とか、口が真一文字にこう結ばれて、ものすごい集中力でぐっと事に当たるときと、それからぱっと離れたときにすっとぼけた感じでいるときの、その魅力の落差っていうことは、なかなか僕らは伝えきれてないなっていう気がするんですね。

堀　　：私は、講演会を初めて聞いたときに、中村先生、柳のような方だなって思ったんですね。すごい根は張っているんだけれども、ふわっとかわすような、これまでやってきたことのすごさと、そのご本人が持っている、柳のような身のこなしというか、雰囲気っていうのが、すごくギャップがあるなと思って。でも、そういう柳みたいだったからこそ、こういう地で、こういうことができたんだろうなっていうのを、すごく感じましたね。

當眞　：映像としては、私ね、モスクが建って、前でみんなでお祝いしてる映像で、大きな現地の人が、まるで小学生みたいな中村先生をひゅっと抱え上げてやったときに、無邪気にきゃっと喜んでる感じ、あれはすごく、ほとんどもてあそばれてるような感じでしたけど、一緒に造ってきたところと、その遊ばれる感じっていうのとが出てて、印象に残った映像でした。見たことある？

轟木　：はい、あります。すごい、想像つきます。今、ちょうど、その話されてるんだろうなって思いました。自分は講演会、何回か拝見したんですけど、いい意味で全然オーラがなかったというか。淡々と小さな口調で話されるなっていうのが、すごい印象的で。講演会が終わった後に、質問とかすると、冗談みたいな感じで答えられたりとか。その後、話す機会とかもつくっていただいたときも、すごい話し掛けやすいなっていうのは感じました。そういう、講演会とか映像資料じゃない部分を、もっと知れたらいいのかなとは、すごく思います。

小林　：講演会の後の質問ってありますね。あそこにも、金の鉱脈はいっぱい埋もれてると思うんで、あれをちょっと引き出して、誰かがやる作業はせなあかんなと思うんです。

當眞　：そうですね。おっしゃるとおりですね。人柄がよく出てますよね。

小林　：本音の部分が働いてるからね。

當眞　：そう。その柳のようなかわし方とかね。

轟木　：それこそ、『医者よ、信念はいらない』（＊注 14）見たら、本にすごく、学生向けに質疑応答

＊注 14：『医者よ、信念はいらないまず命を救え!:アフガニスタンで「井戸を掘る」医者中村哲』（2003.10，羊土社）

の形式で書かれてて、それが一番、僕は中村先生のことに近づけたのかなという感じがしました。等身大というか。

谷津　：中村先生、くだらない冗談とかも結構、言うんですよね、実はね。

全然ウケないんですよ。そうすると、小さい声で「がくっ」とか言ってるんですよ。娘の秋子さんが言ってたのは、家でもくだらないこと、言うんですって。そうすると奥さんも、娘2人も、全然面白くないから、またお父さんくだらないことを言ってるとかって言うと、小さい声で「がくっ」ウケなかったみたいな、寂しそうにしてたっていう。ものすごく人間的な方なんですね。

小林　：現地で大変な大事件が起こると、中村先生はいつもジョークを、おやじギャグを言ってね、ウケないんですけどもね。でも、（中村先生の口調をまねて）「こういうときはユーモアが大切です」って言ってね。「ユーモアはその場を和らげる」とかね。

谷津　：おっしゃってましたね。

小林　：中村先生は、『夜と霧』（＊注15）ですね。

谷津　：ヴィクトール・フランクルですね。

小林　：あの本をぜひとも読めと、僕に言ってくださった時期があったんですけど、そこに書いてあったんですね。そういうナチスの収容所、ああいう過酷な所で、みんなどうやって生きていったかっていうと、そういうユーモアを交ぜてそこを乗り切った。多分、そのことを先生、言っとったんだと。

谷津　：そうですね。先生は「捨て身の楽天性が必要だ」って言ってました。

「捨て身の楽天性」ってすごい言葉だなと。要は、非常に厳しい状況にあっても、悲観的になっちゃいけない。アフガン人っていうのは、パキスタン人もそうですけど、苦境に合っても、別にみんな、暗い顔をしてないんですよね。持たざる人の強さっていうか、持たざる民の強さっていうか、わしら何にも持ってないもんねっていう。もちろん、命に関わるようなことは手助けが必要なんですが、彼らって非常にインディペンデントなんで、どんな苦境に合っても暗い顔してるわけじゃなくて、それをたぶん中村先生は「捨て身の楽天性」って言って、それが今の日本人には必要じゃないですかっておっしゃった。

小林　：われわれには要求水準が高過ぎるって。

＊注15：『夜と霧：ドイツ強制収容所の体験記録』ヴィクトール・E・フランクル著（1946年出版）、霜山徳爾訳1956年（1947年版訳）、新版・池田香代子訳2002年(1977年版訳）、みすず書房。
原題 *“Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslage”*「或る心理学者の強制収容所体験」（霜山.「『夜と霧』と私」.『夜と霧』新版(2002)：159）

谷津　：そうそう。

轟木　：自分がネパールに行って、土砂崩れで道が崩れて、これ復旧1カ月かかるわって言ってても、みんな笑顔だったのが。まあ何とかなるよ、みたいなっていうのが、すごい印象的でした。

谷津　：よく藤田さんが言っているように、先生ってすごい楽天家で、僕もそう思ったけど。
　ものすごい工事が、もちろん先生、工事が大変なときは先生の顔付きが全然違うんですけど、それでも「何とかなるたい」って言って、楽天的なんですよ。それが、みんなが安心するんだと思うんですよね。リーダーが暗い顔して、こりゃいかんみたいになってたら、みんながついていかないと思うんですよね。

小林　：「物忘れと勘違い」と、藤田さん書いてますけど、これよくあります。僕も結構、経験したことで。重要なこと、忘れてるんです。で、藤田さんが、「先生、また××でしょ!?」とかって言ったら、「そんなことあったと？　忘れとった」とか言って。

谷津　：しょっちゅうですよね。

小林　：ほんまに忘れとったのか、その場を切り抜けるために忘れとったって言ってるか、よく分からないことがあったりして。そういうことも、先生、言うてますね。

谷津　：一回、カマっていう所で、かなり田舎で撮影、いつも先生に乗せてもらってたんで、車が。三脚付けて、たまには撮らないとやっぱり、畑のきれいな風景とか。「先生、ちょっと時間いただけますか」って言ったら、「よかですよ、どうぞ。車で、私、待ってますから」って言って。三脚付けて取ってたら、ぶーっと車が出発しちゃったんですよ。あれっと思ったんだけど、電話とかもないし。おかしいなと思って、その場で待つしかないんで、カメラなんか持ってるから、みんな、「なんだこいつ？」って感じにだんだんなってくるんですね。ちょっとまずいかなと思ったら、30分後ぐらいで、ぶーっなんて先生、戻って来て、「谷津さん、乗ってなかったんですか？」とか言うんです。中村先生に「先生、言ったじゃないですか」って、なかなか言えなくて、「すいません」って言うしかなくて。「なんで乗ってなかったんですか？」なんて言うんですよ、先生が。
　その後、ドライバーさんが、わざわざ僕んとこに来て、「ごめんね」とか言いにきて。中村先生、目つぶって、「ズー」というのが、「ゴー、行け」という意味なんですけど、「ズー、ジャララバード」って言ったら、ドライバーさんが「いや、先生、谷津さん撮ってますよ」って言っても、先生も眠いから「ズー、行け」って言うから、そのまま、谷津さんごめんって言いながら、出発したとか言ってて。先生が途中で後ろ見たら僕が乗ってないんで、「谷津さんどうした？」って。「あそこにいます」って言うから、戻れ戻れとかなったっていうぐらい。あそこまでできる人って、どこかやっぱり、少しなんか、ねじがあれかなって言ったら失礼なんだけども、常人じゃないところが、ちょっとあったですよね。

轟木　：用水路とか、すごい計画的にされてるとは思うんですけど、計画性があったのか、計画性がなかったのか、どうなんですかね。

谷津　：それは、計画性は、すごいありました。あの用水路って、あんまりきちんと皆さんに伝えきれてないんですけども、平均傾斜って、100 メートルで 7 センチずつ落ちてるんです。ものすごい精密な測量と設計が必要なんですよ。用水路って、掘れば流れるってわけじゃなくて、ある一定の水を、あるスピードで流すためには、粗度係数っていうのがあって、マニングの法則っていうので計算してっていう、ものすごい綿密な計算をして、区間ごとに土の質とか違うので、どろが多いとか岩が多いとか全部、先生計算してやってますよね。だから小林先生が、ダ・ヴィンチ的な天才って言うのはそのとおりで、それ、独学でやってるんですよ。

日本で農業用水路の最後の建設って、知多半島っていう、名古屋にある知多用水路というのが、最後っていわれてるんですね。昭和 38 年だったかな。それ以降、多分、本格的な水路って、日本でも誰も造ったことがないんですよ。アフガンでそれを医者がやってしまうって、すごいですよね。中村先生はそういう意味では、自分はもう医者って名刺に入れてませんっておっしゃってて。技師って入れたいっておっしゃってて。だから、医者が余興で造ったと思われたくないとおっしゃってました。

堀　　：だから、土木学会の賞をいただいたときに、すごく喜んでいらっしゃった。素人ではないということを認めてもらったっていうようなところですよね。

谷津　：土木学会の授賞式って、すごいです。盛大にやって。たまたま先生のお手伝いで行ってたんですね。そしたら、その賞が、次々に発表されるんですけど、ほとんどが…。

當眞　：（座談会の残り時間あと 5 分を知らせるアナウンス）

谷津　：要は、そのときに発表が、鹿島建設のシールド工法による何とかかんとかとか、ちんぷんかんぷんのとてつもない最先端の技術が発表されるんですけど、その中、突然ペシャワール会の用水路建設技術って、どーんって出たとき、どよめいたんです。

中村先生がおっしゃったのは、技術っていうのは、人を幸せにする技術と、幸せにしない技術があるっていうのはちらっとおっしゃって。中村先生は明確に、原発は本当に人を幸せにしてますかって、そういう意識ではいらしたと思うんです。

小林　：あれは、特別賞ではなくて、ほんまのトップの賞やったんやてね。技術のトップの賞やったんやね。

谷津　：ほんまの賞です。特別賞じゃないですね。先生、喜んでましたよね。
すみません、僕と小林さん、年寄り軍団がしゃべりまくっちゃって。ごめんなさい、なんか。

堀　　：あとちょっとなので、これは聞きたいとかいうようなこと。籾井さん。

籾井　：いや、さっきの土木賞のことじゃないですけど、今は技術者チームって言って、福岡とか東京で働いてた人からアドバイスを受けながら、灌漑事業が進んでいってるんですけど、その人たちも、中村先生の技術はすごいってずっと言われてて。
　ある部分では勝てるけど、やっぱり、全体を見たら足許にも及ばないっていうことを言われてたんで、今はその話を聞いてて、それが頭によぎりました。

小林　：籾井さんは、今、パシュトゥ語勉強してね。将来、現地に行こうと考えておられるよね。

籾井　：そうですね。

小林　：ペシャワール会としては、重要な人物で。

谷津　：重要な。

籾井　：他にもいっぱいいるんで。

堀　　：もともと何かやっておられたということはありますか。

籾井　：もともとは、全然関係ないっていうか、大学終わって会社に入って、そこが飲食事業してるとこだったんで、飲食の仕事ぐらいしてっていう。

堀　　：大学のご専門と何かつながっていたりはするんですか。

籾井　：いや、全くないですね。だから、（大学生高校生の）みなさん、こんなときから、こんなこと考えるんだとか。

小林　：でも、自分の専門を離れて、会社に勤めとったのに、ペシャワール会入るだなんて相当、勇気がいったと思うんですけど。ご家族も反対されたりなんか、そんなんは。

籾井　：いや、家族には事後報告だったんで。どうしようもなくって。
谷津　：籾井さんたちが、すごい支えてますよね、今は。現地の、会長がちょっと言ってた、お金を送るだとか、現地の工事を進めるために、目立たないけど、籾井さんたちがすごい働いて、やっているなって。

堀　　：私、ちょっと聞きたいんですけど。中村先生、デザイナーだけじゃなくて、プロデューサー、

コーディネーター、なんの役割でもされている。それから、医療、灌漑、土木、農業、哲学とか、文化人類学とか宗教とか、結局、何でもフィールドとして。

小林　：体力もあるしね。

堀　　：体力も、ですよね。大学で研究者とかもたくさんいるわけですけど、中村先生のどういうところを、特に掘り下げて、もっと誰か研究してくれたらなとか、そういうのってありますか。

谷津　：短く。

　中村先生って、さっき言ったように「働くことの意味」っていう視点で、先生の映像を見直したり、文章を読むと、必ずそれに答えてくださる文章があったり、映像があるんですね。ということは、例えば医学とか、働くことの意味とか、いろんなカテゴリーで中村先生を研究して、実像が現れてくるとしか思えてなくて。時間はかかるんだろうなと思うんですが、それぞれの専門家が、用水路だったら技師が先生の技術をどう評価するか、小林先生みたいな、実際に医療をやってる方が、中村先生の医師としての姿とか、そういうことをきっと、いろんな専門の方からの研究対象としても、十分必要な、そういう素材、対象なんだと思うんですね。

堀　　：やれることは、いくらでもありますね。

谷津　：そうですね。

小林　：中村先生のことを書きたいっていう人が、いっぱい出てきてるらしくてね。ペシャワール会として、整理するのも大変。私もその１人ですが。

當眞　：（グループでの座談の終了を知らせるアナウンス）

（了）

座談会参加者のインタビューシートより

※座談会参加者に回答してもらった、事前インタビューシートから、回答の一部を抜粋して掲載しています。

	籾井 孝文（もみい たかふみ）ペシャワール会 PMS 支援室
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
現地の人に寄り添って活動をされていたこと	

	小林　晃（こばやし　あきら） 医師・元現地ワーカー
中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？	
「パキスタンのペシャワールという所でハンセン病の診療をしている日本人医師がいる」という話を聞き、1988 年春、大学の卒業旅行でペシャワールを訪れました。アポなしで先生がハンセン病診療をしていたペシャワール・ミッション病院を訪問し、そこで中村先生に初めてお会いしました。1997 年から 4 年間、ペシャワール会の活動に医師として参加しました。	
中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？	
志半ばでペシャワールから帰国しましたが、帰国後の人生を振り返りますと迷いもありましたが、普通の人より自由に生き、それなりに人生のやり直しができたと思います。先生亡き後、先生の著書すべてを繰り返し読みました。先生の「一隅を照らす」という言葉に出会い、おかれた時と所で「自分にとって良いことではなく、目の前にいる患者さんにとって良いことは何なのか」という目を持ち最善を尽くす、という医師として当たり前のことを実践すればよいのだということに気づき、自分を顧みることができました。	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
「一隅を照らす」という言葉があります。一隅を照らすというのは、一つの片隅を照らすということですが、それで良いわけでありまして、世界がどうだとか、国際貢献がどうだとかという問題に煩わされてはいけない。それよりも自分の身の回り、出会った人、出会った出来事の中で人としての最善を尽くすことではないかというふうに思っております。（一部省略して記載） 『医師よ、信念は要らないまず命を救え!』(2003.10, 羊土社; p.49-50) 　様々な人や出来事との出会い、そしてそれに自分がどう応えるかで、行く末が定められてゆきます。私たち個人のどんな小さな出来事も、時と場所を超えて縦横無尽、有機的に結ばれています。そして、そこに人の意思を超えた神聖なものを感ぜざるを得ません。この広大な縁の世界で誰であっても、無意味な生命や人生は、決してありません。私たちにわからないだけです。この事実が知ってほしいことの一つです。私たちが己の分限をしり、誠実である限り、天の恵みと人のまごころは信頼に足るということです。 『天、共に在り』(2013.10, NHK 出版; p.4-5)　　*他にもたくさん挙げていただきました	
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
中村先生は、幼少時、論語の一部を素読で暗誦していました。その記憶は生涯つきまとい、自分を内側から律する規範となっていると語っています。中村先生と論語について（論語の専門家から見た中村先生など）研究してほしいと思います。その他、「中村先生と平和思想」、「中村先生の考える教育とは」、などを研究していただきたいとも思います。	
どんな方に中村哲先生のことを知ってほしいと思いますか。	
先生のような「国際貢献」に限らず、自分が良いと思うことが「普通のレールから外れる」ような生き方を考えている多くの人に知っていただき、自分が良いと思うことへの第一歩を踏み出していただきたいと思います。 　若い人に限らず、全ての人に先生のことを知っていただき、先生の「生き様・哲学」を知ることで、己の人生の「励み」「道しるべ」となり、私のように改めて、自分自身を見つめなおす機会になればと思います。	

	谷津賢二（やつけんじ）　日本電波ニュース社 カメラマン
専門・仕事	私はテレビ番組制作会社、日本電波ニュース社でドキュメンタリー番組や記録映画の制作に携わっています。撮影、取材そして番組プロデュース業務も行っていますが、本来の職能はカメラマンです。海外取材が圧倒的に多く、これまでアジアや中東、アフリカなどの辺境でたくさんの撮影と取材を行なってきました。

弊社ベトナム・ハノイ支局に 1995 年から 1998 年まで 3 年間駐在しました。その間ベトナムだけでなく近隣のカンボジア、ラオス、タイでさまざまなドキュメンタリー番組の取材やニュース取材をしました。以来、30 年近くインドシナ各国と関わり続けています。特にベトナム戦争の傷跡はインドシナ各国に残り、その傷跡を取材し一度戦渦に苛まれると、どれほどの悲劇に襲われるのか、そのことを伝えたいと努力していました。ちなみに弊社ハノイ支局は 1964 年から現在まで 58 年間維持されています。その間、ベトナム戦争とこれまでのベトナム現代史を一貫して記録してきました。

中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？

1997 年の秋に中村先生のご著書「ダラエ・ヌールへの道」を読みその内容に衝撃を受けました。そして、ドキュメンタリーカメラマンとして中村先生を取材したいと思い準備を始め 1998 年 4 月に最初の取材が実現しました。ドキュメンタリーカメラマンとして 1998 年から 2019 年までの 21 年間、断続的に中村先生の現地活動を取材。20 本以上のテレビドキュメンタリーと記録映画を制作しました。

中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？

中村先生は私が人生で最も影響を受けた人物です。
中村先生を取材するため、私はアフガニスタンへ 25 回渡航、現地での総滞在日数は 450 日を越えました。日本での取材と取材以外でお目にかかった日数を加えれば優に 500 日以上の時間を中村先生の側で過ごすことができました。その間、命と向き合いながら活動を続ける中村先生の姿から、交わしたさまざまな対話から多くを学びました。そうした中で私と中村先生の関係は「取材対象者と取材者」という関係性は変容してしまい、人生の師だと思いその背を追い続けてきました。

中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？

この 10 年ほど、中村先生は著書や会報、そして講演会で「人と自然の和解」という言葉を繰り返し述べていました。私はその言葉を目にし、耳にするたびに少し違和感を覚えていました。「人と自然が共存する」のではなく「人が自然を守る」でもなく「人と自然が和解する」。和解と言う言葉を私がうまく理解できていなかったのです。2019 年 4 月のアフガニスタンでの取材時にようやく中村先生に次のような質問をしました。「なぜ和解という言葉を使ったのでしょうか？」と。そして先生の答えはこうでした。「私は自然にも人格があると考えています。だから人格を持つ人間と自然が和解する、と表現しているのです。」その答えは私が考えてもみなかったもの、「自然に人格がある」という発想にショックを受けたのです。その後も続いた先生との対話から、その真意をこう理解しました。「自然を物言わぬものと理解してしまうと、人間が欲望のままに自然から恵みを奪ってしまう。しかし、自然に人格があると思えば、対話が成立し、いたわる気持ちも持てる。人は自然と対話しながら、分をわきまえた恵みを受け取り事でしか、私たちの未来は成立しないのではないか。」この言説は、私は中村先生の思索の頂点の一つだろうと思っています。そして、この思索を用水路建設という厳しい実践の中で得たものだろうと思うのです。アフガンでの用水路建設の要となった「斜め堰」が持つ思想性を中村先生が読み解いた物とも言えるでしょう。「斜め堰」は自然から必要な水量だけ、つまり必要な恵みだけを得て、残りの水は本流に返す構造になっています。必要な恵みだけを受け取るという、私たちの祖先が持っていた技術が体現する自然観を中村先生は技術と思索を丸ごと理解し、自身の深い思索へと沈殿させていったのでしょう。私は中村先生が到達した「人と自然の和解」という思索にこそ、私たちが目指すべき世界の基礎になると信じています。

中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい

中村先生の凄さは「荒野に立つ哲学者」だったということです。私たちが知る「知の巨人」は基本的にアカデミズム出身の方が多いと思っています。その点、中村先生は知識人ではあるがアカデミズムとは離れ、思索と実践に励んだ「荒野の哲学者」だったと思います。自らの実践とともに思索を深め得た哲学はアカデミズム生まれの哲学では無い、野太さがあるこんなことを思いながら中村先生のことを知って欲しいと思っています。

中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること
中村先生のことを語れば語るほど、表現すればするほど、その本質と離れていくのではないか…という懸念を私はいつも感じています。言葉や映像での表現では捉えることができぬほどの巨人、常に隔靴掻痒の感に悩んでいます。

	藤井登睦（ふじいとうま）　福岡高校 2 年 ペシャワール班
中村哲先生とあなたとの関わりは？　出会った/興味を持ったのはいつですか？	
中村先生の母校である福岡高校に在籍。 親の話で二年ほど前。	
中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？	
一部を見て全体を判断することを意識してしないようになった	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
百の診療所より 1 本の用水路	
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
中村哲先生は現地の人の価値観まで考えていた(モスクとか)	
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること	
中村先生の活動を調べるとき、深く調べることを気を付けている	
ほかの参加者の方に質問！	
あなたが中村先生の活動を調べて、気づいたことは？	
（高校生・大学生へ）中村哲先生について、どんなことを知りたい、学びたいですか？*	
彼は日本にいたときどのような考えをもっていたか	

	轟木亮太（とどろきりょうた）　大分大学医学部 2 年 九州大学薬学部卒業生 中村哲先生の想いを繋ぐ会/哲縁会
専門・仕事	医学。感染症/途上国での医療/災害医療に興味があります。
中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？	
ワークキャンプをする団体の先輩（浦田さん）がペシャワール会に勤めていたことや九大の医学キャンパスで中村先生の講演を拝聴した時（大学 1， 2 年生）。中村哲先生の想いを繋ぐ会として、記念講座やメモリアルイベント、学生団体とどのように志を繋ぐかについて考えている。	
中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？	
ネパールで活動する際に、途上国で活動するうえでの心がけるべきことを示唆してくれた。	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
誰も行かぬなら、我々が行く	
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
現地の方法や人々の力をこれほど巻き込んで活動している人は少ないと思うため。 主役は現地という意識。	
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること	
自分が何か中村哲先生について伝えずに、著書などを読んでもらうようにする。	
（高校生・大学生へ）中村哲先生について、どんなことを知りたい、学びたいですか？*	
中村哲先生があれほど活動を支持された理由とはなんであるか？	

	吉松拓也（よしまつたくや）九州大学芸術工学部２年・哲縁会
専門・仕事	九州大学芸術工学部インダストリアルデザインコースに所属しております。プロダクトや空間、サービスを対象としたデザインと人間工学の２分野を大学で学んでいます。研究室配属はまだですが、どちらかというと人間工学分野で人のパフォーマンスの研究をしたいと考えています。
中村哲先生とあなたとの関わりは？出会った/興味を持ったのはいつですか？	
高校 1、2 年生の頃、母の影響で中村哲先生のドキュメンタリー映像を見たことが興味を持ったきっかけです。直接お会いすることは叶わなかったが、本やテレビといった媒体を通じて、哲先生の考え方に触れています。	
中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？	
哲先生の考え方の中で、できるかできないかではなくまずやってみるというものや、他人の靴を履くように現地に馴染むという考え方が自分のアイデンティティの一部になっている気がします。	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
「人は見ようとするものしか見えない」	
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
中村哲先生は、歴史上の偉人ではなく目の前の困難を何度も試行錯誤しながら乗り越えれいった人だということを知ってほしいです。	
どんな方に中村哲先生のことを知ってほしいと思いますか。	
デザインを勉強している私にとっては中村哲先生がデザイナーであると感じることが多々あります。同じ芸術工学部の学生に哲先生のことを知ってもらいたいと思います。	
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること	
偉人として扱うのではなく、ただ、こんな人がいたんだという事実や考え方を知ってもらいたいと思っています。	
（高校生・大学生へ）中村哲先生について、どんなことを知りたい、学びたいですか？*	
哲先生が困難に直面した時、どのように乗り越えようとしたのか現地での行動を知りたいです。	
その他	直接哲先生とお会いしたことのない私たちが、本を読んで、その想いを拡大解釈してしまわないか心配です。哲先生の考えをさらに応用や発展、昇華させることと、拡大解釈することの判断が難しいように感じます。

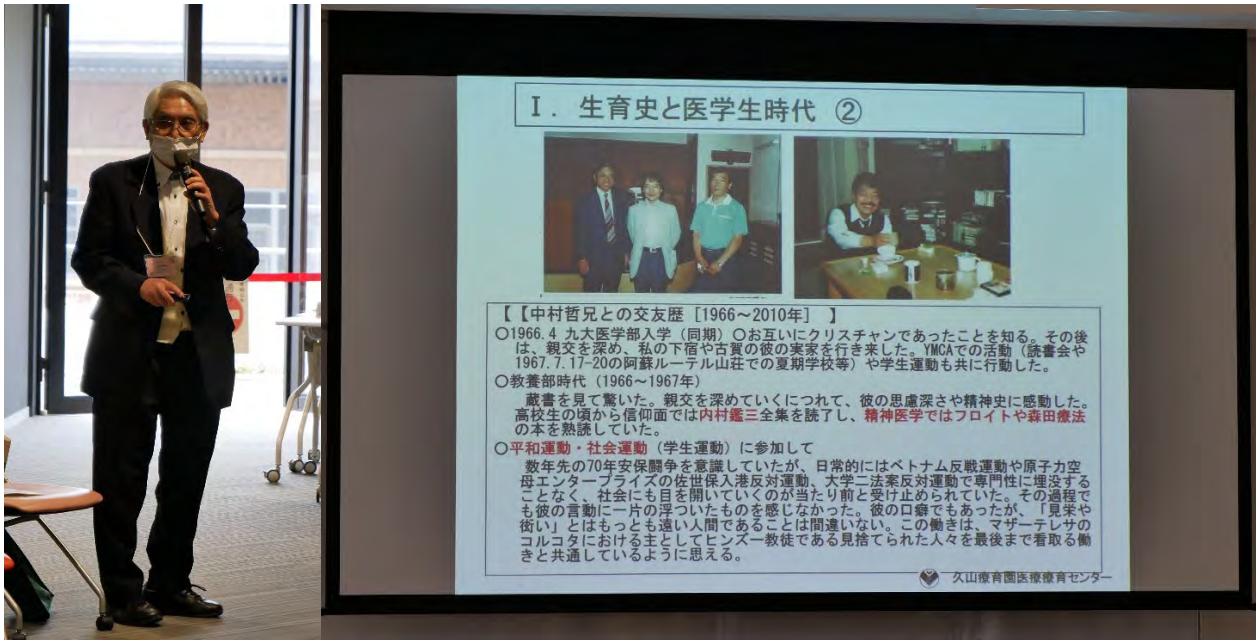
	堀　優子（ほり　ゆうこ）　九州大学附属図書館 e リソース課長
専門・仕事	九大図書館で、現在は電子リソースに関わる仕事をしています。ジャーナルや電子ブックの整備、機関リポジトリによる九大の研究成果等の発信、貴重資料等の電子化公開などです。その前は 15 年間くらい、伊都キャンパスの 2 つの新図書館の立ち上げと移転に中心的に関わってきました。新図書館の基本計画、設備（書架や閲覧机など）・サイン（案内板など）・資料配置・資料移転準備などの計画立案から実施まで多岐にわたるおもしろい仕事でした。
中村哲先生とあなたとの関わりは？	
九大図書館として、「中村哲著述アーカイブ」の企画運営に関わらせてもらいました。また、数年前に、ペシャワール会の写真パネル展を箱崎中央図書館で企画実施させてもらいました。個人的には、直接お話ししたことはありませんが、講演会や新聞・テレビ、著書等で聴いたり読んだりしていました。	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
私のメッセージは平凡である。目をこらして、何が虚構で、何が事実かを見つめ、世の流れに惑わされぬことである。　（「新ガリバー旅行記」最終章より）	
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
（活動にしても言葉にしても）出力の量とその力が圧倒的過ぎて、とにかくできる限りアーカイブして発信していくのみです。	
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること	
広告塔にしないこと。地に足を着けて、迷っても惑わされずに息長く取り組んでいくこと。	

オブザーバ	宮﨑信義（みやざき　のぶよし）　医師（重症心身障害医療）
中村哲先生とあなたとの関わりは？　中村先生と出会った/興味を持ったのはいつですか？	
1966 年 4 月（九大医学部入学時）九大医学部に同期入学、親友として付き合ったこと、教会やペシャワール会における支援。医学生として、家族的な交わり、同じキリスト教会員として、学生運動を共にして等。友として、学生～青年医師（ペシャワールに中村哲医師が赴任するまで）の時代に行動を共にして何でも語り合った。	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
「見栄や衒いではなく」、「当たり前のこととして」	
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
ハンセン氏病診療から始まる海外支援が、医療にとどまらず、病気が軽快した後の生きるすべを心配する（靴工場の労賃など）ことを「当たり前のこととして」、一歩一歩進んだ結果が偉業となった。飽きが来ないことは、学生時代の食べ物（かつ丼など）がたいてい決まっていたことにも表れていたようです。	
どんな方に中村哲先生のことを知ってほしいと思いますか。	
一般庶民や困窮者以上に世の指導者層が中村哲医師の活動の真意を少しでも理解してほしい。	
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること	
彼自身も嫌っていたヒロイズム（英雄崇拝）として取り扱われず、現地の人々の幸いに繋がる報道がなされることを願っています。中村哲医師も一時の熱情ではなく、派手さはなくともアフガニスタンやアフリカなど、困窮している方々への理解と共感が深められることが中村哲医師の生涯の証しとなると思います。私はペシャワール会の方々の活動の継承や母校の方々の支援に敬意を覚えています。自分としては彼が他界したことの悲しみと寂しさをいつも覚えます。	
（先生方へ）中村先生について伝える際「道徳的」なメッセージ性を、どのくらい出そうと(抑えようと)していますか？*	
彼の活動の根底には、現地で布教は出来ませんでしたが、キリストの証人として立場を明確にしていたと思います。マザー・テレサとの類似点も覚えます。彼自身が英雄視されることを嫌っていたことは間違いのないことです。学生時代の日常は、どちらかと言えば目立たない存在でしたが、事が起これば「淡々と実行したに過ぎない」と思っていることでしょう。	
その他	中村哲医師が活動の初めから現地の人々の自立（カイバル医学校での教育など）と活動の維持（水路の保全など）に努めたことは、まさに彼ならではの個性とも言うべきことでしょう。彼自身はキリスト教徒であることを隠しませんでしたが、イスラム社会で昔、宣教団が改宗させようとして失敗した歴史は当然だと言っていました。

オブザーバ	内藤　敏也（ないとう　としや）　九州大学役員（理事・事務局長）
中村哲先生とあなたとの関わりは？	
九州大学において中村先生に関する活動に関わっています	
中村哲先生の存在は、今のご自身のお仕事、人生にどのような影響を与えましたか？	
中村先生の足跡を九州大学の学生を含め、後世に残していくべきと考えるようになった	
中村哲先生の言葉で、印象に残っているものは？	
人は愛するに足り、真心は信ずるに足る	
中村哲医師のここが面白い、ここを知ってほしい、ここを研究してほしい	
自分の専門を遥かに越えても必要なことを学んでいく姿勢	
中村先生について伝えるとき、大事にしたい・気を付けている事。困ったな・悩ましいなと思っていること	
実際にはお目にかかったことがないので、想像の中で美化しすぎないように考えています	
（先生方へ）中村先生について伝える際「道徳的」なメッセージ性を、どのくらい出そうと(抑えようと)していますか？*	
事実に基づいて中村先生を理解することが必要です。そのためには、実際に中村先生と一緒に仕事をした方からのお話が重要だと思います。	
その他	中村先生に関わる方、中村先生に思いのある方が繋っていくことが重要だと思います。

座談会「中村哲先生のスピリットを継承する」記録

ミニトーク、閉会



ミニトーク「中村哲医師のキリスト者としての生き方」
ゲスト ： 宮﨑信義 久山療育園理事長・医師（重症心身障害医療）・中村哲医師の大学時代からのご友人

座談会コーディネーター ： 當眞千賀子 九州大学人間環境学研究院教授（発達心理学）
進行 ： 堀　優子 九州大学附属図書館 e リソース課長
記録 ： 九州大学附属図書館
※ この記録に登場する参加者の所属等は、座談会が開催された 2022 年 3 月当時のものです。

堀　　：みなさんおそろいのようですね。みなさんたっぷりおはなしできましたでしょうか。
　ここから中村先生の同級生でご親友で、現在久山療育園という所で重症心身障害医療に携わっておられます宮﨑信義先生からお話をうかがいます。
　それでは宮﨑先生よろしくお願いいたします。

《ミニトーク：学生時代の中村先生、クリスチャンとしての中村哲医師―宮﨑信義先生》

宮﨑　：白熱した懇談がですね、延々と続いても一つもおかしくないような時間だと思っておりますけれども、私は学生時代から青年医師の時代くらいまでの海外医療協力を決意するくらいまでを中心にお話したいと思います。

日本電波ニュース社の谷津さんが関わった NHK の番組でも、ずいぶん以前から、若いときのことを取材されていましたけれども、何か大学で彼をと言ったら、私しかいないような、あんまり手広く交際するような感じじゃないんですね。非常に目立たない存在、でも、後でグッとくるような存在感を感じる人でした。まあ、いつも哲ちゃん哲ちゃんと呼んでいましたので、中村先生とか中村医師とか言うと、ちょっとこそばゆいので、哲ちゃんとか哲くんとか言うと思いますけども。

そういったことで、主に彼の生い立ちとか学生時代、海外医療協力を決心することを中心にお話しして、3 番目はですね、もうペシャワール会報とか NHK の番組で非常に詳しく正確に語られているんで、サッと行きます。それと彼が何を望んでいたのか、「遺志」というのは、当然つらいことですけれども、有りのままを語っていきたいと思います。

それからわたし NHK の彼の番組を見たり、石風社で書いた本を読むと、自分自身ものすごく領域が違うんですけど、自分が落ち込んでいた時でもそばにいない彼に元気づけられるんですよね。そういったことは皆さんもやっぱり共通しているんじゃないかと思います。そういったことでお話をしていきたいと思います。12～13 分のつもりです。

これは彼がのっていた写真で、西南中とか福高とかのときの、これは菜っ葉服（＊注 16)、いわゆる菜っ葉服をいつも着てたんですけども、まあ、こんな格好をして行き来していました。そして、ご承知のように、彼の誕生日は昔は敬老の日だったんですね、それでよく覚えているんですけども、9 月 15 日に中村勉・秀子さんの次男、次男というのは実際は長男なんですけどね、養子の方が上におられたわけですね。若松で出生されて、古賀市に小学一年のときにうつられた。古賀西小学校ですね。古賀から中学校は西南学院まで通われました。

ただね彼がいつも菜っ葉服を着ていたのは、お祖父さんの玉井金五郎さんの影響かもしれませんね。いつも現地で写真を飾っていたように祖父の影響も非常に強かったんじゃないかと思います。 沖仲仕（＊注 17）の親分でね、相当やっぱり差別されていた人も同じように接していたと言われています。

叔父さんは火野葦平という、「麦と兵隊」が代表作ですが。哲ちゃんが言っていたのはこの葦平おじさんはですね、純文学がやりたかったけれども、やはり戦時中だから戦記物を強いられたというのを、とても悔しがっていたと。中学校三年の時にクリスチャンになって、私もその縁で大学生の時に同じ教会に入会したんです。

＊注 16 ： なっぱふく。工場労働者などが着る薄青色などの作業服を広く指す。汚れて黄土色になる、撚りの甘い綿が、汗や洗濯でヨレヨレ・しわくちゃになる様子が、萎(しお)れた菜っ葉(なっぱ)のようだから、など諸説ある。

＊注 17 ： おきなかし。港湾で船の荷揚げ荷下ろしの作業をする労働者たち。船舶を岸に寄せられるよう港湾が整備されていく 1965 年（昭和 40）ごろまでは、船を沖に停泊させ、貨物を艀(はしけ：小舟)に積み替えて陸まで運ぶことが多かった。こうした沖の本船や艀の中で貨物の揚げ降しの作業に従事するため、沖仲仕といわれた。狭く危険な作業環境で迅速に貨物を処理するため、強い統制と熟練を要する重筋肉労働だった。荷役機械の導入が進み、この名称は使われなくなっていった。（参考：日本大百科全書（ニッポニカ）小学館）

火野葦平の『花と龍』は、中村哲医師の祖父母、玉井金五郎（若松の仲士・玉井組組長）・マン夫婦が主人公で、港湾労働の近代化も背景として描かれている。

これが交友している時代で、彼はあまりアルコールは、のちにタバコはスパスパすってましたけれども、イスラム教世界というのもあるしですね、（酒は）飲まなかったようですね。大事な人はみんな天にかえっていったですけども、教会もおんなじで、仲良しだった児島君という人も福高の同級で同じ香住ケ丘教会員でした。こういうふうに…

私は大分県出身なので、1966 年に入学して、たまたまお互い、佐藤雄二君（＊注 18）も入れて 100 人のうち 3 人がクリスチャンだったんですね。3%というのは日本では多いんですよ。まあそういうこともあって、親交を深めていって、私の下宿や彼の実家の行き来をして、お母さんは、もうとっても親切にしてくださいました。哲っちゃんの古賀の実家が旅館をしていましたので、泊まった時はおいしい朝食を頂きました。

YMCA でずっと活動して、阿蘇ルーテル山荘の夏期学校というのが非常に印象的だったことですね。滝沢克己という、九大の倫理学・哲学の教授で神学者でもあった、非常に優れた方だったんですけども、その方が基調講演をなさっていろんなアクシデントなんかがあって、非常に印象深い時でしたね。（＊注 19）このあといろいろ、社会問題とか原子力空母寄港（＊注 20）とかあってですね、いろいろ学生運動、これはもう、新左翼といわれたセクトはちょっと嫌って、YMCA というキリスト教のサークルから誘いに行ったりしておりました。

でも彼の家に行くとですね、内村鑑三全集がずらーっと並んでいるんですね。「え？これいつ読んだの？」って言ったら、「高校の時」とかね。非常に精神的にはもう、早熟っていうか、フロイトの精神医学を非常に関心を持っていたので精神科を最終的に選んだのだと思います。さっき言ったように学生運動のこともあるんですけれども、相手の必要に答えるという、彼はいわば、マザーテレサという有名な方がおられるが、マザーと共通したものを感じておりました。

＊注 18 ： 九大医学部入学以来の中村医師の親友。ペシャワール会初代事務局長。故人。中村医師弔辞「佐藤雄二君を懐う」;ペシャワール会報 31 号（1992.5）　http://hdl.handle.net/2324/4362883　（中村哲著述アーカイブ）

＊注 19 ： 宮﨑氏の覚書によると、1967 年 7 月 17～20 日の阿蘇ルーテル山荘での九州地区学生ＹＭ(W)ＣＡ連盟の夏期学校に中村哲氏とともに参加。20 世紀最大のキリスト教神学者と言われるカール・バルトに師事した滝沢克己教授（九大文学部哲学科）が基調講演で「インマヌエル（神、我らと共にいます)」という深遠な講演を行い、共に学んだ。また、期間内に参加した女子学生が行方不明になり、総出で山狩りをするというハプニングがあったが、幸い大事に至らず、発見された喜びは、滝沢克己先生の影響もあってか参加者に広く共有されたとのこと。『滝沢克己講演集』(1990.6, 創言社）には、1966 年 7 月 20,21 日阿蘇ルーテル山荘での主題講演「神われらと共ににいます」(レジュメ題「インマヌエル（神われらとともに在す)」)、1967 年 7 月 18 日、同じくルーテル山荘での特別講演「何を支えとして生きるか」が収録されている。1967 年の講演でも「インマヌエルの事実」に関する質疑応答や、座談会で滝沢教授がインマヌエルに気づくまでの過程を長く語られたとの記述あり。

＊注 20 ： 1968 年 1 月、アメリカ海軍の原子力空母エンタープライズ号の寄港（米軍佐世保基地入港）に反対する運動。ベトナム戦争への反戦運動、非核、反米の運動の性格も持っていた。学生含む 5 万人以上が阻止集会に参加、機動隊は 5000 人が動員、空母の出港(23 日)まで市街地で衝突が繰り返された。九州大学は宿泊等の拠点だった。

それで肥前療養所に、いわゆる医局講座制というのが彼は合わないだろうと、教条的なものが合わないだろうと、最初から精神科の国立肥前療養所病院に入ったんですね。
その時にたまたまヒマラヤとか、ヒンズークシュとのかかわりはここ、これも不思議なんですね。私の所属した呼吸器科の医局の二次会の時に行ったスナックで偶然一緒になった福岡登高会という、米屋さんとかなんとかやってるひとたちの、親父さんの登山愛好家から声をかけられました。愛好家と言っても登山は本格的なんですね。その、福岡登高会の人が「報酬はわずかだが同行してくれるドクターを知らないか」ということだから、さーあ、よっぽど登山家は別として、そんな人がいますかね？いや、物好きな人間だったら一人だけおる、といって紹介したらさっそく連絡を取ったみたいで、それからヒンドゥークシュ、ティリチ・ミールというふうに進んでいったということですね。
ドクターが同行しないと（山に）入れない、さっきの（座談会でもお話しましたが、道中では）診療拒否できないという、医者を見るとワーッと寄ってくる、その人たちには結核が多かった、熱病もそうだし、そういったことで、思いを残していった、ということですね。

これはもうみなさんよくご存じで、医療に限定されないというのは彼にとっては自然なんですね、私も含めて多くの医学生は専門医志向になりがちな状況でした。私は呼吸器内科医から始まりましたが、現在は障がい医療だから、全ての領域を含むわけです。彼も初めから、その目の前の人が飢えていたらまず水と食糧、感染症だったら清潔な環境、と自然に視野に入り行動するのですね。
それと、驚いたのが、彼はどちらかというともともと不器用なんですね（そう思っていました）。そのこともあって精神科を選んだというのは、これは誤解でしょうけど、そのうちに神経内科の専門をとったり、救急医学、それからいよいよハンセン氏病診療に行くとしたら、「うらきず」と言って、知覚麻痺があるので外創ができやすく、潰瘍化して切断しないと命を落としてしまう。足の切断って言ったら外科でもすごい技術が必要で危険がありますけれども、それも研修をして、それから最初は日本キリスト教海外医療協力会というところからペシャワールのミッション病院に赴任して、8 年ですね。石の上にも 3 年どころか 8 年。最初の方はご家族も一緒に行かれて、小学校にはいるころに日本に帰られたんですね。

事件を知ったのは、私の娘が「哲ちゃんが撃たれたってよ」と言いまして。私はびっくりして、最初の日は命に別状がないと言っていたのが実はそうではなくて、安堵したのも束の間で殉難死しました。不条理極まりないと嘆きました。それまで、海外医療協力をはじめて 2019 年 12 月 4 日の殉難まで 35 年、コツコツ、淡々と、というのが正しいだろうと思います。
しかも現地スタッフに渡すという意識、これがあった。現地スタッフの育成から軽症化した人の生活の心配（サンダル工場）など、それはびっくりするような彼にしか思いつかないような行動でした。当時は ODA 国際援助というのはけっこう電気のないところに洗濯機を送ったり、テレビを送ったりするようなものですね、彼はその人にとって治療だけではなく、何が必要なのかを的確に判断していたのだと思います。

遺した言葉として、本にも書かれていますけれど「人は愛するに足り、真心は信ずるに足る」、この

通りなんですが、かれはこんな格好いいことを言うとね、こそばゆいようなふうに思っているんじゃないかと思うんですね。

学生時代から口癖のように言っていたのは、「見栄や衒いでなく、当たり前のことをすればいいんだ」、と。それが35年も続けば、すごい活動とすごい共感を生む、日本も現地の人もあつまって、すごい事業につながったんですね。本当にその一点から始まったとしても、ひろがりと深まりを持った要点じゃないかという気がしますね。
「目の前に倒れている人を見過ごす人は、よほど変わっているんだと思う」。
これも偽りなくそう思っているんだと思いますね。これは聖書にもあるんですけれども、だいたい偉い人、祭司とか、いわゆる高僧になれば道をよけていき（善きサマリア人のたとえ）、却って差別されていたサマリア人だから強盗に襲われた人を見過ごせなかったのだと。実際差別されていた人が、半殺しの目にあった人を介抱して助けたということです。そういった聖書的なことが、彼をずっと支えていったというか、その根幹にあったんじゃないかと思いますね。

活動の経緯はペシャワール会報とか日本電波ニュース社の制作された番組を見ていただいた方がよいと思いますね。驚くべきことは、難民が定着する、今もっと増えてると思いますが、65万人の人が生活基盤を得るということは、ちょっとできないことですよね。
私が学んだことは、「対象者（病者、障碍者、難民、困窮者）中心の聖書を基礎とした医療を目指そう」と、学生時代に語り合ってはいたのですが、それが、ペシャワール会からいのちの水の活動にもつながっていったのだろうと思います。なかなか実現するっていうのは難しいと思いますね。それが医師としての人間としての立ち位置であって、主客転倒してはいけない、と。彼はこういう風に自然に自然体でその姿勢を貫き通したと思いましたね。私は彼に元気をもらいながら、今も障がい者医療で働いていますけれども。

さっき申しましたように、新約聖書のルカによる福音書の強盗に襲われて倒れていた人を助けたのはサマリア人といって、どっちかというと被差別民族の人が助けて、正しいとされていた祭司やレビ人（れびびと）は道をよけていく、そしてそれを問うた人にたいして、あんたも行って同じようにしなさい、と、同じようにしなさいという事が大事なんだ、と。
で、これは新約聖書ですけれども、あなた方によく言っておく。私の兄弟であるこれらのもっとも小さなものの一人にしたのは、すなわち私にしたことなのだ、とこれはもうカルカッタ（コルカタ）の、死を待つ人の看取りをした、マザーテレサもこの箇所を非常に大切にしましたね。
彼はキリスト教的な、聖書的な人だけじゃなくて、彼の人柄、人となりでもあるんですけれども、それがペシャワール、アフガニスタンの支援につながっていったんだなということが、非常に私は心に落ちるんですね。以上です。

堀　：宮﨑先生、どうもありがとうございました。ここから代わります。

《座談の分かち合い―高校生参加者から―》

當眞　：宮﨑先生、ありがとうございました。お若い頃から中村先生と一緒に過ごされた方でないと語れないお話を聞かせていただきまして、本当にありがとうございました。今日のお話の中にも、グループディスカッションの中で話題になっていたテーマが重なっていると感じました。

各グループに、ちょこっとずつお邪魔させていただきましたけれども、最初のお互いを知り合う時間が過ぎた後、ぐうっと座談が深まっていくのが早かったなというふうに感じました。途中で切るのがつらくてですね、計画を大幅に変更して、こういう形にしましたけど。あと 20 分ほどの時間、せっかくですので、全体での座談という形で共有する時間が持てたらと思います。

いろんな立場の方が集まってくださったおかげで、とてもユニークな座談会になったと思います。まずはじめに、高校生の皆さん、ここまで来てくれたので。今日、5 人ですか、参加してくださったの、ですね。なので、高校生の皆さんには、一言ずつ、何でもいいです。今、語りたいことを語っていただけたらと思うんですけど、お願いしていい？　いいですか。順番に、一言ずつ、お願いしたいと思います。

邊見　：ペシャワール班の班長を、今やっています、邊見紗来といいます。きょうのお話の中で、自分が今まで考えていた、どういうふうに伝えていくかとか、そういう事の、少しヒントを得られたかなと思います。私が、（中村）先生を尊敬し始めたのは、先生が亡くなってからで、先生と関わったこともないし、本の中とか講演録の中とかでしか、先生の人柄だったりっていうのを知りえないという状況で、どうやって母校に伝えていくか、すごく、今、悩んでいるところです。

私が、伝えていく中で大切にしたいと思っているのは、現地に行って支援するってなったら、自分のこと、利益とかも考えてしまうっていうことも多いと思うんですけど、（中村）先生が、それを考えないで、その土地に合った、なじめるようにっていうところを一番大切にしていたっていうところで、それをもっと深めて伝えていけたらいいなと思います。

あと、皆さんからお話を聞く中で、先生は、普通じゃないというか、ユーモアとかがすごくあふれる方だなと思ったので、そこを切り口にして、今後、伝えていったら、興味を持ってくれる人が増えるのかなって、今日思いました。少しずつ、興味を持ってくれる人を増やして、今後、関わったことがない人が伝えていかなきゃいけないっていう状況でも、伝えていけるようになりたいなって思いました。ありがとうございました。

當眞　：ありがとうございます。「素晴らしい聖人のような、英雄のような、全く非の打ちどころのないような人物として描かれると、中村先生ご本人は、非常にご不満だろう」という声が、実際に中村先生と一緒に過ごされた方から、どのグループでも出ていましたね。そこで、ちゃめっ気のあるところとか、ちょっとドジなところとか、人間くさいところとか、試行錯誤しながらやっていく姿とかが、語られたと思うんですね。そこって、聞いてみると、ちょっと気分が変わりましたか。

邊見　：本の中とかでも、そういう、先生の、ちゃめっ気っていうか、考え方っていうのは少しあったん

ですけど。実際に関わった人の中で、こういうところがちょっと面白かったとか、そういう面白い人となりが感じられたので、そこが、すごく、ここでしか聞けないなって思いました。

當眞　：思いました。生き生きとした感じですか。

邊見　：はい、すごく。

當眞　：ありがとうございます。では、次の方にバトンを移していただきたいと思います。

松木　：福岡高校の松木沙和といいます。きょうは、アリのマークのグループでお話しさせていただきました。私のグループでも、今後どのようにして私たちが伝えていけばいいか、というところで、藤田さんがおっしゃっていたんですけど、さっき邊見さんも言っていたように、中村哲さんの等身大の姿をもっと伝えていくことができれば、と思います。今、私たちの中では、偉大な先輩というところが大きくあるので、もっと、そこの部分を壊して、身近な存在として、私たちが、同級生とか、同じ高校の人とか、身近な人に伝えていければいいなと思いました。

今回、話をしていく中で、中村哲さんのことを知った上で、私たちは何ができるのかという部分を、もうちょっと自分の中で、伝えていくだけじゃなくて、今後、将来に社会に出て、自分がしていきたいこととかとも関連しながら、中村哲さんのスピリットっていうのを大事にして、どのようにして自分の中に取り込んでいけるか、今後の活動とか行動に生かしていけるのかというのを、もっと考えていけたらいいなというふうに思いました。ありがとうございました。

當眞　：ありがとうございます。今まで知らなかった中村先生の姿も含めて、シンプルに見えてた中村先生、単にすごいっていう感じだったのが、複雑で、いろんなところがあって、まだまだ知りたいなっていう気持ちと、知った上で、自分もそこと対話しながら、生き方に取り込んでいけそうかなって。あまり神様みたいに立派だと、ちょっと近寄り難いんでしょうけれども、少し自分の生き方を考えながら、中村先生を知っていきたいなっていうふうに感じたっていうふうに聞こえましたけれど、そういうことでいいですかね？

松木　：はい。

當眞　：ありがとうございました。次の方にバトンを渡してください。

中西　：福岡高校の1年生の中西と申します。今、2人が話されたこととか、まとめていただいたことと同じことを本当に思っていて、人間味のあるエピソードっていうのが聞けて、すごく、ぐっと近く感じました。もう亡くなられてしまった方だし、教科書の中というふうな、それほど遠い存在ではないですけど、本の中の人だったりとか、そういった感じで、遠くなりがちだと思うんです。けど、先ほど、ヒマラヤに赴いたときに、同行して、近隣の医療の必要性を感じたっていうところで、僕も、登山部で所

属していて、登山が好きなので、そういったところで何か近いところを感じたりして。

高校生に伝えていくときとかに、アフガニスタンでこういうことをしてとか、そういう詳しいことを伝えていくこともちろん大事なので、今まで、そういうことをずっと高校の中で伝えてきたんですが、とっつきにくいというか、入り口として、そういう、スタートのエピソードみたいな、人間味のあるエピソードを伝えていくことで、より多くの人が、特に若い高校生とかは、興味・関心を持ってくれるんじゃないかなと思いました。

當眞　：ありがとうございます。そうだね。自分たちが出会った出会い方と、みんなが出会うきっかけをどうつくるかっていうところをつなげながら考えてみると、わりかた、少し自分とも関係が取れそうな人物として現れてくれるっていうことで、いい入り口になるんじゃないかということですね？

中西　：はい。

當眞　：ありがとうございます。あと 2 人、おられるかな。よろしくお願いします。

藤井　：福岡高校の藤井登睦と申します。よろしくお願いします。僕の言いたいことは、さっきの 3 人と同じようなことなんですけど、中村先生のことを知って、同じ、人間味のある方なんだなって思いました。座談会で聞いたことなんですが、若い頃から信念を持つ必要はないって。いろんなことをやって、やって通していく上で、信念っていうのが身に付いていくものなのかなと、僕も、そのとおりだなと思いました。あと、自分のことを言っていいんですか。

當眞　：はい、もちろんです。

藤井　：自分のことになるんですけど。僕、小中学生くらいの頃まで、ませてたっていうか、ちょっと打算で考えてたような人間だったので。中村先生は、そういう人間じゃなくて、打算とかじゃなくて、もっと人間の根源的なところ、だから、善悪とかじゃなくて、さっきあったように、人が前で倒れてたら助けるのは当然だろうって、そういうことだなって思って。そういうことを大切にしていたのが、中村先生の信念だったって思いました。今回の座談会を通して、いろんないいことを得られたので、本当に良かったです。ありがとうございました。

當眞　：ありがとうございます。でも、自分はよこしまだということを、素直に認める誠実さがあるっていうことですよね。とてもいいお話聞かせていただいたなと思いました。先ほどから出ている、等身大の中村先生。とっつきにくいというところから、いろんなところがあるっていうことと、すごく大層な理想を掲げて始めたわけではなくってっていう、「倒れてる人を、目の前にいたのを、どうにかしなきゃっていうことの積み重ね。黙々と、淡々と」っていうことをおっしゃってくださってたことと、だんだんつながってきた感じですね。後で、大人の人たちからも、ちょっと追加で、お話、聞きましょうね。では、最後の高校生になります。よろしく。

坂本　：福岡高校の坂本雄哉と申します。今回の座談会で、藤田さんの話とかを聞いて、僕のイメージでは、中村先生って、寡黙で、そして、手術とかもものすごくうまいみたいな、そんなイメージがあって。藤田さんの、等身大の先生について話を聞いて、実は手術が不器用だったとか、話し好きだったとか、自分のイメージと実際の先生の姿が、すごく離れていて、イメージが壊されて。でも、今まで「偉大なことをしてきた人」というイメージがとてもあったので、自分のこととして、自分に近い人なんだなっていうのも感じられて、良かったです。

中村先生のことを他の人に伝えるときって、どうしても「偉大なことをした人」っていう堅苦しい感じの説明になってしまって。他の人とかから聞いたら、自分のこととして考え難いイメージで、今まで他の人に伝えてきていたので。今回の座談会の話とかで聞いたことで、等身大の先生っていうのを、他の人に、興味・関心を引いて伝える、プラスの何かの魅力っていうのを、今後、伝えていきたいなと思いました。本日はありがとうございました。

當眞　：ありがとうございます。結構、不器用だったっていう話は、どのグループでも出ていました。その不器用な人が、手術をするために韓国まで学びに行ったとか。高校生の皆さんの話を聞いていると、生きてる中村先生と出会う機会は残念ながらなかったけれども、人としての中村先生に、今回の座談会を通して出会えた感じ、ちょっと語り掛けてみたいっていうふうな気分に少しなれたっていう、そういう気がしましたね。

一方で、お話聞いてると、やはり偉人でもあるっていう面もあるんで。　非常に近寄りやすいチャーミングなところと、65 万人が干ばつの中で命をつなぐことにつながっていったというところとが語られていました。それを、「淡々と、黙々と」っていうので、いくつかのさまざまな語りが、実はすごくつながっていて、中村先生の活動のリアリティーが生まれたっていう感じがしたんですね。この点に関して、谷津さんが、「口を真一文字でキュッと結ぶときと、力が抜けた時」と、この緩急のことをちょっとお話しされていたと思うんですけども、そこの話、少ししていただいてよろしいでしょうか。

《座談の分かち合い―中村哲先生の姿を伝えていく―》

谷津　：すみません、僭越ですが。中村先生を取材してた中で、ちょっと思ってたのは、中村先生が、医師としての、人の命と向き合うとき、医師として用水路建設に向き合うときと、それが終わって例えば宿舎に戻って皆とご飯食べてるときとの落差が、すごいあってですね。現場にいるときは、中村先生の目には力が宿っていて、口をぐっと一文字に結ばれていて、もちろん無駄口もたたかないですし、ただ静かな闘志があるっていう感じだったんですが。そこから一歩離れると、人間の脳にも限界があるんでしょうね。技術以外のことだと、かなりいろんなことが抜け落ちたりしてるようなところが散見されていて。そういうところが、中村先生をみんなが愛するっていうことになったのかなって、ちょっと思ったのは、すごく僭越な言い方すると、何か先生のためにしたいって思わせてしまうところがあってですね。その吸引力は、すごいものがあって。

言葉も文化も宗教も民族も違う、アフガンの人、パキスタンの人が、なぜ先生に付き従うのかなと思うと、多分言葉でいろんなことを説明するわけじゃなくて、先生の人柄とか現場でのすごみ、真剣さっ

ていうことを、一目で分かるんだと思うんですね。だからこそ、皆さんが、中村先生のためならってことで付き従った。パキスタン、アフガニスタンのほうもそうだったな、私自身もそうだったなというふうには思っていました。

當眞　：ありがとうございます。「言葉で何を言うかではなくて、何をするかだ」っていうことは、中村先生が繰り返しお話しされていたということで。この何をしたかということ自体が、揺るがないこととして、現地の人たちの目の前にあった。それから、何をしてもらいたがっているのかとか、何が必要なのかっていうことを見定めつつ、何をするかを判断する。そして、取り組みながら、また見定めていくみたいな動きを、非常に丁寧にされていたと思います。

その中で、いろんな形で、「つい手伝ってみたくなる」とかって、おっしゃっていましたが、中村先生が苦手なところ、ここは自分がしなきゃっていうふうにして拾いながらやってこられた方が、たくさんおられるんだと思うんですね。それをちょっとお話しいただければと思いますけれども。石風社の福元さんは、その辺りはいかがだったでしょうか。

福元　：何がですか。

當眞　：中村先生と出会われて、先生が、ここは苦手だというか、ここのところっていうのは、自分が引き受けて、ちょっとやってあげなきゃなっていうふうな感じの気分になる、人が、一緒に取り組みたいって思うようなところがあったっていうお話が出ていましたけれども。その点に関しては、ご自身の体験から、何かありますでしょうか。

福元　：そうですね。もう。

當眞　：あり過ぎて？

福元　：そうですね。どう言えばいいんでしょうかね。難しいな。先生にできないことを私がやったっていうことはないのでですね。

當眞　：そうでしょうか。

福元　：はい。どんなふうに言えばいいんでしょうかね。

當眞　：ちょっと、私が見ていて、日本に帰ってこられた時間っていうのが、非常に貴重な時間でもあったと思うんですけれども。そのマネージみたいなところを、丁寧に、福元さん、されているようなことも含めてですね。結局、全体が回っていくのに、中村先生が、全てを統括して、全てをモニターして、家族の生活も、日本での活動も、現地での活動もっていうふうにいったわけではなかったんだと思うんですけれど。

福元　：私がやってたのは、主には広報です。最初のうちは、「哲っちゃんがやるから」というふうなことで、皆さん、集まられたと思うんですよね。ペシャワール会の立ち上げ時の会員は、同級生であるとか、山の仲間であるとか、あるいは、教会の関係者の人たちとか。それが、徐々に変わっていく。つまり、中村先生の事業に共感する人たちによって、会が質的に変わっていくわけです。そのときに、中村先生のやっていらっしゃることを、会報であるとか、書籍であるとか、あるいは、マスメディアで伝えるというような広報の一端は、やってきましたけれども。中村先生自体が、ある意味で、シンプルに見えて、非常に複雑な人で。物事を複合的に考えるっていいますか、非常に深く考える人なものですから。その辺の、思索の人としての中村先生を、伝えていくことのお手伝いをしたってことはあると思います。日本にも世界にも良心的な医師はたくさんいらっしゃるけれど、中村先生のような構想力のある人は稀です。

ある意味では、あの 12 月の 4 日の事件によって、全国の人たちに知られていくことになったわけですけれども。2001 年の 9.11 のときに、日本中が、中村哲とペシャワール会を発見したっていうふうなこともあったんです。まずは事業を、中村先生がやった事業を知っていただくってことと同時に、中村先生っていうのは、非常に深い思索の人であったと思いますので。それが、本だとか、いろんな形で残されております。私も、中村先生の文章については、ほとんど、99 パーセントぐらいは目を通して関わってきましたので。それが、次世代に伝わってくために、自分のできることをやっていこうとは思っております。

當眞　：ありがとうございます。これから、中村先生がされたことを生かしながら今後につなげていくっていうときに、どこの部分で自分がどう関われるかを、それぞれが考えながらが動いていくことになると思いました。

その中で、何よりも、まず出会うということが必要ですが、中村先生が生きておられたときには、今日、大学生の中にも講演会を聞いたということが一番最初のきっかけだったという方がいました。高校生たちは、亡くなったという記事を読んだことが、存在を知ったきっかけだったということでした。メディアの方々が、メディアを通して、中村先生のことについての報道を、工夫しながら続けていくことが、結果的にそういう出会いの機会を継承していくことにも繋がることと思います。

みんなで一丸となって一つのことをしていきましょうということではなくて、それぞれの立ち位置で大事と思うところをつないでいくことを工夫していきつつ、時々集まって、それぞれのことをシェアし合う、ということで、また方向を見いだしていくというような、そういうサイクルが回っていくことが大事なのかなっていうことが、今日この会に参加させていただいて、私も感じたところです。

そういう動きの中で、大学だからできること、大学がやったほうがいいことを見極めながら、ご相談させていただきながら、場をつないでいく、機会をつないでいくことができればと思います。そして最終的には、涸れない泉のように、中村先生が生きてこられた中で実現したこと、それに触れて活動してこられた方々から学べることが、泉のように、こんこんと湧き続けていくことが大事ではないかと思いました。今、これだけいろいろ難しいことが起きている世界の中で、一つの智慧の泉、励ましの泉、心のよりどころと生き方を考えるきっかけとなる泉。それを涸らさない、一時期の打ち上げ花火ではなくて、こんこんと、淡々と涸れない泉のように続いていくことが大事だと感じました。

それでは、ちょうど、あと数分になりましたので、まだ続けたい座談会の時間ですけれども、私のコーディネートは、ここで終わらせていただいて。ここから、総合司会の堀さんにバトンを渡します。どうも、皆さん、ありがとうございました。

《閉会のあいさつ、中村哲先生九大プロジェクトの役割―内藤敏也理事―》

堀　　：皆さま、お疲れさまでした。本当に、このような会が持てて、胸がいっぱいです。
最後に、九州大学の内藤敏也理事より、ごあいさつを申し上げます。

内藤　：九州大学、「中村哲先生の志を次世代に継承する九大プロジェクト」の取りまとめをしております、理事事務局長の内藤でございます。まずは、このような機会を持てたこと、この会が、とても盛大に開催され、また、多くの皆さまに、確かなものが残せたことに深くお礼を申し上げさせていただきます。私も、それぞれのグループを、見て回らせていただきました。多くのグループでは、中村先生の実像とか、中村先生をどう伝えていくのかというようなことが、かなり議論になっていたかと思っております。

グループによっては、派生して、現在のアフガニスタンをどう評価するのか（欧米系のマスコミで報じられるままの評価でいいのか）どうかというようなお話もございました。

私としては、中村先生を、いわゆる偉人として後世に伝えていくというよりは、中村先生の行動であるとか、悩みも含めた考え方であるとか、試行錯誤の経過であるとか、そうした事実をきっかけに、いろいろな議論をしていく、あるいは、こうした場で、さまざまな思いを交わしていく、これこそが、これから私どもが目指さなければならないことかと思った次第でございます。

ここで、私どものプロジェクトの現在の状況について、簡単にお話をさせていただきたいと思います。「中村哲先生の志を次世代に継承する九大プロジェクト」として、今、三つの柱で事業を進めております。一つは、鏑木先生にコーディネートをいただいており、九州大学の基幹教育科目として、今年度（2021）から開講をいたしました「中村哲記念講座」。これについては、次年度も引き続き開講し、受講生、あるいはＴＡという形で協力してくれる学生たちとも、中村先生をきっかけとした様々な議論を、展開をしていきたいと思っております。

二つ目が、「中村哲医師メモリアルアーカイブ」。（座談会会場のきゅうとコモンズの入り口を指し）そちらにあります展示スペースの運営でございます。これにつきましては、本日ご出席の方も含めて、いろいろな方のご協力をいただきながら、さらにリニューアルもしてまいりたいと思っております。

三つ目、これが、今後大きくなっていくであろう「中村哲著述アーカイブ」でございます。中村哲先生が残されたさまざまな著述などを、デジタルという形で、まさに今後の九大図書館の一つの目玉として、外部の方々にアクセスいただけるアーカイブとして運営してまいりたいと思っており、ここにいらっしゃる方々も含めて、多くの方々から資料をご提供頂き、日々、充実させていくところでございます。ここで、お礼も含めてご紹介をさせていただきたいのですが、実は、石風社様とペシャワール会様のご協力とご許可をいただきまして、中村先生の著作の本文を、この著述アーカイブでご紹介できるよう、進めているところでございます。この準備が整い次第、公開を進めてまいりたいと思いますので、

どうかよろしくお願いいたします。

このようなさまざまなプロジェクトをつなぐものとして、今回のようなイベントも、折に触れ開催させていただきたいと思います。今回は、高校生の皆さんや、「哲縁会」という形で活動している九大生の皆さんとも、つながるきっかけになったのではないかと思いますので、さまざまな活動をつなげる中心（ハブ）として、九大がお役に立てればというふうに思っているところでございます。

最後に、お礼を申し上げたいと思っております。本学の活動を行うにあたって、日々、大きなご支援をいただいてるペシャワール会の皆さまに、改めてここでお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございます。それから、本日ご出席いただいてますマスコミの皆さま。報道を通じてだけでなく、資料の提供や、さまざまなサジェスチョンをいただくといったご協力を日々いただいております。今回は、どちらかというと、個人参加的な形でつながらせていただきましたけれども、今後も、マスコミの皆さまのご支援、ご協力や、ご助言をいただきながら進めてまいりたいと思います。改めてお礼も含めてご紹介をさせていただきます。どうもありがとうございます。

そして、何よりも、この日曜日、さまざまなご予定もある中で、本日、ご出席をいただきました多くの皆さまに、改めてお礼を申し上げます。

また、私の立場として、今回、運営にあたっていただいた九大教職員の皆さまにもお礼を申し上げたいと思います。今回、全体のコーディネートをいただきました鏑木先生に、當眞先生、久保館長、飯嶋先生。それから、準備の中心になって活躍いただいた図書館 e リソース課長の堀さん、いろいろ頑張っていただきましたスタッフの皆さんに、改めてここでお礼を申し上げまして、最後、今回のこの会を閉じさせていただきたいと思います。

本当に、今日はどうもありがとうございました。

（了）

【ほかの参加者への質問！集】　＊インタビューシートの中の参加者へ質問

高校生・大学生へ	中村哲先生について、みなさんはどんなことを知りたい、学びたいと思っていますか？ ＊
	先生について学ぶ前と後でアフガニスタンのニュースを聞くときに何か変化はありましたか？
	(高校生→大学生のみなさんへ) 中村哲先生から学んだことを今後どのような場面で生かしていきたいと思いますか？ 今の情勢の中で国際協力の改善すべき点やあり方についてどう思いますか？ これから先生の思いの発信方法はどのようなものがありますか
	（若い人たちへ） いつ、どこで、何をきっかけに中村さんの活動を知り、関心を持ちましたか？
	（高校生や大学生の皆さんへ） 　中村さんの顕彰を続け、事業の継続につなげていくためには、その重要性を強調するだけでなく、中村さんとその活動を知り、学ぶこと自体が「興味深い」「面白い」と若い世代に思ってもらうことが大切ではないかと考えています。実際のアクションを伴う学びとすることが一案かとも思いますが、若い世代の方々が楽しみ、興味深く感じながら中村さんの活動に触れてもらうためにはどうしたらいいと思いますか。
報道関係の方へ	国際情勢が変動する中、中村哲先生の活動や価値観には変化はあったのでしょうか？　＊
	（高校生→報道の方へ） これから先生の思いの発信方法はどのようなものがありますか？ 中村哲さんと中村さんのような活動をしている他の団体・人との違うところは何だと思いますか？
先生方へ	中村哲先生について伝える際に、「道徳的」なメッセージ性を、どのくらい出そうと(または抑えようと)しているのでしょうか。＊
	（高校生→先生方へ） どうやって伝えようと工夫していますか。
	（高校生→教育、研究に関わる方へ） 中村哲さんと中村さんのような活動をしている他の団体・人との違うところは何だと思いますか？
ペシャワール会の方へ	（高校生→村上会長へ） 中村哲先生を一言で表すと？　先生と関わった中で印象に残っていることは？ これからのペシャワール会について教えてほしい。ペシャワール会について詳しく教えてほしい
	（高校生→現地ワーカーOB の方へ） 中村哲先生とどのような関わりがありましたか？ 現地で働く中で大変だったことはなんですか？
その他	中村先生のどのような所に関心がありますか？
	いろいろな活動をされている方、されたい方へ。コロナ禍で制約がある中で、活動を継続するための工夫や心掛けがあれば…。
	現在のウクライナの情勢を中村哲先生の視点に立つとどのように考えられるかお聞きしたい。
	中村さんの活動を知って何か自分で行ったか。 あなたが中村先生の活動を調べて、気づいたことは？